

ハイスクール D × D × 果物鎧武

アルフォー

神様のミスで転生することになった（本人は知らない）。

転生先はハイスクールD×D。

果たしてこの世界でやっていけるのか。

注意

- ・誤字、脱字が多いかも
- ・作者の原作知識はアニメだけなのでちょっと変になるかも

目次

＜1＞転生	1
＜2＞黒歌との出会い	5
＜3＞黒歌の過去と修行	12
果物鎧武 旧校舎のディアボロス	17
＜1＞日常	17
＜2＞はぐれとグレモリー	22
＜3＞シスターとクラック	29
＜4＞神父と墮天使	34
＜5＞解決そして正体	39
＜6＞オカルト研究部に入部します。	47
＜幕間＞生徒会と使い魔	54

果物鎧武 戦闘校舎のフェニックス

《1》喧嘩売ります。.....

《2》修行します.....

《3》決戦の時.....

《4》決着つけようぜ.....

《5》解決後、そして.....

果物鎧武 ヘルヘイムの侵略 1

〔1〕侵略.....

〔2〕躊躇いと仲間.....

〔3〕おかえり.....

果物鎧武 月光校庭のエクスカリバー

{1} 聖剣.....

{2} 木場の様子.....

〔3〕	聖剣が来た、そして戦い……………	142
〔4〕	聖剣使いと修行……………	155
〔5〕	神父……………	166
〔6〕	堕天使現れる……………	183
〔7〕	聖剣と魔剣……………	190
〔8〕	絶望とジンバー……………	207
〔9〕	レモンとピーチ……………	217
〔幕間〕	蓮と黒歌……………	228
	果物鎧武 停止教室のヴァンパイア……………	235
〔1〕	プールです……………	235
〔2〕	用具室と魔王……………	248
〔3〕	父親とご対面……………	261
〔4〕	魔法少女と新たな予感……………	272

『5』	吸血鬼の後輩……………	280
『6』	力……………	293
『7』	インベス？と小猫様……………	305
『8』	トップ会談……………	313
『9』	襲来！古き魔王、新たなライダー……………	320
『10』	赤対白、武将对泥棒……………	330

< 1 > 転生

(ここはどこだ?)

俺は気が付くとあたり一面が真っ白な部屋にいた。

「一体どこなんだここは?」

「ここはあの世に行く前の場所のようなものですかね。」

「うわっ!？」

いきなり後ろから声が聞こえ驚きながらも振り向いた。

するとそこには見知らぬ女性がいた。

でも普通に可愛いなあ

「ふふっ可愛いだなんてありがとうございます」

あれ? ナチュラルに心読まれた?

「読んでない。読んでない。」

「ばっちり読んでじゃん!」

「そんなことは気にせず。初めまして中辻蓮《なかつじれん》さん」

「普通は気にするんだがなあ。まあ、初めまして。あなたはどちら様ですか？」

「私は神様です」

何をいきなり言ってるんだ？

まあ勝手に心読んでるからありえそうちゃありえそうだけど。

「はあ。でその神様が俺に何の用ですか？」

「単刀直入に言いますと、あなたは死にました。」

はあ!? 俺死んだ記憶ないけど!?

「ああ。死んだ記憶がないのは突然後ろから通り魔に頭をドンとハンマーで殴られ即死したからです。」

「なんか嫌な死に方だなあ。もうちょっとましな死に方あるでしょ!!」

まあいいや。なら今からあの世行きですか？まさかそれともラノベのみたいに転生ですか!!」

それだと嬉しいな。いやそうでないとおれ彼女いない歴〓年齢のままあの世に行く上、まだ全然生きれてないんだぞ。

「はい。あなたが言う通り転生できますよ。」

よっしゃー!!! このままあの世に直行は嫌だったからね。

「ちなみに転生する世界とか決めたり、転生特典とかとかあるんですか？」

「残念ながら転生先はこちらであらかじめ決まっています。」

ですが、転生特典はありますしそちらは自由に決めれますよ。」

「そうなんですか。ちなみに転生先は？」

「ハイスクールD×Dの世界です。」

ハイスクールD×D？残念ながら知らない作品か。

「それでは特典を決めてください。特典は三つまでです。じっくり悩んでくれても大丈夫ですよ。」

「わかりました。」

〃〃30分後〃〃

「決まりました。」

「それでは言ってください。」

「はい。まず一つ目は仮面ライダー鎧武の戦国ドライバ―とゲネシスドライバ―、ゲネシスコアと全ロックシードで。」

「はい。大丈夫です。他は？」

「二つ目はクラックを自由に生成と閉じれるようにしてください。」

「三つめはベルトが万が一壊されても修復したりできるぐらい賢くしてください。」

「わかりました。それでは転生させます。」

「はい。ありがとうございました。」

「ええ。それでは次のあなたの新たな生に幸福があらんことを。」

「そう言われた後俺は意識を失った。」



ふう〜。何とかばれずに済みました。

もし私のミスで死んだってばれるのは嫌なのでよかったです。

「まあ。代わりに転生した後も何かとサポートするから許してね。」

「そう言って彼女は転生させた。」

＜2＞黒歌との出会い

蓮「転生できたのか」

近くには戦国ドライバーといくつかのロックシードがあった。

あれ？明らかにロックシードの数が足りない？それにゲネシスドライバーは？
今あるロックシードはオレンジ、パイン、イチゴなど通常のロックシードだけで
強力なスイカや

エナジーロックシード、カチドキと極はなかった。

神《無事転生できたようですね。》

突然頭の中に神様の声が響いた。

蓮《あのーロックシードとか足りないですけど・・・》

神《それは貴方自身には負荷が大き過ぎるので、

現段階ではこれぐらいしか無理です。ですが代わりにロックビークルは渡してお
きます。》

蓮《ありがとうございます。つまり強くなれば渡してくれるってことですね。》

神《その通りです。貴方が強くなりその負荷に耐えられるようになれば渡します。後、生活費は毎月ある程度振り込みます。何か有れば“神様”と頭で言ってください。》

蓮《わかりました。何かとありがとうございます。》

そういえば振り込むってどれくらい・・・これ何個0あるんだ？
すごい額振り込まれていて少し驚いた。

それともう一つ思ったことがあった。

蓮「なんか視点低くなってね？」

そして鏡を見ると中学生ぐらいになってた。



それから一ヶ月間普通に過ごした。

あの後神様から聞くと本当に中学生になってた。

ただし両親は海外で働いているようでなかなか会えないらしい。

そして俺が住んでいる所は駒王町という所みたいだ。

後、クラックを開いてヘルヘイムの森にも行ってみた。インベスやヘルヘイムの

果実もあり、

採取するとロックシードにもちゃんとなった。

ただ本当に何事もなかった。本当にどこかの物語か？と思うぐらいだった。

いや平和なのはいいんだけど……

そして今日は休日なので色んな所を散歩して駒王町を見て回っていた。

そして遠回りをして帰るとき路地の裏手を見ると、

10人ほどの男が傷だらけの女性を追い詰めていた。

男1「ようやく、追い詰めたぞ」

男2「大人しくしてもらおう」

女性「くっ！」

男3「それにしてもいい体してるな。」

男4「殺す前に楽しんでいいですかね？」

男1「ははっ。程々にしとけよ。」

そういった瞬間俺自身気づかない間に前に出て一人の男を殴り男たちと女性の間に入っていた。

男4 「テメエ、人間の分際で何しやがる!!」

蓮 「大勢で女性一人に寄ってたかってお前らこそ何しようとしてんだ!!

それにお前らも人間だろ!! なんでこんなことするんだ!!」

男1 「ハハッ。このガキ、悪魔も知らないただのガキか。

だったらあいつともども殺しても問題ねえか。」

そういうと男はよくアニメなどで出てくる魔法陣を空中に出し攻撃してきた。

俺はそれらを紙一重でかわした。

蓮 「そうか。そういうやここアニメとかラノベとかのフィクションの世界だったなあ。」

男1 「ゴチャゴチャぬかしながらも躲したか。」

蓮 「お前らその人をどうするつもりだ。」

男1 「決まってんだろ。殺すんだよ。」

まあその前に楽しませてもらうがな。ハハッハハッハハッ。」

そう聞くと俺の中で何かがプツツと切れて戦国ドライバーを装着し一つのロックシードを取り出した。

蓮「許せねえ……。俺は絶対にお前たちを許さない。変身!!」

オレンジ

ロックオン

ソイヤ!!

オレンジアームズ!花道オンステージ!

そして俺は仮面^{アーマードライダー}ライダー鎧武に変身した。

蓮「ここからは俺のステージだ!!」

男1「ちっ!何も知らんガキかと思えば神^{セイクリッド・ギア}器持ちか。やれーお前ら。」

男1以外の奴ら「了解!」

そういうと奴らは襲い掛かってきた。

俺は大橙丸と無双セイバーで応戦した。

だがさすがに戦闘経験もなく数も向こう多いので不利だった。

蓮「だったら。」

俺はヒマワリロックシードを3つイチゴロックシードを1つ使い初級インベス
3体とシカインベスと呼び出し

相手を分断した。

男2 「なんなんだこいつら！見たこともねえぞ！」

男3 「しかも、意外に強い。」

少しずつ状況はこちらに有利になり、

俺は隙を見て無双セイバーと大橙丸は合体して敵を倒していった。

そして最後一人が残った。

男1 「ヒィー。ゆ、許してくれ。そいつにはもう手を出さねえ。

だから殺さないでくれ。」

蓮 「言っただ俺はお前らを絶対に許さねえってな。」

そう言うのとドライバーに付いていたオレンジロックシードを無双セイバーに装着した。

ロックオン

一、十、百、千、万

オレンジチャージ

オレンジ状のエネルギーに相手を閉じ込めエネルギーとともに切り、その男は爆

散した。

そしてインベスをヘルヘイムの森に戻して俺は変身を解除し女性に話しかけた。
蓮「大丈夫ですか？」

女性「大丈夫よ。ありがとにゃ。」

蓮「俺は中辻蓮だ。話を聞きたいし傷の手当てをしたいから、家に来てもらって
もいいか？」

女性「ええ。わかったわ。私は黒歌にゃ。」

そして俺はサクラハリケーンを使い黒歌を連れ家に戻った。

< 3 > 黒歌の過去と修行

俺たちはとりあえず家に着いた。

そして黒歌の応急処置を終えてさっきの奴らについてまず聞いた。

どうやらさっきのは悪魔らしく

それ以外にも天使、堕天使などがいるらしい。

そして3大勢力や悪魔イヴァイルベースの駒などについても聞いた。

それを聞いた時黒歌は「本当に何もなかったのかにゃ・・・」と呆れていたがそんなことは知らん。それで次に何故追われていたのかを聞くとどうやら黒歌の主人が妹の白音の力を無理矢理覚醒させようとしたらしく、

それを守るため主人を殺しはぐれ悪魔になったらしい。

そして今はその妹に危害が加わらないようにグレモリー家に託したらしい。すると黒歌は家を出て行こうしていた。

蓮「どこに行くんだ？」

黒歌「出て行くのよ。ここにいたら追手がここに来て迷惑をかけるにゃ。」

蓮「行くあてはあるのか？」

黒歌「それは・・ないけど、でも助けてもらったのにそこからまた迷惑はかけられないにゃ。」

黒歌は目をそらしながらも言った。

蓮「別に迷惑じゃないよ。むしろ親も家にいなくて寂しかったんだ。それに話を聞く限り黒歌は何も悪くないじゃねーか。むしろ妹を守ろうと頑張ったじゃねーか。」

黒歌「それでも私は白音を守り切れなかったにゃ!!」

蓮「それは結果論だろお前は十分やったじゃねーか！それにその白音も今はグレモリーの家で生きてるんだろ!! だったらおまえよくやったよ。」

少しの沈黙の後

黒歌「本当に私みたいな厄介者がいてもいいのにかにゃ。妹一人しっかり守れない私が。」

黒歌は涙目になりながらもそう言った。

蓮は黒歌を撫でながらこう言った。

蓮「いていいよ。それと今までよく頑張ったな。」

黒歌はそう言われると蓮の胸に顔を押し付け泣いていた。

蓮は黒歌が泣き止むまで頭を撫でてあげていた。



その後黒歌は俺の家に住むことになって1年が経過した。

元々家がでかいので空き部屋はいっぱいあった。

さらに強くなるためにもはぐれ悪魔狩り（人を食べるぐらいまで堕ちたもののみ）や

黒歌のけがは治ってからのはたまに稽古をつけてもらうことになった。

ただ・・・

蓮「黒歌、強すぎません!？」

黒歌「蓮が戦闘経験が少ないのもあるけど簡単には負けないにゃ♪」
戦績100戦9勝91敗とひどいものだった。

黒歌「そういえば、蓮は高校、どうするにゃ？」

蓮「家から近いし駒王学園にしようと思ってる。」

黒歌「にゃにゃ!？」

なぜか黒歌は驚きスマホを落とした。(黒歌のスマホは俺が買ったもの)

その後必死に「あんな悪魔や人外の巣窟はやめとくにゃ!」と言ってきた。

蓮「なんでそんなに必死に止めようとするの?」

黒歌「それは・・・た、ただの勘にゃ。」

黒歌は明らかにとってつけたように言った。

絶対何か隠してる思い少しジト目になると「うゝゝ、白状するにゃ」といった。

それで白音が塔城小猫という名で通っていて、

「私にはもう白音と合わせる顔がないにゃ」としめくつた。

蓮「そんなことはない。黒歌は優しいから話せばきっと仲直りできるはずだ。

もちろん、なんとか俺も協力するから、な。」

黒歌「うゝゝ。ありがとにゃ。やっぱり蓮は優しいにゃ。」

こうして俺は黒歌と白音を仲直りさせると決心しながらも、

駒王学園に受験し見事合格したのだった。

果物鎧武 旧校舎のディアボロス

〈1〉日常

どうもアルフォーです。

リアルが忙しく投稿できませんでした。

すいません。

今も少し忙しいので短いですが許してください。

それではどうぞ。

それから一年が経過した。もう高2になっている。

とりあえずロックシードの扱いにも慣れてきた。

だが子猫さんには会えていない。

会おうかと思えば黒歌が「ま、まつにゃ。まだ心の準備が・・・」と毎回止めて

くるのだ。

本人が言っている以上どうにもできない。

後はいろんな人と友達になった。まあ、その中にも厄介なのが・・・ちようど来た。

女子達「までー！」「今日こそ息の根を止めてやる！」

今女子に追われ殺されかねない状態になっているのが一誠と松田と元浜だ。よくもまあ何回もあk一誠「蓮、助けてくれー!!」助けるつもりはねえ。

蓮「オラッ！」

変態三人「グハッ！」

とりあえず持っていたカバンで頬をまとめて殴った。

そうして止まっている間に三人は捕まった。

女子達「」「ありがとう。蓮君。」「」

蓮「いいけど、こいつら次は何したんだ？」

女子1「こいら剣道部の部室をのぞいていたの!!」

蓮「なるほどなあ。こいつらには俺から言っておくから許してあげてくれない？」

女子1 「蓮君が言うなら任せるね」

女子2 「さすが、蓮君」

蓮 「じゃあ、こいつら借りるね。」

そう言う俺は三人を引きずって行った。

蓮 「お前ら。これで何回目だよ・・・そろそろやめとけよ。じゃないとしまいに停学食らうぞ」

変態三人 「「男の夢だ。絶対に諦めん。」」

蓮 「やれやれ。あと数発殴っとくか。」

変態三人 「「すみませんでした。」」

と、まあこんな日常を送っている。

なんだかんだ俺はこんな日常が好きだ。この三人には改心して欲しいがな・・・



次の日

俺が登校し教室に入ると教室全体がざわついており、

なぜか松田と元浜は泣いていて、一誠はにやにやしていた。

蓮「おはよう。お前らどうした？」

松田「くそー。くそー。」

元浜「くうー、一誠のやろう。」

一誠「おはよう、蓮。それより聞いてくれ実は・・・俺に彼女ができたんだ。」

蓮「え？」

一誠に彼女が？確かに顔はいいが、中身は変態の一誠だぞ。

そうか俺、疲れているんだ。いつもこの三人を止めていたから。そうだ。そうに
違いない。

蓮「一誠。俺は疲れているみたいだから。今日は帰るはそれじゃ・・・」

一誠「待て待て待て。現実だよ。ちゃんとほら写真だってあるんだ。」

そこに写っていたのは紛れもなく可愛い部類に入る顔立ちと抜群のスタイルを持つ女性だった。

蓮「一誠、今ならまだ間に合う。今すぐその子に脅したことを謝り許してもらおうんだ。」

一誠「脅してねえよ！なんか今日のお前俺に対してひどくねえか」
その後、何度も言うのでさすがに信じることにした。

〈2〉 はぐれとグレモリー

どうも、アルフォーです。

長らくお待たせしました。忙しかったのもおさまったので、これからはまた頑張ります。

応援よろしくお願いします。

休みも終わり憂鬱な月曜日になった。

そして教室に入るや否や一誠が話しかけてきた。

一誠「蓮！お前は覚えているよな、俺の彼女の夕麻ちゃんのこと。！」

蓮「何のことだ？お前に彼女がいたこと自体初めて聞いたぞ。」

（蓮は鎧武以外は普通の人間なので覚えていません）

一誠「そんな・・・」

あいつは朝っぱらから何を言ってんだか。

でもなんかおかしい気もすんだよな・・・。
そう思いながらも俺は授業の用意をした。



その後何事もなく次の日の夜

俺はとある廃工場にいた。

その理由は目の前の奴である。

蓮「おまえ、はぐれ悪魔であっているな？」

はぐれ悪魔「うん？この匂いは旨いのかな？ 不味いのかな？」

蓮「俺はお前に食べられるほど弱くねえよ。『変身』」

パイ

ロックオン

ソイヤ!!

パイニアームズ！粉碎デストロイ！

蓮「今日はこいつでやるか。」

そういうと俺はパイニアイアンを投げ相手に確実にダメージを与えていった。

はぐれ悪魔「くそっ神セイクリッド・ギア 器持ちか！小癪な！」

そういうとはぐれ悪魔はパインアイアンを掴み無理やり引き寄せようとした。

だったら。と思い無双セイバーをパインアイアンの持ち手のグリップ部分を合体

し

跳躍ではぐれ悪魔の頭上を通るとき切りつけた。

はぐれ悪魔「ぐっ！」

はぐれ悪魔がひるんだので俺はカッティングブレードを倒した。

ソイヤ！

パインスカッシュ！

俺はパインアイアンを上に向けてはぐれ悪魔に向かってパインアイアン蹴るとパインアイアンが巨大化し、奴の頭に覆いかぶさった。

そして俺そのすきに足にエネルギーを纏いそのまま無頼キックを奴に食らわせた。

そうするとギアアーーーという断末魔とともに奴は爆散した。

よしこれで今日は「そのあなた、ここで何をしているのかしら？」終われな

いか・・・。

そして後ろを振り返ると確かうちの学校のオカルト研究部の奴らが・・・なんで一誠まで一緒なんだ？

蓮「何ってばぐれ悪魔を倒しただけだが？」

リアス「そう。はぐれ悪魔の討伐には感謝するわ。でもねここは私が管理している土地なの。あまり勝手なこととはしないでもらえないかしら。」

蓮「そう言われても別に悪いことはしてねえんだし。いいだろ別に。」

蓮（黒歌以外の普通の悪魔に会うなんて久しぶりだな。それにこの様子からして一誠も悪魔になったんだな。）

リアス「それでもよ。一応話を聞きたいけど未知の神セイクリッド・ギア器を持っているようだ

し拘束させてもらうわよ。祐斗！」

木場「はい。部長。」

そういうと木場は剣を出しナイトの速度で迫ってきた。

俺はとっさに無双セイバーとパインアイアンを分離し無双セイバーで防いだ。

蓮「やめろ！俺は戦う気はないんだ。」

木場「そう言われても部長の命令だからごめんね。」

そういうと木場に何度か切りつけられた。

蓮「だったら。これだ。」

リンゴ

ロックオン

ソイヤ!!

リンゴアームズ！デザイアフォビドゥンフルーツ♪

リアス「姿が変わった!!」

朱乃「しかも、武器も変わっていますわ。」

俺は木場の攻撃をアップリフレクターとソードブリンガーで防ぎながら隙を見てうなじに手刀で気絶させた。

リアス「裕斗！なら、同時にやるわよ。」

一誠・小猫・朱乃「はい！部長！」

そういうと四人がかりできた。

まだやる気かよ。仕方がねえ。

俺はヒマワリロックシードを二つほど使い初級インベスを出した。

リアス「なんなの！こいつ。」

蓮「じゃあな。これからはいきなり襲い掛かってくるなよ。」

リアス「ま、待ちなさ、ぐっ。」

そういうと俺はクラックを開きヘルヘイムの森から帰ることにした。

その後小猫ちゃんに対してまでインベスを使ったので、

黒歌にこっぴどく叱られたのだった。



リアスサイド

変な鎧武者が何もないところにジッパーみたいなものを出し

その中に入った後それが閉じると鎧武者の出した使い魔？も消えた

朱乃「一体彼は何者だったんでしょうか？」

小猫「見たこともなかったです。」

リアス「まあ。考えるのは後にして裕斗を連れて部室に戻りましょう。」

一誠・朱乃・小猫「はい。部長。」

そうして部屋でも話してみたが彼の正体の手がかりもなく。
何もわからなかった。

ちなみにこの作品ではリングやドラゴンフルーツエナジの副作用はなくなっております。

〈3〉シスターとクラック

グレモリー眷属と戦った俺はヘルヘイムの森を経由して帰った次の日

俺は学校に向かっていて最中一誠が金髪の外国人を連れて学校とは別の方向に向かっていた。何やってんだあいつ？

蓮「よお。一誠、何やってんだ？」

一誠「蓮か。この子アーシアって言うんだが教会の場所が分からないみたいでな。だから道案内してるんだよ。」

アーシア「~~~~~。~~~~~。」

蓮（全然分からん）

一誠「~~~~~。」

蓮（ええー!? いつの間にこいつこんなグローバルになったんだ!?）

蓮「い、一誠。おまえアーシアが言っている事分かるのか!?」

一誠「え、分かるけど。」

蓮（あ、そういや一誠悪魔に転生したんだったな。）

蓮「そういや、教会ってどのだ？この近くだとあの古いところか？」

一誠「まあ、多分な。」

蓮（でも、あんなところ教会として機能してるのか？

少し黒歌に調べてもらうか。）

蓮「それならしつかり案内してやれよ。じゃあ先に学校行ってるから。」

そう言うで一誠と少し離れたところで家に電話をした。

蓮『もしもし。』

黒歌『もしもしどうしたにや？』

蓮『ちょっと頼みたい事があってな。この町にある。寂れた教会があるだろ。

そこを少し調べて欲しいんだ。頼めるか？』

黒歌『わかったにや。でもなんでにや。』

蓮『なぜかあの寂れた教会にシスターが派遣されたんだ。

でも明らかにあの教会はもう使われてないのにだ。

だからなんかあるんじゃないかと思ってるな。』

黒歌『そういうことかにや。わかったにや。』

あと次白音に何かしたら・・・わかるよね？」

蓮『はい。絶対に何もしませんなんかあったら攻撃することなく逃げます。』

黒歌のドスの効いた声にビビり速攻で答えた。

黒歌『じゃ。こっちで調べとくにゃ。またにゃ。』

蓮『また。』

電話を終え俺は学校に向かった。

そういや一誠あのスピードで間に合うのか？

案の定一誠は遅刻して先生に怒られていた。



そして俺が学校からの帰り道、

蓮「なんで、これがあるんだよ・・・」

俺の目の前にあったのはクラックだった。

それも自然に現れたもので俺の能力でも閉じれない。

だが幸いなことにあまり人の通らない細道でクラックも小さかった。

蓮「とりあえず。クラックが閉じるまでここで待つか。」

10分後

ようやくクラックが閉じた。

インベスも出ることはなかった。

とりあえず聞いてみるか・・。

神様~~~~

神様『なんですか？』

蓮『なんでか僕が出現させてないのにクラックがあつたんですがどういふことですか？』

神様『ああ~~~~。おそらくクラックを短期間に何度も開けたから二つの世界がつながりやすくなったんじゃないですかね。

現に鎧武の原作では後半にクラックが最初より多く出現してたでしょ。』

蓮『なるほど。どうすればなくなりますかねえ？』

神様『クラックをあまり使わなくなればましにはなると思いますよ。』

蓮『わかりました。』

さてクラックが使えないなら逃げる手段どうしよかな？

まあその時考えればいいか。

そう思いながらも俺は家に戻った。

ちなみにこの後一誠たちとフリードが戦っていることは全く気が付かずに。

〈4〉 神父と墮天使

俺はクラックが閉じたの確認してから帰りその次の日の晩

黒歌「ただいまにゃ。あの教会には墮天使がいたにゃ。

それに何やら今日墮天使が何かする気みたいにゃ。」

蓮「やっぱりなんか企んでたか。でも何をする気だ？」

黒歌「その事だけど、あのシスター^{セイクリッド・ギア} 器を持っていたからその事が関係する

かもしれないにゃ。」

蓮「まあ。何しようとしてるのか知らんが。止めに行くか。」

黒歌「やっぱりそう言うと思ったにゃ・・・。」

蓮「よくわかってるね。じゃちゃちゃっと行きますか。」

黒歌「気をつけてにゃ。はぐれ神父も結構いそうだから。」

蓮「わかった。」

そして俺はサクラハリケーンを展開して教会に向かった。



一誠サイド

俺は今レイナーレに連れ去られたアーシアを助けに木場と小猫ちゃんと教会の近くに來て様子を見ている。

するとサクラのバイクが教会の前に止まった。

あれ？あれって蓮じゃ。あれは！

蓮サイド

俺は教会の前に着いた。

そして教会に入る前に戦国ドライバーをつけて変身することにした。

オレンジ

ロックオン

ソイヤ！

オレンジアームズ！花道オンステージ！

さて行きますか。俺は教会のドアを蹴破って入っていった。

神父「來たね。あゝくまちゃ・なんすかこの鎧武者」

蓮「おい墮天使たちは何処だ？ さっさと教えろ」

神父「祭壇の下の地下にいるよーん。」

蓮「随分素直だな。」

神父「そりゃあんたここで死にますからね。教えても問題ナッシングってことよ。」

蓮「そうか。なら無理矢理通らせてもらおう。」

ソイヤ！

オレンジオーレ

俺はカッティングブレードを2回下ろして神父にオレンジ色の斬撃を飛ばしてそれに気を取られている隙に神父に近づき峰打ちをした。

神父「ぐっ！ なんだこいつ一撃一撃が重い。」

これは逃げるが勝ちってやつすね。てわけでバイチャラバ。」

蓮「ぐっ！」

そう言うと神父は閃光手榴弾で俺が怯んでいる隙に逃げてしまった。だがそんな事に構っている場合じゃねえ。

そう思い祭壇をぶっ壊すと地下への階段があった。

そして降りて行くとアーシアが十字架に捕らえていた。

その近くには堕天使と神父達がいた。

堕天使「あら？何のようかしら？そこの鎧武者？」

蓮「おまえこそ何していやがる！」

堕天使「簡単な事よ。彼女の神セイクリッド・ギア器をもらうのよ。」

蓮「なるほどやっぱりお前は倒す。」

堕天使「下等な人間如きが、至高の堕天使であるレイナーレ様に向かって生意気な。やっておしまい。」

そう言うで大勢の神父どもが来た。

流石に数が多すぎるなならば使いたくなかったが、

俺は神父達の下に大きなクラックを作り神父の半分ぐらいを落とした。

レイナーレ「何今のは！」

蓮「これで終わりじゃねえ」

キウイ

ロ
ッ
ク
オ
ン

ソ
イ
ヤ
！

キ
ウ
イ
ア
ー
ム
ズ
！
撃
・
輪
・
セ
イ
ヤ
ッ
ハ
ッ
！

蓮「まだまだいくぜ！」

〈5〉解決そして正体

どうもアラフォーです。

少し遅れてすみません。

今回は少し長いですがどうぞ。

一誠サイド

あの鎧武者が入っていった後少ししたら俺たちも教会に入ってみると祭壇が破壊されていて地下への階段もあった。俺たちが地下に行くとき鎧武者が神父達と戦っていた。そしてその近くには夕麻ちゃんとアーシアがいた。

一誠「アーシア!!!!」

▼▼▼

蓮サイド

俺はキウイ撃輪で神父を倒していった。すると

一誠「アーシア!!!!」

一誠の声が聞こえてきた。あいつら!! 悪魔が光に弱いってわかってんのか?

まあいいとりあえず神父はおわっアーシア「キャー————」まさか!?

そう思いアーシアの方を見てみるとアーシアから緑色の光がレイナーレに吸い込まれて行くのが見えた。

レイナーレ「これよ! これで私は至高の堕天使になれる!」

どこまで汚ねえ奴なんだ!!

一誠「おい! アーシアの神 セイクリッド・ギア 器を返せ!!」

レイナーレ「そんなことするわけないでしょ。

このためにどれだけ上を欺いてきたと思っているの。」

俺は今だ! と思い一誠に気が向いている間にアーシアにつながっていた鎖を切つてアーシアを一誠に投げレイナーレを切ったがしかし、

レイナーレ「ふふふ、すばらしいはこの力。」

蓮「ちっ!」

傷ついた部分はすぐに治ってしまった。

蓮「おい！お前ら、さっさとアーシアを連れて逃げろ！」

一誠「・・・！すまねえ！」

そういうと一誠はアーシアを連れて上に登って行った。



一誠サイド

一誠「アーシア！しっかりしろアーシア！」

アーシア「イ・・・ッセー・・・さん・・・」

アーシア「イッセー・・・さん、私・・・日本に来てよかった。イッ・・・セーさん・・・と少しの・・・間だけでも・・・お友達に・・・なれ・・・て・・・」

一誠「バカヤロー！それはこれからだろ！そんな悲しいこと言うなよ！」

アーシア「イッ・・・セー・・・さん、私と・・・お友達に・・・なっ・・・て・・・くれ・・・て、ありが・・・と」

そういうと彼女は静かに息を引き取った。

一誠「アー・・・シア・・・」

レイナーレ「あゝあ、死んじゃたわねえ、その娘」

一誠「ほかの奴らはどうした。」

レイナーレ「置いてきたわよ。あんたたちも逃がすわけにはいかないからね。」
そう言っていると木場たちが上がってきた。

レイナーレ「ご覧なさい、あんたたちから傷つけられた傷も彼女から奪った神器、
トワイライト・ヒーリング聖母の微笑を使えばこの通り」

そういうとレイナーレに緑色の光が出てきて傷が治った。



蓮サイド

やっぱりこいつ許せねえ!!!

蓮「お前らは下がってろこのクズは俺がやる。」

一誠「いや、俺も戦う！」

蓮「それ意味わかってんのか。悪魔にとって光は致命的なんだぞ！」

一誠「わかってるよ。それでも俺は戦う。アーシアの……俺の友達の仇をとる！」

蓮「……足引っ張るなよ。」

一誠「ああ。もちろんだ。あいつをぶっ倒すぞ。」

蓮「おう。」

イチゴ

ロックオン

ソイヤ！

イチゴアームズ！シュシュとスパーク！

蓮と一誠「ここからは俺たちのステージだ！」

レイナーレ「ふん。しよせんは人間と下級悪魔の分際で調子にのるな！」

そういうと一誠は神^{セイクリッド・ギア}器を展開しレイナーレに殴りにいった。

一誠「神様・・じゃだめか悪魔だったら魔王様か。だったら魔王様頼みますからこいつを一発殴らせてください。」

だがレイナーレは一誠に光の槍を投げたがそれはイチゴクナイによってかき消された。

そして油断していたレイナーレに十分に近づいた一誠はレイナーレの顔面を捉え、

一誠「グッバイ俺の初恋！吹き飛びやがれ！」

部屋の奥まで吹き飛ばした。

それと同時に赤い魔法陣が出てきてリアス先輩と姫島先輩が出てきた。

リアス「勝ったみたいね。」

姫島「はい。そうですね。」

リアス「はじめまして。墮天使レイナーレ、私はリアス・グレモリー、短い間で
しょうけどお見知りおきを。」

それとあなたのお仲間は私が消し飛ばしておいたから。」

レイナーレ「よくも・・・」

リアス「さて。そろそろ覚悟はいいかしら。」

するとレイナーレは夕麻ちゃんの姿になり、

夕麻「一誠君助けて。あんなことしたけど本当はあなたのことが好きなの。」

と言いつ出した。

どこまでこいつは・・・。

蓮「おまえ。もう黙れ。」

そして俺はイチゴクナイを投げつけた。

夕麻「きゃあああ。」

ロックオン

一・十・百イチゴチャージ

そして無双セイバーを振ると大量のイチゴクナイがレイナーレに刺さり聖母の微笑トワイライト・ヒーリングが出てきた。

そしてリアスたちがその聖母トワイライト・ヒーリングの微笑をアーシアに戻しアーシアを悪魔に転生させることで生き返らせ一件落着した。

リアス「さて、次はあなたよ助けてくれたことには感謝するけどあなた一体何者なの？」

一誠「そのことは俺から。今回は助けてくれてあんがとな蓮。」

え。何で知ってんの？

そう思い変身を解除して尋ねた。

蓮「なんで俺だと分かった。」

一誠「だって教会の前で変身するところを見てたからな。」

蓮「あの時か・・・。」

リアス「一誠、知り合いなの？」

一誠「はい。俺のクラスメートです。」

リアス「そう。なら今日はもう遅いから。明日話を聞かせてもらおうわよ。」

蓮「わかりました。」

そう言って俺はサクラハリケーンで家に戻った。

あと二話ぐらいで一章は終わります。

〈6〉オカルト研究部に入部します。

事件解決の次の日

先生「今日から転校してきた。アーシア・アルジェントさんだ。まだ日本に来て日は浅いみたいだから、色々と助けてやれ。」

アーシア「アーシア・アルジェントです。」

男子達「オオオオオー！！！！」

絶対にリアス先輩の仕業だな。

アーシア「今はイッセーさんの家でホームステイさせてもらっていますが、皆さんとも仲良くなりたいのでよろしくお願いします。」

教室にいる全員「えっ？」

それ、言って大丈夫か？一誠にすごい視線と圧が加っているが。

元浜と松田「イッセー！！！！！！！！」

イッセー「うわぁー！！！！」

殴りかかれてるし。

その後他クラスにも飛び火しアーシアさんに質問責めと一誠を睨み殺さんとする者達が増えていった。



そして放課後

一誠「蓮、昨日言っていた通り話を聞きたいからついて来てもらおうぞ。

アーシアもオカルト研究部を案内したいからついて来てくれ。」

蓮「わかった。」

アーシア「分かりました。」

そうして一誠についていき、旧校舎のオカルト研究部の部室に着いた。

一誠「部長、連れてきました。」

リアス「ありがとう一誠。さて、まずアーシアこれからよろしくね。あと悪魔になつたからオカルト研究部に入ってもらうけどいいかしら。」

アーシア「はい。一誠さんともっと一緒にいたいからですから。」

リアス「ありがとうアーシア。待たせたわね、とりあえず座ってもらえるかしら。」

蓮「ああ。」

姫島「どうぞ。」

お茶が出されたので

蓮「ご丁寧にありがとうございます。」

といい一口いただいた。

リアス「さて、聞かせてもらうわよ。まずあの鎧は何なのかしら。」

蓮「あの姿は仮面^{アーマード}ライダー鎧武^{ライダー}って言ってこの戦国ドライバーとロックシードを

合わせて変身したものです。」

そういう戦国ドライバーとオレンジのロックシードをテーブルに置いた。

リアス「ならそれはどこで手に入れたものなのかしら。」

やはりというべきかそのことを聞いてきた。でも神様に転生させてもらったといっても信じてもらえないだろうし仕方がないか。

蓮「それは僕が前に開いたジッパーみたいなのがあったのを覚えていると思いますがその先の森に落ちていたものを拾いました。ロックシードのほうは戦国ドライバーをつけた状態でその森の果実をとるとできました。」

あえて原作の鎧武の葛葉紘汰と同じ手に入れ方にした。

リアス「そう。ならあの森は何なのかしら。」

蓮「あれはあのジッパー、正式名称はクラックていうんですがそこから入れるものでヘルヘイムの森っていいいます。」

ちなみにあの森にはインベスっていう化け物が住んでいます。」

俺はヒマワリロックシードを一つ開いた。

蓮「こいつがインベスで一応ほかの種類もいるがこういうのがいっぱいいて、このロックシード単体で使えばインベスを出して操ることができます。」

一誠「おい。じゃ俺たちにインベスを襲い掛からせたってことかよ！」

蓮「ごめんごめん。明らかに攻撃してこようとしたから逃げるためにもつい、でもけがはさせないよう言ってたから。」

リアス「なるほど。一応聞くけどそのヘルヘイムの森は北欧神話とは無関係なのかしら？」

蓮「はい。それに関しては無関係です。」

リアス「わかったわ。ならそこでだけど蓮、あなた悪魔に・・・私の眷属なって

みる気はないかしら？」

蓮「ん〜。」

リアス「今ならこんな特典もつくわよ。」

そう言って俺に一枚の書類を見せてきた。以外に福利厚生がしっかりしていた。蓮「わかりました。悪魔になります。」

リアス「わかったわ。」

そういうと赤いチェスの駒の見た目の悪魔イーヴィル・ピースの駒を取り出した。

そして俺の周りに兵士ポーンの駒を四つ置いた。

（補足・・・一誠は原作と違いポーン八つではなく変異ミューテーション・ピースの駒四つでの転生となっています。）

ただし駒二つは現在封印中）

リアス「我リアス・グレモリーの名に於いて命ずる！中辻蓮よ！汝！我が兵士ポーンとして新たな生に歓喜せよ！」

すると兵士の駒が輝きだした。

リアス「まさかこれはイツセーと同じ変異ミューテーション・ピースの駒！！！！」

一誠「なんですか、その変異の駒ミューテーション・ピースって？」

木場「本来、複数の駒を使わなければ転生できない体を変異の駒一つで転生出るんだ。」

そうこう言っていると変異ミューテーション・ピースの駒は俺の体に入っていく悪魔の翼が生えた。

リアス「とりあえず、成功したけど何か体に異変はあるかしら？」

蓮「いえ。大丈夫です。何ともありません。」

リアス「そう。ならよかったわ。それじゃあ、改めて自己紹介ね。私はリアス・グレモリー。このオカルト研究部の部長よ。私の事はこれから部長と呼んでね？」

姫島「オカルト研究部の副部長の姫島朱乃です。朱乃で大丈夫ですわ。駒はクインですわ。よろしく願いますわ♪」

木場「木場祐斗。ナイトをやらせてもらっているよ！」

小猫「搭城小猫です。ルールです。これからよろしく願います蓮先輩。」

アーシア「ビショップのアーシア・アルジェントですよろしく願います。」

一誠「知ってるだろうが兵藤一誠だ。お前と同じポーンだよろしくな。」

蓮「改めてリアス様のポーンになった。中辻蓮です。これからよろしく願います。」

ます。」

こうして俺は悪魔になった。

緊急事態宣言がとけていって時間が無くなってきたので
更新ペース落ちるかもです。すいません。

〈幕間〉生徒会と使い魔

レイナーレ撃破から数日後、

俺とアーシアは悪魔になってからチラシ配りをしたりしていた。

そしてある日の放課後

蓮「チラシ配りは卒業ですか？」

リアス「ええ、本来チラシ配りは使い魔の仕事なの。

だから新人の三人には使い魔を手に入れてもらおうと思ってね。」

蓮「なるほど。・・・でも僕一応インベスで代用はできますよ？」

リアス「あれは冥界にもいない生物だし目立つからむやみに出されると困るのよ。」

まあ言われてみればそうか・・・。

リアス「ちなみにこれが私の使い魔よ。」

出てきたのはグズズなどでありそうな蝙蝠だった。

朱乃「私はこの子ですわ。」

出てきたのは緑色の小鬼だった。

小猫「・・・シロです。」

いつの間にか白猫がいた。

木場「僕のは」

一誠「ああ、おまえのはいいから。」

木場「つれないな。」

さすがに使い魔ぐらいみてやれよ。

蓮「そういや使い魔ってどこで手に入れるんですか？」

リアス「それは」

蒼那「失礼します。」

部長と話しているとオカルト研究部のドアが開いた。

そして中に入ってきたのは生徒会役員の人達だ。

アーシア「イッセーさん、あの人たちは？」

一誠「アーシアは初めてだったか。あの人たちは駒王学園の生徒会の人たちなんだ。」

アーシア「そうなんですか。」

リアス「生徒会メンバーお揃いでどうしたの。」

蒼那「お互い、下僕が増えたので一度ご挨拶を、と思ひまして。」

一誠「下僕ってまさか!？」

朱乃「このお方は上級悪魔、シトリー家の次期当主であらせられるソーナ・シトリー様ですわ。生徒会の方々は皆、ソーナ会長の眷属ですよ。」

この学校悪魔いすぎだろ……。まあみんないい人だけど。

リアス「まずはこちらから全員二年で、手前から兵士の兵藤一誠と中辻蓮。僧侶のアーシア・アルジェントよ。」

蒼那「新しく私の『兵士』となった二年の匙元士郎です」

匙元「新しくソーナ・シトリー様の兵士となりました2年の匙元士郎です。よろしく願います。」

一誠「同級生でしかも同じ兵士か！俺は兵藤一誠だ。よろしくな！」

匙「俺としては変態三人組のお前と同じだなんてプライドが傷つくがな。」

一誠「なんだよ！こっちが仲良くしようとしとんによ！」

蒼那「兵藤くん、匙がごめんなさい。」

匙「会長！こんな奴に謝る必要なんてないですよ。」

蒼那「お黙りなさい、匙。」

兵藤「大丈夫ですよ。気にしてないんで。」

アーシア「僧侶のアーシア・アルジェントと言います。よろしくお願いします。」

匙「もちろんだよ。こちらこそよろしくね。アーシアさん！」

すごいニヤケ顔になったな。

蓮「中辻蓮だ。よろしくな。」

匙「ああ、よろしく。」

ちよつと残念そうにするなよ。まあ握手には応じてくれたけど。

そしてその後使い魔を手に入れるため使い魔マスターに依頼しなきゃいけないらしいが、

一か月に一回しか受け付けてくれずスポーツ勝負となりこちらが先になった。

ちなみに最初はテニスでお互いの王と女王の対決だったが全然決まらなかった。

そして使い魔の生息する森に転移したが・・・

男「ゲットだぜい！」

一誠「誰だ！」

ザトウージ「俺は使い魔マスターのザトウージだぜい。」

明らかにポケ○ンのサ○シじゃねえか！

ザトウージ「だんなのがご希望なんだぜい」

一誠「そうすねえ。可愛い使い魔とかないっすかねえ。女の子系とか。」

ザトウージ「わかってねえな。使い魔ってのは自分の特性を補ってくれるような・・」

アーシア「あのー私も可愛い使い魔が欲しいです。」

ザトウージ「わかったよん。」

アーシア「ありがとうございます。」

こんなやつで大丈夫なのか？

そしてウンディーネっていう水の精霊とも会えたが女性型であの筋肉質なので一誠もさすがに泣きながらウンディーネはやめた。

しかも水の精霊なのに打撃が使っていた。

精霊なら魔法使えよ！って思いながら俺とアーシアもやめておいた。

ザトゥージ「あれを見る。」

いたのは青い子供のドラゴンだった。

蓮「あれは？」

ザトゥージ「あれはスプライト・ドラゴンの子供だぜい。成体になったら捕まえるのは無理だから捕まえるなら今しかないぜい。」

一誠「ドラゴンかあ。俺もドラゴンを宿してるし使い魔にしてやるぜ！」

女性陣「「きゃあああ。」」

一体何が・・・

なぜか緑色のスライムが降ってきて女性陣の服を溶かしていた。

蓮と一誠「ぐはあ」

小猫「・・・見ないでください。」

蓮「すみません。」

ザトゥージ「此奴は女性の衣服を主食とするスライムなんだぜい。害はそれぐらいだぜい。」

一誠「はい。俺このスライムを使い魔にします。」

こいつ正気か!?

蓮「お前はバカか。もっとちゃんとした奴にしろ。」

そうこうしていると部長たちがスライムを倒していきあとはアジアについている分だけだが・・・

リアス「イッセー、そこをどきなさい。」

完全に盾になってるよ。あいつ。

蓮「さっさとどけ!」

一誠「うええ」

俺はとりあえずあの変態^{一誠}のわきばらを蹴ってどかした。

が一誠とスライムにスプライト・ドラゴンの電撃が当たった。

そしてスプライト・ドラゴン^{一誠}はアジアに懷いてそのまま使い魔となった。

名前はラッサーとなった。

ちなみに蓮は魔入り○した!入○くんのカル○ゴのケルベロビュートみたいなやつの子供を捕まえた。(オリ動物)

名前は・・・カルベロにした。(みんなからは酷評だった。)

魔入○ました！入○くん読んでてどうにかして入れたくなって無理やり似てるもの入れちゃいました(笑)。

それ以外使い魔系が思いつかなかったものもある。

果物鎧武 戦闘校舎のフェニックス

《1》喧嘩売ります。

どうもアラフォーです。

失踪してないから安心してね。

遅くなりましたがどうぞ。

あの後平和な日常を過ごしていた。

一つあるとするなら部長のため息が多くなったことぐらいだ。

何があったんだ？まあ今日なんか呼ばれたからそこで話してくれるか。

そして部員全員が揃った。ただ一人なんかメイドさんがいるが・・・

一応そのメイドさんは魔王様の女王でグレイフィアっていうらしい。

グレイフィア「お嬢様、私からご説明しましょうか。」

だがそれを手で遮った。

そして説明しようとした時、魔法陣が現れホストのような格好の男が現れた。ホスト？「ふう。人間界に来るのは久しぶりだな。会いに来てやったぜ。

愛しのリアス。」

一誠と蓮「此奴（この人）は？」

グレイフィア「この方は純血の上級悪魔でありフェニックス家の御三男、ライザー・フェニックス様です。そしてグレモリー家次期当主の婿殿、即ちリアスお嬢様の婚約者です。」

一誠と蓮「ええええええ!!」



姫島「お茶ですわ。」

ライザー「リアスの女王が入れたお茶は美味しいなあ」

だが姫島先輩はニッコリと笑うだけで何も言わない。明らかに機嫌が悪いな。

まあ原因はゆったりしていやがるが。

そしてライザーは部長の体を触りまくっていたら限界が来て「いい加減にして

ちようだい!!」と立ち上がった。

リアス「前にも言ったでしょ。あなたとは結婚しない。自分の結婚相手は自分で決めるわ。」

ライザー「それは前にも聞いたが、君のお家事情上そんな事は言ってもらえないだろう。それに悪魔の純血種は貴重だ。それでこの婚約が決まったんだろ。」

さらに俺もフェニックス家の看板を背負っているんだ。だからはい。そうですか。と帰るわけにはいかないんだよ。

俺は君の下僕全てを燃やし尽くしても君を冥界に連れて帰るぞ!!」
は？こいつ何だった？

そう思い俺はイチゴとマンゴーのロックシードを使い、シカインベスとライオンインベス呼び出しライザーに向かわせた。

ライザー「なんだ!? こいつら!？」

ライザーは攻撃しようとしても流星に二体一さらにライザーに攻撃する隙を与えないようにしていた。

そして見たことのない生物に驚いていたグレイフィアさんが言った。

グレイフィア「お納めください。私はサーゼクス様の命を受けて此方にいます故一切の遠慮を致しません。」

ライザー「最強の女王と名高い貴方にそう言われると流石の俺も怖いよ。」

蓮「ちっ。」

俺はロックシードを閉じてインベスを返した。

グレイフィア「リアスお嬢様がお断りされた時のために最終手段も御座います。」

リアス「最終手段？」

グレイフィア「お嬢様がご自身の意思を貫きたいと仰るのであればレーティングゲームで決着を付けてください。」

ライザー「なるほどな。だが良いのか？リアス、俺は何度も戦っていて勝ち星も多い。対して君はゲームの参加する資格すら無い。結果は目に見えていると思うがな。」

リアス「いいわ。そこまで言うなら貴方をレーティングゲームで叩き潰してあげるわ。」

ライザー「ゲームは10日後だ。せいぜい俺に対抗できるようにしておくんだな。」

グレイフィア「サーゼクス様にはゲームは10日後と言っておきます。では。」
そう言うと二人とも居なくなった。

《2》修行します

翌日、俺たちは修行のためにオカルト研究部の合宿を理由にしてグレモリー家が所有する別荘に移動し、修行することとなった。

そして修行が始まった。

一誠「いくぞ！木場ああああ！」

一誠は真つすぐ突っ込んでいって剣を振り回すが、一向に当たらなかった。

木場「そうじゃない！剣士を相手取る時でも剣だけじゃなくて、相手や周りも見るんだ。でないと・・・」

祐斗が即座に横に移動し一誠の木刀を落として、木刀を突き付ける。

木場「こんな風にやられちゃうからね。」

一誠「参った。」

木場「次は蓮君だよ。」

蓮「わかった。」

そうして俺は木刀を握り木場に突っ込み剣を振る。

に見せかけ猫だましを食らわせひるんだすきに木刀を振るが間一髪で躲されてしまふ。

こうなると技量の勝負になり少し粘ったものの負けってしまった。

木場「太刀筋は悪くなかったから、少しずつ隙をなくしていくと思うよ。」

蓮「わかった。意識してみる。」

次は朱乃先輩の魔力の練習

朱乃「魔力は体を覆うオーラから流れるように集めるのです。」

アーシア「できました！」

蓮「こんな感じですか？」

アーシアには緑色おれにはオレンジ色の球体ができた。

アーシアの魔力の球体のほうがでかいけど・・・

朱乃「あらあら、二人ともよくできていますわ。アーシアちゃんと蓮君には魔力の才能があるのかもしれないわね。」

そしてペットボトルの水が氷るところを見せ次その練習だがそれはうまくいかなかった。

アーシアちゃんはすごいことにちょこちょこできていた。

小猫ちゃんと体術の練習だったのだが、

小猫「・・・弱すぎです。」

蓮「そういわれてグボア」

変身してない状態なのでサンドバック状態だった。

一誠に至っては向こうまで飛ばされていた。

小猫「・・・打撃は体の中心を狙い、的確に決り込むように打ってください。」

蓮「わかりました・・・。」

修行になってなかった。

こんな感じで修行を繰り返して五日後、突然神様から念話が飛んできた。

神様《お久しぶりです蓮君。》

蓮《お久しぶりです。どうしたんですか？》

神様《蓮君がかなり強くなったみたいなのでゲネシスコアを届けにきました。

ですが、さすがにエナジーロックシードは渡せないので通常のロックシードを二個同時に使えると思ってください。》

蓮《わかりました。これからも頑張ります。》

神様《はい。では》

そんなことがあった。

そして修行最終日

リアス「実戦してみたい？」

蓮「はい。一度どこまで強くなったか試したいんです。」

リアス「まあ。分かったわ。でも相手は？」

蓮「皆さん同時にお願いたいんです。」

一誠「おいおい。流石にそれは鎧武でも無理があるだろ。」

蓮「無理でも、やれるだけの事はやっておきたいんだお願いします。部長」

リアス「はあ。分かったわ。でも無理はしない事、いいわね。」

蓮「はい。分かりました。」



俺はフェイスプレートを取り外しゲネシスコアを取り付けた。

蓮「それじゃあ、いきますね。変身。」

ブドウ

メロン

蓮以外「「えっ？」」

ロックオンロックオン

ソイヤ

ブドウアームズ 龍・砲・ハッハッハッ！

イヨーツ！ メロンアームズ 天・下・御・免

やっぱりセイヴァーみたいに通常のロックシールド2つでも違和感が凄いな。

そしてやっぱり両方の武器を使えるな。

蓮「いきますね。」

俺は右手にブドウ龍砲、左手にメロンディフェンダーを持ち、

ブドウ龍砲をはなった。

当然、近づいてきたがメロンディフェンダーでガードしながらその先端の刃で、切ったりしながらブドウ龍砲を撃ったが流石に近づかれると無理か。

ドングリ

ブドウを外しドングリロックシールドを付けた。

ロックオン

ドングリアームズ never give up

イヨーツ！ メロンアームズ 天・下・御・免

そして魔法の攻撃をメロンディフェンダーで止めながらドンカチを殴っていった。

でも、

蓮「ぐう!？」

負荷のせいで徐々に体が重くなってきたのを感じてきた。

こうなったら、最後の一発で・・・

リアス「そこまで!! 全く無理しちゃダメと言ったでしょ。」

そう言われたので俺は変身を解除した。

蓮「すみません。どれぐらいなのか試したくって、つい。」

一誠「おい！部長に心配かけさせやがって。」

木場「ははは・・・」

小猫「・・・やりすぎです。腹パン一発。」

蓮「そ、それは勘弁してください。お願いします。後で何か奢るから。」

小猫「ケーキビュッフエでお願いします。」

蓮「分かった。」

この状態で腹パン食らうよりマシだ。

そして俺たちは試合当日を迎えた。

《3》決戦の時

試合当日

俺たちは各々ゲームの用意をしたりしていた。

蒼那「失礼します。」

リアス「こんばんは。ソーナ。」

一誠「生徒会中と副会長、どうして？」

リアス「レーティングゲームは両社の関係者に中継されるの。」

彼女たちは中継係。」

蒼那「自ら志願したのです。リアスの初めてのゲームですから。」

リアス「ライバルのあなたに初めてのゲームを見せてあげるわ。」

話していると後ろに魔法陣が現れグレイフィアさんが現れた。

グレイフィア「皆様、準備はよろしいですか。」

リアス「ええ。いつでもいいわ。」

グレイフィア「開始時間になりましたらこの魔方陣から戦闘用フィールドに転送

されます。」

一誠と蓮「戦闘用フィールド？」

朱乃「ゲーム用に作られる異空間ですわ。

使い捨てですから、どんな派手なこととしても大丈夫♪」

朱乃先輩何する気だ。

グレイフィア「ちなみにこの戦いは魔王ルシファア様もご覧になられます。」

リアス「！・・・そう。お兄様も。」

蓮「え！てことは」

木場「うん。部長のお兄様は魔王様だよ。」

蓮と一誠とアーシア「「ええー！ー！？」

木場「紅髪の魔王、クリムゾン・サタンことサーゼクス・ルシファア。それが今のお兄様さ。」

だから部長はグレモリー家の跡継ぎになったのか。

グレイフィア「そろそろ時間です。それと前のような変な生物は使えませんのでそのつもりで。」

まあ、妥当だな。そうじゃなきゃ大軍になっちまうからな。

リアス「わかったわ。それじゃあ、行きましょう。」

そして転移するとなぜか部室のままだ。

転送に失敗したか？

その後グレイフィアさんのアナウンスがあつたが成功しており駒王学園をそのまま再現した異空間らしい。

そして俺たちの本陣はオカルト研究部、向こうの本陣は学長室でそれぞれの校舎に入ることで昇格プロモーションできるらしい。

そして通信機替わりになる球体を耳に入れてみると、

グレイフィア『それでは、ゲームスタートです。』



今、俺たちは敵への牽制のため、

一誠と小猫ちゃんと体育館に向かっていた。

??? 「来ましたねグレモリーの眷族！」

まあ、いるよなあ。速攻でやるか。

??? 「私は・蓮「変身」ちょっと！」

ウォーターメロン

ロックオン

ソイヤ！

ウォーターメロンアームズ！乱れ玉ババババン

ウォーターメロンガトリングを放った。

ライザー眷属 「「「きやあああ。」」」

一誠「特訓の時あれを使われなくてよかった。」

小猫「・・・全いです。」

戦車と棍ルークの青髪以外はかなりのダメージを与えた。

まああとの二人も怪我を負ってるけど。

青髪「何なの！あの神器！」

一誠「おい、そろそろ俺たちにもやらせてくれよ。」

蓮「わかった。」

そういうと戦いに行った。

小猫ちゃんは・・いけそうだな。

一誠は赤龍帝の籠手^{ブリスデッド・ギア}で力をためているなら援護するか、

そう思いまたガトリングを撃ち、一誠に攻撃をさせないようにした。

ライザー眷属チェンソー双子「何なのよ！むかつく!!」

そして一誠は力をため終え、ライザーの兵士三人に向かい、触れたのち

一誠「いくぜ、俺の必殺技洋服崩壊^{ドレス・ブレイク}」

パチン

びりびり

その途端ライザーの兵士の服がちぎれ始めなくなった。

ライザーの兵士「「きやあああ。」」

一誠「ふふふ、アーハッハッハ！見たか！持てる魔力の才能を使い、触れた女の子の服を消し飛ばす為に産み出したこの技を!!」

小猫「見損ないました。」

蓮「撃っていいか？」

一誠「いや！待って！俺は味方だから！」

そうこうしてると通信が入った。

リアス『朱乃の準備が整ったわ』

じゃあ行くか。後ろからライザーの眷属がなんか言ってるが無視だ。

そして俺たちが体育館を出ると体育館にでかい雷が落ち体育館は崩壊した。

グレイフィア『ライザー様の兵士三名、戦車一名リタイヤ』

次に俺たちは陸上競技のグラウンドに向かって木場と合流しなきゃいけない・・あれってライザーの女王魔法陣の先には！

蓮「危ない！小猫ちゃん！」

とつさに小猫ちゃんを突き飛ばしウォーターメロンガトリングを盾にしたが周りが爆発した。

蓮「ぐっ！」

なんとか耐えたか。

ライザーの女王「なかなかじぶといわね。」

小猫「蓮先輩すみません。私が油断してしまったから。」

蓮「大丈夫だ。それより問題はあいつだ。」

朱乃「あらあら、三人ともここは私に任せて先をお急ぎなさい。」

一誠「わかりました。行くぞ！」

蓮「おう。」

小猫「はい。」

グレイフィア『ライザー様の兵士3名リタイヤ』

木場か。すげえな。



その後木場と合流し、グラウンドで木場は敵の騎士ナイトと俺たちはそれぞれの兵士や戦車と戦っていた。

まあ、ライザーの妹は参加だけで観戦しているが。

ちなみに部長がライザーと戦いに行ったため小猫ちゃんには部長と合流し行ってもらうことにした。

ライザーの戦車「なぜ当たらん！」

蓮「攻撃がまっすぐすぎるからな。」

でも近づかれたしアーマーを変えるか。

ドリアン

ロックオン

ソイヤ！

ドリアンアームズ！ミスターデンジャラス！

蓮「次はこっちの番だ。」

俺は攻撃をかわしながら隙を見てドリノコで攻撃していった。

グレイフィア『リアス様の女王一名リタイヤ』

朱乃先輩は負けたのか、ならそろそろ終わらすか。

カッティングブレードを二回おろした。

ドリアンオーレ

俺はとびきりでかいドリアンのエネルギーを飛ばした。

ライザーの戦車「ぐわあー。ー。」

それと同時期に赤龍帝からの贈り物ブーステッド・ギア・ギフトを木場の魔剣創造ソード・パースに力を譲渡し多くの魔剣で

敵を倒した。

グレイフィア『ライザー様の兵士二名、戦車一名、騎士二名、僧侶一名リタイヤ』

よし・・と思っていると木場の周りが爆発した。

グレイフィア『リアス様の騎士一名リタイヤ』

ライザーの女王が無傷でいた。

蓮「おいおい、朱乃先輩と戦った後で無傷かよ。」

戦線復帰がやけに早いのは無傷だからか。

でもどうして？

ライザーの女王「なぜって思ってるの？それはね不死鳥^{フェニックス}の涙を使ったからよ。

これはどんな傷でも治せるもので一度のゲームに二個まで使えるのよ。」

ちっ、だからかよ。

一誠「お前が朱乃さんをやったのか。」

蓮「一誠！」

俺はダンデライナーを一誠に投げた。

蓮「俺はこいつをやる。お前は部長のもとへ！」

一誠「でも」

蓮「お前は部長を救いたいんだろ！なら早くしろ！」

一誠「すまねえ！」

ライザーの女王「いかせると・・蓮「邪魔させねえよ」ちっ！」

俺はドリノコを一つ投げ攻撃を阻止し一誠に屋上に行かせた。

ライザーの女王「その体力で勝てると思って。」

蓮「だから一発で決める。」

カッティングブレードを一回おろした。

ドリアンスカッシュ

俺はドリノコを投げひるんでる隙に無頼キックを食らわせた。

ライザーの女王「きゃあああ。」

グレイフィア『ライザー様の女王リタイヤ』

ライザーの女王を倒したが疲れて変身は解除された。

グレイフィア『リアス様の戦車リタイヤ』

ははっ、まだ休ませてくれねえか。



俺は何とか屋上まで登った。

すると三人ともボロボロでケロツとしたライザーがいた。

ライザー「はっ、まだ居たか。」

蓮「生憎、あんたを倒す仕事が残っていてね。」

ライザー「ばかめ。俺は不死身それに対してお前はボロボロ、あきらめろ。」

蓮「それは、無理だ。だろ一誠。」

一誠「ああ。まだ終われねえよ。」

蓮（圧倒的、力で負荷が少なくなるとあれしかないか。）

蓮「やるか。変身」

ヨモツヘグリ

一誠「クラックじゃないが・・なんだあれ。」

本来アーマーはクラックからだがヨモツヘグリは違うからな。

ロックオン

ソイヤ！

ヨモツヘグリアームズ！冥・界・ヨミヨミヨミ！

蓮「ぐわぁー。ううう。」

このアームズは負荷が少ない代わりに装着者の生命力を吸い、さらにその分強力なパワーを発揮する。

一誠「おい！大丈夫か！」

蓮「問題・ない！いくぞ！」

俺たちはライザーに殴りかかりたりダウで刺したりと戦った。

ライザー「なんだ、この化け物が！」

蓮「これで終わらせる。」

カッティングブレードを一回下げた。

ヨモツヘグリスカッシュ

俺は無頼キックを放ちライザーは爆発した。

それと同時に変身も解除された。

だが、ライザーは普通に立っていた。無傷で、

ライザー「危ない、危ない、不死鳥の涙をレイヴェルからもらい隠れていても

らって正解だったな！」

そして俺はライザーの炎を食らい意識を失った。

ちなみにヨモツヘグリを使っただのは強力なロックシードがそれぐらいしか手持ちになかったからです。

もともとライザーはかなり弱くランクAのロックシードで十分勝てるぐらいの設定です。

《4》決着つけようぜ

蓮「う・ん」

俺は家のベッドで寝ていた。

蓮「そうか・・負けたんだったな・・。」

とりあえず、大体は思い出した。

俺が弱かったせいだ・・。俺がもっと強ければ・・・こうはならなかったのに。

そう思っていると黒歌が部屋に入ってきた。

黒歌「蓮！目が覚めたのかにゃ！」

蓮「ああ・・。」

黒歌「そう。蓮、なんで戻ってきたとき、気が少なく、死にかけてたにゃ。

普通に戦うだけじゃ、あそこまではいかにゃいよ？。」

蓮「このヨモツヘグリロックシードを使ったからだ。」

黒歌「どういうものにゃ。」

蓮「このロックシードは負荷自体はそこまでだが、装着者の生命力を吸って、そ

の分強大な力を発揮するものなんだ。」

バチン

黒歌は俺にビンタしてきて状況が呑み込めなかった。

蓮「黒・・歌・・。」

黒歌「なんでそんなの使ったにゃ！」

蓮「ごめん。それ以外に勝てる方法が思いつかなかったんだ。」

黒歌「だからって使っていい理由にならないにゃ！」

なんでもっと自分を大切にしないにゃ！」

蓮「ごめん。でも・・自分がどんなことになっても、みんなを守りたい、助けたい。そう・・思ったんだ。」

蓮「だから俺はこれからも自分がどうなっても誰かを助けれるなら、迷わず助ける。これは譲れない！」

黒歌は涙目になりながらも、「やっぱり相当のお人好しで本物のばかにゃ」と言った。

黒歌「今からでも助けに行くつもりでしょ、ならさっさと行ってきてあげるにゃ。」

仙術で蓮に気は寝てた間に送っておいたからましなはずにゃ。それにあんたのお友達はどう魔法陣から行ったみたいにゃ。」

蓮「黒歌、ありがとう。いまから行ってくる。」

そういい俺はクラックでヘルヘイムの森に入りそこから変身して会場に向かうことにした。



ヘルヘイムから出るとちょうど一誠が到着したところだった。

蓮「よお。一誠、それに待たしたなあ。」

ライザー「次から次へと貴様らここをどこだと思っている！」

一誠「俺は駒王学園オカルト研究部の兵藤一誠！」

蓮「同じく駒王学園オカルト研究部の中辻蓮だ。」

一誠「リアス・グレモリー様の処女は俺のもんだ。」

蓮「相変わらずだな。まあ、それでこそか。」

ライザー「貴様!! おい、取り押さえろ！」

蓮「邪魔だ。」

俺は使えるだけのロックシードを使いインベスを大量に呼び出し警備の人を取り押さえさせた。

周りの貴族は「なんだあの化け物は！」や「リアス殿これは一体どういうことですか。」などと言っていると、

赤髪の人「私が用意した余興ですよ。」

一誠「誰？」

リアス「お兄様！」

蓮「てことは、あの人が魔王！」

ライザー「サーゼクス様、余興とはどういうことですか。」

サーゼクス「レーティングゲームは興味深くて拝見させてもらったよ。」

しかし、ゲーム経験がなく戦力も半分にも満たない妹相手ではいささか。」

ライザー「あの戦いにご不満でも。」

サーゼクス「いやいや、私が言葉を差し支えてしまったらレーティングゲームそのものが存在意義をなくしてしまう。」

それに今回は事情が事情だ。旧家の顔もたたないだろ。」

そういわれライザーも黙るしかなかった。

サーゼクス「せっかくの妹の婚約パーティーなんだ。派手な趣向も欲しいところ。その少年たち、君が有するドラゴンの力ともう一人の君の果物の武者の力ぜひこの目で直接見てみたいと思ってね。

やってくれるかい？」

一誠「もちろんです！」

蓮「もとよりこちらもそのつもりです。」

サーゼクス「それはよかった。なら勝利の対価は何がいいかな。」

貴族「サーゼクス様、下級悪魔に対して対価など。」

サーゼクス「下級であろうと上級であろうと悪魔は悪魔だ。こちらから願い出た以上それ相応の対価が必要だろう。何を希望する。

爵位や富、絶世の美女なんでも好きなもの言ってくれ。」

一誠「なら、部長を、リアス・グレモリー様を返してください！」

サーゼクス「わかった。そっちの君は？」

一誠が部長を救うことを言ってくれたしなら俺が頼むのは一つだ！

蓮「ならSS級はぐれ悪魔の黒歌の指名手配を解除してください！」

そういうと会場はざわつき始めた。唯一一誠だけがわかっていなかったが。

貴族たちは「そんなこと通るわけないだろ！」や「奴は主殺しのはぐれ悪魔だぞ！わかってるのか！」などと言ってきたが、

俺には関係ない。

小猫「なんで、蓮先輩が黒歌姉様のことを・・・」

サーゼクス「わかった。ただし後で事情は聞かしてもらおうよ。」

蓮「！はい！わかりました。」

そうして俺たちはライザーとの最終決戦に挑むのだった。



サーゼクス『では、はじめてもらおうか』

蓮「お前を何としてでも倒す。変身」

オレンジ

ロックオン

ソイヤ！

オレンジアームズ！花道オンステージ！

一誠「見ててください、部長！輝きやがれ、オーバーブーストオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

【Welsh Dragon over booster!!】

一誠『これが、龍帝の力、バランスブレイカー、ブーステッド・ギアスケルメイル赤龍帝の鎧だ!!』

一誠は魔力の球を撃ち躲したところを殴ろうとしたが、それも躲された。

ライザー「なんだこの力是不愉快なクソガキだ。」

蓮「すげえ覚悟とチカラだ。なら俺も腹くくってやるよ。」

スイカ

ライザー「なんだあれは！」

ロックオン

ソイヤ！

スイカアームズ！大玉ビックバン！

ライザー「なんだそれは!？」

蓮「あんたを倒すための力だ！」

冥界に来る前（ヘルヘイムの森）

蓮『なあ、神様。』

神様『なんですか？』

蓮『スイカのロックシードを渡してほしい。』

神様『本気ですか？正直今のあなたではかなりきついですよ。』

それこそ、まともに動けないかもしれませんよ。』

蓮『それでもだ。ライザーを倒すためには強力な一撃が必要なんだ。頼む。』

神様『はあ。わがままですね。わかりました。ですが、どうなっても知りません

よ。』

蓮『覚悟の上です。』

そう言い終わると俺の手元が光りスイカのロックシードが手にあった。

ジャイロモード！

そして俺はスイカのアームズの指の銃口から銃弾を撃ったが躲された。

ライザー「本当に邪魔な奴らだ！」

一誠『今だ！』

一誠のこぶしは見事にヒットした。

ライザー「はっ。この程度なん・・ブハア。」

余裕だったライザーも少しずつ弱ってきた。

ライザー「十字架！なぜ貴様がそれを持っている！まさか!? 貴様腕に宿るドラ

ゴンに自分の腕を。」

一誠『ドラゴンの腕なら悪魔の弱点は関係ないからな！』

蓮「一誠・・。なら絶対に勝たねえとな。」

ヨロイモード！

俺は地面に落ちたライザーをスイカ双刃刀で何度も切りつけた。

だが一誠の赤龍帝の鎧は解除されていたが、
ブーステッド・ギアスケルメイル

まだやる気らしい。

蓮「なら一誠、とどめいくぞ！」

一誠「おう。」

ライザー「おまえら、わかっているのか！この婚約は、悪魔にとって大切なものなんだぞ！」

おまえらみたいな何も知らんガキがどうこうしていいことじゃないんだ！」

一誠「難しいことよくわかんねえけど。」

スिकासカッシュ

一誠「一つだけうつすらと覚えてることがある！」

俺はエネルギーが溜まったスイカ双刃刀でライザーの足と羽のあたりだけ攻撃し動けなくした。

一誠「部長が泣いてたんだよ、俺がてめえを殴る理由はそれだけで十分だ！」

ライザーのみぞおちに一誠のこぶしが入り見事俺たちはライザーに勝った。



一誠が勝った後一誠の招待状の裏の魔法陣からグリフォンを呼び出し帰っていつ

た。

サーゼクス「見事だったよ。残念ながら今回の婚約は破綻したよ。」

蓮「ありがとうございます。その割には顔が笑っていますよ。」

サーゼクス「ふっ。そうか。黒歌くんの件については後日話を聞かせてもらおうよ。

まあ、安心したまえ。その間ほかの者たちに黒歌くんに危害を与えないように手を打っておくから。」

蓮「わかりました。それじゃあ、失礼します。」

そういった後、俺はヘルヘイムの森から帰った。

《5》解決後、そして・・・

一誠が部長奪還から三日が経った。

あの後部長は一誠の家に住むことになった。まあ、部室でも一誠に対してのアピールがすごくて一誠のことが好きなのはまるわかりなんだがな。

そして今、僕の家にサーゼクスさんとグレイフィアさんが来ていて黒歌のこと、つまりなぜ主を殺したのか、なぜ小猫ちゃんを置いていったのかなどの経緯をすべて話した。

サーゼクス「なるほど。そういう事情なら大丈夫だよ。すぐにはぐれ悪魔認定を取り消そう。」

黒歌「ありがとうございますにゃ。」

蓮「ありがとうございます。サーゼクスさん。」

サーゼクス「気にする必要はないよ。私はただ君の望んだ対価を支払ったに過ぎない。」

これで黒歌の件は小猫ちゃんと仲直りしたら一件落着だな。

蓮「よかったね。黒歌。」

黒歌「ありがとうにゃ。蓮。」

サーゼクス「なら用も済んだから、そろそろ私たちは失礼するよ。」

グレイフィア「失礼します。」

そう言い二人は魔法陣から帰っていった。

蓮「さてと、黒歌、小猫ちゃんに事情を説明してきてあげて。」

黒歌「わかったにゃ。」

黒歌は少し不安な顔をしていた。

蓮「黒歌、不安にならなくても、ちゃんと説明したらわかってくれるはずだよ。」

黒歌「わかったにゃ。頑張ってくるにゃ。」



三十分後

ガチャ

蓮「おかえり、黒歌。小猫ちゃんはどうしたの？」

結構多くの荷物を持ってきた。旅行にでも行くのかな？

小猫「蓮先輩、私もここに住むのでよろしくお願いします。」

蓮「・・・え？」

黒歌「どうしたにゃ？別に姉妹で一緒のところに住むのはおかしくないにゃ。」

蓮「まあ、わかった。部屋は余ってるからどこか適当に使ってくれ。」

小猫「ありがとうございます。お邪魔します。」

その夜、黒歌のはぐれ解除と小猫ちゃんの歓迎のお祝いをした。

・・・ただ、黒歌って結構酒癖悪いんだな。くっついてきたりして、そのたび顔を赤くしてしまった。



一誠サイド

部長を奪還してから少し経ち俺たちは休日とあって部長とアーシアとショッピングモールに出かけた、帰り道のことだった。

一誠「なんで、クラックがここにあるんだ？」

俺たちの目の前には蓮がヘルヘイムの森に行くときに使うクラックだった。

リアス「確かに、そうね。なんでここにあるのかしら。」

アーシア「蓮さんが、ヘルヘイムに行ってから閉め忘れたんじゃないでしょうか？」

リアス「でも、ヘルヘイムに行くならここじゃなくて家でクラックを開くと思うわ。」

部長の言ってることにも納得だった。

一誠「一度、入ってみます？もしかしたら、本当に蓮が閉め忘れたなら言わないといけませんし。」

リアス「そうね。少し中の様子を見てみましょう。」

そして俺たちはクラックに入ってヘルヘイムの森へと来た。

俺たちが蓮からヘルヘイムの森について聞いたのはクラックからしか入れないこととここがインベスの住処ということぐらいだ。

リアス「ここがヘルヘイムの森……。」

アーシア「不気味でちょっと怖いです。」

一誠「安心しろよ、アーシア。なんか出てきても俺が守るからさ。」

アーシア「はい！」

そして俺たちは少しだけ奥に進んだ。なんだあれ？

俺は近くの果物を一つとってみた。なんだろうこれすっげえうまさうだ。

リアス「どうしたの？一誠？」

一誠「いや、そこに果物があって、結構おいしそうだったんでとったんですけど。」

リアス「確かにおいしそうだけど、毒があるかもしれないから。やめときなさい。」

一誠「いや、でもやっぱ一口ぐらい・・・」

ガサガサ

近くの草むらから音がした。

一誠「なんだ？」

俺は果物を捨て、ブーステッド・ギア赤龍帝の籠手を展開し、部長は滅びの魔力を出した。

インベス「グウアー！」

そこに現れたのはインベスだった。（コウモリインベス）

部長と俺で応戦したが空を飛んで躲し、当たってもダメージはなさそうだった。

リアス「このままだとこっちが消耗して負けるわ。逃げるわよ！」

俺たちは元のクラックのほうに走っていった。

だが、インベスも追いかけてきた。

インベスが時々羽を刃にして切りかかってきたが、何とか躲し、蹴りを入れて距離を離してからクラックから出た。

だが、インベスもこっちに向かってきていた。

このままだと、クラックから出てきちまうぞ。

そう思っているとクラックがゆっくり閉じてきた。

それと同時にインベスもスピードを上げた。どうなる。

結果としてはインベスが出てくる前にクラックが閉じた。

リアス「ギリギリだったわね。」

一誠「そうでしたね。」

アーシア「危なかったです。」

リアス「明日に蓮君から話を聞いてみましょう。」

一誠「今日は疲れましたし早く帰りましょう。」

リアス「ええ。そうね。」

そして俺たちの休日はどうと疲れる形で終わった。

どうも。アルフォーです。

これで二章は終わり次は、オリジナル章となります。

エクスカリバー編を待っている方は申し訳ありません。

それでは。

果物鎧武 ヘルヘイムの侵略 1

「1」侵略

お気に入り100件超えありがとうございます。
これからよろしくお願いします。

俺は学校の授業を終え、黒歌にみんなに紹介しときたいからと電話で言い猫の状態で来てもらってから部室に行った。

蓮「どうもです。」

リアス「全員そろったわね。なら蓮に聞きたいことがあるのだけど。」

蓮「ああ。いいですけど、先に黒歌だけ紹介させてくださいね。黒歌そろそろ戻って。」

そういうと煙が出てきて煙が晴れると人間型の黒歌がいた。

黒歌「はあ。めんどくさいにや。」

一誠「おお！巨乳の和服美人！」

その途端一誠はリアス、アーシア、小猫、黒歌から睨まれ、顔が強張っていた。蓮「まあ・一誠の発言気にしないで、自己紹介して。」

黒歌「わかったにや。黒歌にや。わかってると思うけど白音の姉にや。」

リアス「そう。あなたが黒歌ね。これからよろしく。」

黒歌「まあ、一樣よろしくにや。」

黒歌も小猫ちゃんを預かってもらってたから信用はしてるみたいだな。

リアス「さてと蓮、ヘルヘイムの森とクラックについて詳しく聞かせてもらおうよ。」

蓮「？どうしてまた急に？」

リアス「先日私とアーシアとイッサーがショッピングモールからの帰り道にクラックを発見したのよ。」

蓮「!?・・・そうですか。」

言わなきゃいけないーか。

蓮「わかりました。話します。まず、みんなに言っておくのはあの森には入らないようにしてほしい。」

でもやむを得ず入っても絶対に森の果実は口にしないでくれ。」

一誠「食べるとどうなるんだ。」

蓮「・・・体が耐え切れずにインベスになる。」

蓮以外「!!!!」

全員が驚いていた。

蓮「これからヘルヘイムの森について話すけどまずは見てもらいたいものがある。」

俺はクラックを開き部屋にいた全員を招いた。

その中に入り、先を見てみるとあったのは・・・遺跡だった。

(原作のヘルヘイムの森にあった遺跡)

前に何度かヘルヘイムの森を探索していたら見つけたものだ。

蓮「かつてはこの世界にも人間がいて文明を築いていた。」

リアス「なら・・・ここに住んでいた人はどこへいったの・・・。」

蓮「・・・果実を食べるとインベスになるんだ。もう・・・わかるだろ。」

朱乃「まさか！」

蓮「そのまさかだ。俺たちがインベスと呼んでいるあの生命体は元々この世界にいた動物たちのなれの果てだ。」

その中には・・・人間も含まれる。・・・とりあえず部室に戻るぞ。インベスが来るかもしれん。」

皆、暗い表情をしていたが危ないため部室に戻した。

蓮「話をつづけるぞ。おそらくあの森は突然現れ生態系を塗り替えた。」

ちなみにクラックは自然に開く場合もあるから、

恐らく自然にクラックが開き、突如流れ込んだ異世界の植物の種、しかも圧倒的繁殖力に加えあの植物は土壌を汚染し他の草木を枯らしてしまう。

例えば外来種である西洋タンポポは日本に来て、日本タンポポを少なくし絶滅させかけている。」

木場「絶滅・・・。」

蓮「いわばあの植物は時空を超えた外来種だ。圧倒的繁殖力で一つの文明は滅び

た。

そして次はこの地球の番！というわけだ。」

一誠「なんで、なんであんなことに！」

蓮「理由などない。植物が生存範囲を増やしていくのは当然だ。つまり、理由のない悪意である世界は滅んだ。」

小猫「なら・・・この地球も・・・滅ぶんですか？」

蓮「・・・ああ。いつかまではわからんが。」

黒歌「そんな・・・。」

一誠「なんでそんな大事な事隠すんだよ！」

蓮「もしそれをほかの人々が知ったらパニックが起こる！そんなことになればヘルヘイムの森以前に暴徒で文明が崩壊することぐらいわかるだろ！」

リアス「そんなことないわ！もし世界中で協力すれば・・・蓮「戦争、宗教、民族の違い、！」」

蓮「抱えている問題を全部を棚に上げてヘルヘイムの森に立ち向かう、とてもだが無理な話です。」

全員が黙ってしまった。

蓮「俺が何とかします。幸いクラックの出現頻度はそこまで多くないので、あとは植物を燃やせば何とかあります。」

だから、みんなは今のことは忘れて普通に過ごしてください。」

俺のせいでこの世界はヘルヘイムの森とつながったんだ。俺が何とかしないと・・・。あの世界にも黄金の果実はあるはずだ。

それを一刻も早く見つけないと。

そして俺は部屋を出た。

このアンケートはこの章が終わるぐらいまで続けます。

その後に蓮以外なら別のアーマードライダーになるかアンケートします。

〔2〕躊躇いと仲間

一誠サイド

蓮からヘルヘイムの真相を聞き三日が経った。

あれから蓮は学校はおろか家にも帰っておらず電話にもでなかった。ヘルヘイムのことは部長が魔王様にも話しておいたが、やはりすぐには対応できずにいた。そして全員で（黒歌さんも）部室に集まっていた。

一誠「部長、蓮は見つかりましたか？」

リアス「それが使い魔に搜索させてるけど、一向に見つからないのよ。」
そう聞きまた全員顔が暗くなった。

小猫「蓮先輩……。」

黒歌「蓮なら大丈夫はずにゃ。白音。」

小猫「ありがとうございます。姉様。」

だが、小猫ちゃんはお礼を言いながらも暗い顔だった。
そうこうしていると

リアス「大変よ！使い魔から街中でクラックを発見したって。すぐに向かうわよ。」

そういわれみんな驚いていたが部長が出した魔法陣に乗り転移した。

転移した場所は前にはぐれ悪魔のバイザーを倒した場所から少し近いところだった。

幸い人があまりいないところだった。

リアス「朱乃、人除けの結界を張っておいてももしかしたらインベスが出てくるかもしれないわ。」

朱乃「はい、部長。」

そういい朱乃さんは結界を張った。

それと同時に初級インベス6体が出てきた。

リアス「インベスが出てきたわ。やるわよ。」

部長と黒歌以外「はい。部長。」

黒歌「おっけーにゃ。」

そして俺たちはインベスと戦ったがやはり元々は普通の生き物だったと思うとみ

んな動きが鈍っていた。

一誠「くそ！元々はこいつらも人間だったんだよな。」

リアス「それでも・・・倒さなければもっと被害が出るからにはやるしかないのよ。」

だが部長自身も滅びの魔力は使えずにいた。

やはりというべきか少しづつみんなは押され始めていた。

そして小猫ちゃんにインベスが攻撃する瞬間

ザクロチャージ

後ろから矢が飛んできてインベスに直撃し爆発した。

そこにはセイヴァーアローを持った鎧武^蓮がいた。

蓮「あとは任せろ。」



蓮サイド

俺は無双セイバーとセイヴァーアローでインベスを切ったり、蹴ったりして一か所にまとめた。

蓮「終わりだ。」

カッティングブレードを一回おろした。

ザクロスカッシュ

そして二つの斬撃でインベスは爆発した。

それと同時にクラックも閉じたため変身を解除した。

そして火の魔法（ときどき練習していたら使えるようになった）でヘルヘイムの植物を燃やした。

蓮「みんなに言うておくことがある。あいつらを倒すのにためらうならもうこの件には関わるな。」

一誠「な。そんな言い方ないだろ！」

蓮「事実だ。お前だって躊躇いが垣間見えていた。次は助けに来れる保証はない。このままならいつか死ぬぞ。」

一誠「確かに、そうだが。・・・ならお前はなんで倒せるんだよ！あいつらだって元は人間なんだぞ！」

蓮「・・・じゃあな。もうヘルヘイムについて関わるな。」

皆は俺を呼んでいたが俺は気にせず進んだ。

▼▼▼

??? サイド

ようやくヘルヘイムの侵略が始まった。この時を待っていた。

まだ黄金の果実はできていないだろうが、楽しみだ。

これで私はすべてを支配できる。

はっはっはっは。

そこには狂氣的な笑いをするものが一人いた。

▼▼▼

一誠 サイド

俺たちは蓮を呼んだが一向に振り向く気配はなくそのまま行ってしまった。

リアス「どうしたらいいのかしら。もう。」

部長は泣きかけていた。

一誠「大丈夫ですよ。部長、今は蓮が無事だったってことを知れて良かったと思いますしよ。」

時間にかかるかもしれませんが、今度こそ蓮を連れ戻しましょう。なあ、みんな。」

朱乃「ええ。そうですね。」

小猫「はい。蓮先輩を連れ戻しましょう。」

木場「そうだね。蓮君にはオカルト研究部にいてもらわないとね。」

アーシア「蓮さんともお友達になったばかりですし、もっともっと仲良くしたいです。」

黒歌「蓮には白音を心配させたんだし、お説教をしないとね。」

リアス「そうね。私が気落ちしないようにしなとね。絶対に蓮を連れ戻すわよ。」

皆「「おおおー！」「」」

そして全員で蓮の搜索が始まった。

「3」おかえり

一誠サイド

あの後全員で二人一組で探す事にした。

俺はアーシアと一緒に蓮を探している。

アーシア「蓮さんどこにいったんでしょか？」

一誠「きつと見つかるさ。」

そう言うときまた探し始めていると、少ししたら蓮がいた。

だが、鎧武の姿でインベスに囲まれていた。

数が多いせいか不利な状況だった。

一誠「アーシア、部長達に連絡して、蓮!!」

素晴らしい俺はインベスに突っ込んで行った。

蓮サイド

あいつらと別れてからまたクラックを発見した。

だがビャッコインベスやシカインベス、セイリュウインベスに

ライオンインベスなど凄い量だった。

蓮「たく、こっちはバーゲンセールしてんじゃねーんだぞ！」

まずいな、スイカ使うか？でも、後々動けねえかしんねえしどうすっかな？

一誠「蓮!!」

え？何であいつこっちに来たんだよ！

蓮「お前・・あいつら倒せねえだろ、危ねえから下がってろ。」

一誠「うっせえよ！ピンチの癖して！」

蓮「大丈夫だったの。」

そういい戦いを再開したがあいつもインベスと戦い始めた。

一誠「なあ、蓮。」

一誠は戦いながら話しかけてきた。

蓮「どうした？改まって。」

一誠「俺たち皆、お前を仲間だと思ってるんだ。だからこの戦いが終わったら戻ってきてくれよ。」

蓮「いや、俺はお前たちと仲間になれる資格なんて無い。

俺がクラックを開けなければヘルヘイムと繋がる事も無かったかもしれない。

俺がこの世界を滅ぼしているようなもの・皆「『そんなことない!!』皆?」
後ろを見るとみんながいてインベスと戦い始めた。

黒歌「蓮は私を助けてくれた。厄介者の私を受け入れてくれた。」

リアス「私はあなたのことを見てきた。人のために戦う姿を、あなたは私の自慢の眷属よ。もっと自信持ちなさい!」

朱乃「蓮君は世界を滅ぼすような人ではありませんわ。自分のことを犠牲にしても人を救いたいと思えるような立派な人ですわ。」

木場「蓮君はヘルヘイムから皆を守ろうとしている。そんな人が世界を滅ぼすわけがない!」

小猫「蓮先輩は私と黒歌姉様を仲直りさせてくれたりインベスの攻撃から守ってくれたりしてくれました。そんな連先輩は優しい人です。だから戻ってきてください。」

アーシア「蓮さんは私の友達で、私を助けてくれて一誠さんと会わせてくれました

た。だから、いなくなるのはさみしいです。」

一誠「俺、バカだから難しいことわかんねえけどさ、皆、お前に戻ってきてほしいって思ってる。仲間だと思ってる。だからさ、また一緒に頑張ろうぜ。」

そう言い終わると同時にインベスを倒し終えた。

蓮「俺なんか居ていいのかヘルヘイムの事件の発端かもしれないんだぞ。」

黒歌「そうだと決まってるにや。それにきつと違うはずにや。」

蓮「俺は元々は人だったものでも倒せるようなやつだぞ。」

リアス「あら、それなら今みんなでインベスを倒したから。みんな同じよ。」

蓮「本当に俺が居ていいのかいいのか。」

一誠「何回言わせんだよ。居ていいって、むしろ居てくれよ。」

俺は変身を解除した。

蓮「ありがとう。後、ただいま。」

皆「」「おかえり。」「」

こんなに大事にしてくれていたのか。

バカだな俺も。

黒歌「あ！そうだ！あんた皆に心配かけさせたんだし、ちょっとお仕置きにや
！」

蓮「ええ！このまま感動的に終わらせてくれよ！」

黒歌「ダメにや！覚悟するにや！」

リアス「そうね。次はこんなことがないように下僕の教育もしっかりしとかな
いね。」

蓮「ええーと。・・・逃げろ！！！！」

黒歌とリアス「「待てー！！」」

こうして俺たちはまた、皆で活動するのだった。

アンケートは明日（四月三日）の23時59分59秒の時点のモノを採用します。
投票し終えてない人はご注意ください。

果物鎧武 月光校庭のエクスカリバー

1 聖剣

アンケートの結果ゲネシスドライバーは黒歌が使います。
コカビエル戦には使わせられるかな？

蓮が戻ってきてから一週間後

俺が戻ってきてから一週間が経過した。

俺が戻ってきた後、小猫ちゃんは黒歌から仙術を習い始めていた。

あれからクラックの出現頻度も少なくなってきたて平和だ。

恥ずかしかったことと驚いたこともあるが・・・。

恥ずかしかったのは・・・

戻ってきた日から次の日の朝

ああ。よく寝たな。

昨日はいろいろあって疲れた。

もうクラックは出ないでほしいな。

そして起きようとする、体が起き上がらなかった。

とっさに周りを見ると黒歌がいた。

しかも透けそう。白装束で。

驚いていると黒歌が起きた。

蓮「く、黒歌さん、な、なぜ俺のベットに来てるんですか。」

黒歌「あれ。蓮、なんで顔を赤くして目を逸らすにや。」

話すときは相手の顔を見ないとダメにや。」

黒歌は前屈みの体勢になった。

こいつ、こういう時はニヤニヤしやがって。

徐々に近くに來たため後ろに下がるが。

黒歌「なんで後ろに行くにや。」

いきなり顔を目の前まで寄せてきてもう少しでキスできるぐらいまで近づけた。

だがその時部屋の扉が開いた。

小猫「おはようございます。蓮先ば……。」

無言で見ないで！

蓮「違う！断じてお、お楽しみ中とかじゃない！」

黒歌「あれ、蓮、お楽しみってどんなことを想像したにゃ？」

その途端なにか思いつき、小猫ちゃんは口角を少し上げると

小猫「私はただ仙術で治療していただけだと思っただけですが、違うんですか？」

黒歌「ほらほら。蓮はどんなことを想像したにゃ。」

こいつら絶対この状況を楽しんでやがる！

そして俺はこのことで一日中いじられ続けた。

驚いたほうは……

昨日

なぜかいきなり体育館で朝礼を行うらしい。

教頭「突然ですが、今日から赴任される先生が居ます。では、自己紹介を。」

この時期に珍しいなどんな人だ！……ナンデダロウスゴクミシッタヒトニニテ

ルキガスルナー。

黒歌「今日から駒王学園に赴任することになりました。塔城黒歌です。よろしくお願ひします。」

男子たち「「「うおおおー……!……!」」」

なんで黒歌が先生として来てるんだ。

まあ、別にいいが。

その後教室でホームルームがあるため教室に行き先生を待っていると。

黒歌「はーい。皆席について。」

は？なぜ？

黒歌「今日から私がここの担任になったから、皆よろしくね。」

男子たち「「うおおおー……!……!」」

なぜこうなった？

そして現在

黒歌はオカルト研究部の顧問にもなったらしい。
さらに皆から人気もあり質問攻めにあっていた。

女子一「黒歌先生って塔城小猫ちゃんと苗字一緒ですけど、何か関係あるんですか？」

黒歌「ええ。白・・じゃなくて小猫は私の妹よ。」

などと普通に生徒と接していた。

語尾の「にゃ」までしっかりとってるし。

ただし二つほど嫌なことがあり、まず授業中執拗に俺を当ててくることこれだけならまだいいがもう一つが、

黒歌「あれあれ、蓮君どうしたの？暗い顔して。」

普通に話しかけてくることだ。そして嫌でも目立ってしまう。

しかも、こっちが困った顔でさらに敬語だからか、すごいニヤニヤしやがって。蓮「ははは・・。大丈夫ですよ。それじゃあ授業の用意しなくちゃいけませんので。」

黒歌「まあまあ、そういわず少しお話しでしょ。」

こいつ・・・。

女子二「黒歌先生って蓮君と仲良いけど、どんな関係なんですか？」

おい！そんなこと聞いたら・・・。

黒歌「蓮君とは同棲させてもらってるの。」

俺が黒歌の口を手で塞ごうとしたが、あっさり止められた。

女子達「「きゃああー」。」「」

瞬く間に黄色い歓声が響いた。

女子三「なら二人って付き合ってるんですか。」

蓮「ちがムグッ。」

黒歌「それはどうかなく。」

俺が否定しようとしたら胸を押し付け否定させずほめかすようなことを言った。

その後、離れた。

一誠・松田・元浜「「蓮！黒歌さんと同棲ってどういうことだ!!」「」

蓮「なんもねえよ！」

黒歌「えええ！いろいろあったのに。」

（修行やばぐれ解除や一週間前のこと）」

蓮「紛らわしく言うな！なんもしてねえだろが！」

小声でいろいろの部分伝えてきたがそんな言い方だと誤解されるだろ！

ざわざわざわ

ああ。終わった……。もう俺をそんな目で見ないでくれ……。



放課後

今日は旧校舎が年に一度の大掃除で使えないため、一誠の家で活動することになった。

リアス「じゃあ、定例会議を始めましょう。今月の契約件数は朱乃11件。」

朱乃「はい。」

リアス「小猫10件。」

小猫「はい。」

リアス「祐斗8件。」

木場「はい。」

リアス「アーシア3件。」

アーシア「はい。」

木場「すごいじゃないか。アーシアさん。」

朱乃「あらあら。うふふ、やりましたわね。」

小猫「新人さんにしては良い成績です。」

アーシア「ありがとうございます。」

リアス「蓮2件。」

蓮「はい。」

木場「蓮君もすごいじゃないか。」

蓮「ああ。ありがとう。」

リアス「そしてイッセー。」

一度紅茶を飲んでから言った。

リアス「0件」

一誠「め、面目ありません。」

リアス「頑張って契約取らないと上級悪魔への道はますます遠くなるわよ。」

一誠「わかってますとも。来月こそはトップを目指します！」

一誠の母「お邪魔しますよ。」

アーシア「ああ。すみません。お義母様。」

一誠の母「いいのよ。今日はかるた研究会の会合なんですよ。」

一誠「また、微妙な間違え方だな。」

一誠の母「そうそう。それといいもの持ってきてちゃった。」

アルバムか。一誠って昔もこの調子だったのか？

一誠「はぁえ!？」

そしてみんなでアルバムを見ていたが裸の時多すぎだろ・・・。

リアス「小さいイッセー。小さいイッセー!」

アーシア「部長さんの気持ち私にもわかります。」

リアス「アーシア。あなたにもわかるのね。うれしいわ!。」

一誠「たく。母さんも余計なもの持ってきてやがって。」

木場「いいお母さんじゃないか。」

一誠「どこがだよ!」

蓮「お前・・・昔から変態だったんだな。」

一誠の母が「幼稚園の頃から女の子のお尻ばかり追いかけて。」と言ってたしな。

一誠「そんな憐みの目を向けるな！」

木場「ねえ。一誠君、この写真だけど・・・。」

木場の表情がいきなり暗くなったな。

何だろう？

その写真を見ると一誠がもう一人の子と遊んでいる写真だった。

一誠「ああ。その男の子近所の子でさあ。よく一緒に遊んだんだ。親の転勤で海外に引っ越したんだけど、

名前、なんつったけ？えーと、確か・・・。」

木場「ねえ、一誠君。この剣に見覚えある？」

？なんでまたそんなこと聞くんだ？

一誠「いや、何しろガキの頃だからな。」

木場「こんなこともあるんだね。」

一度フツと笑ってから言った。

木場「これは聖剣だよ。」

アンケートの期限は決めてませんがコカビエル戦の前で終わりかな？

{2} 木場の様子

その後

リアス部長から廃工場にいるはぐれ悪魔に対して危険すぎるため、緊急で討伐することとなり集められた。

リアス「ごめんなさい。急に呼び出してしまって。」

一誠「いえ、それで。」

蓮「あそこにはぐれ悪魔がいるんですか？」

朱乃「ええ。今晩中に討伐するよう命令が出てしまいましたね。」

リアス「それだけ。危険な存在ってこと。だから注意して戦うわよ。」

そして屋内で戦うのは不利なため俺、一誠、木場、小猫ちゃん、で外におびき出し部長たちが外で待ちかまえる作戦だと伝えられたが、木場だけ上の空だった。本当に大丈夫か。

小猫ちゃんが扉を吹き飛ばして入ると普通の女性から化け物へと変貌した。

一誠「やっぱ、化け物じゃねえか！」

『boost』

蓮「やるか、変身。」

マンガー

ロックオン

ソイヤ！

マンガーアームズ！ファイト オブ ハンマー！

俺は飛びついてきたはぐれ悪魔のパンチを難なく受けた。

それにははぐれ悪魔も驚き反応が遅れたところにマンガーパニッシャーで何度も殴りつけ、体制を崩した。

『boost』

『Explosion』

そこに一誠がドラゴンショットを頭部に打ち込み、はぐれ悪魔はひるんでいた。

一誠「今だ！木場ー！」

だが何の反応もしなかった。

蓮「おい！どうした木場！」

何度か声をかけると反応したがはぐれ悪魔は体制を立て直しており、天井から妙な溶解液を小猫ちゃんに打ち込もうとしていた。

仕方なくクラックを開け攻撃をクラックの中に入れた。

一誠「そんな使い方もあるのか！」

蓮「あんまり遠くだと調整が難しいがな。」

一誠「てか、何ボーっとしてんだ木場！」

木場はまたボーっとしていたのかハッとなつてはぐれ悪魔の腕を切り捨てたが、パイプにつまづいて転び、恨みを晴らすかのように木場に飛びつき襲い掛かった。

一誠「木場ー！」

木場はあまりパワーは少ないため押されていた。

あー！もう！

マンゴーオーレ

俺はマンゴーパニッシヤーをハンマー投げの要領で回転してエネルギーを溜め勢いよく投げた。

しかし、はぐれ悪魔も危険と思ったのか木場から離れ躲したことでマンゴーパ

ニッシャーは飛んで行ってしまった。

小猫「・・・吹っ飛べ。」

躲した場所に小猫ちゃんが先回りをしておりはぐれ悪魔は天井を突き破り空中に投げ飛ばされた。

そして手筈道理に屋外に出したため朱乃さんが雷で撃ち落とし、そこに部長が滅びの魔力を打ち込んだことではぐれ悪魔は消滅した。

一誠「やった。」

蓮「倒したな。」

朱乃「心を完全に失っていましたわ。もはや、悪魔とは呼べませんわ。」

そして変身を解除した。

バチン

部長が木場にビンタした。

リアス「少しは目が覚めたかしら。一つ間違えば誰かが怪我を負っていたのよ」部長はかなり怒っている様子だった。

木場「すみません。調子が悪かっただけです。今日はこれで失礼します。」

一誠「おい！待てよ！今日のおまえマジで変だぞ！」

木場「君には関係ない。」

蓮「おい！皆、お前のことが心配なんだよ。どうしたんだよ！」

木場「僕はね基本的なことを思い出したんだ。」

一誠「基本的なこと？」

木場「生きる意味、つまり僕が何のために戦っているのかってことさ。」

蓮「で、お前は何のために戦ってるんだ。」

一誠「はあ？そんなの部長のためだろ。」

木場「違うね。僕は復讐のために生きているんだ。聖剣エクスカリバー、それを破壊するのが僕の生きる意味だ。」

そういうと木場は行ってしまった。

その夜一誠が部長から聞いた話がメールで送られてきた。

どうやら木場は人工的に聖剣エクスカリバーを使えるものを育成するための計画、聖剣計画の生き残りらしい。

その計画は失敗したため被験者は裕斗以外は殺されたらしい。

あいつにそんな過去があったのか・
・・。
なら、なおさらほっとけないな。

{3} 聖剣が来た、そして戦い

次の日

厄介ごとは重なりオカルト研究部に聖剣使いがやってきた。

どうやら部長に話があるらしい。

ゼノヴィア「会談を受けていただき、感謝する。私はゼノヴィア。」

イリナ「私は紫藤イリナよ。」

どっかで紫藤さんを見た気がするんだがな……。

(蓮君、写真の子と全く気が付いていない。)

リアス「それで教会関係者が悪魔に会いたいなんて、何の用かしら。」

イリナ「元々行方不明だった一本を除く六本のエクスカリバーは教会の三つの派閥が保管していましたが、その内三本が墮天使の手によって奪われました」

一誠「奪われた!？」

さすがに俺たち全員が驚いた。

ゼノヴィア「私たちが持っているのは残ったエクスカリバーの内、破壊の聖剣、

エクスカリバー・デストラクション。」

イリナ「私が持つ、この擬態の聖剣、エクスカリバー・ミミックの二本だけ。」

リアス「で、私たちにどうしてほしいわけ。」

ゼノヴィア「今回の件は我々と墮天使の問題だ。この街にいる悪魔どもに要らぬ介入をさせるのは面倒なのでな。」

リアス「随分な物言いね。私たちが墮天使と組んで聖剣をどうにかするとでも？

┐

ゼノヴィア「悪魔にとっては聖剣は忌むべきものだ。墮天使と利害が一致するじゃないか。」

部長が怒ってるし、なぜこうもきつい言い方ばかりすんだよ。

ゼノヴィア「もし、あなたが墮天使と組むようなら我々はあなたを完全に消滅させる。例え魔王の妹でもな。」

リアス「そこまで私の事を知っているなら言わせてもらおうわ。

私は墮天使と手を組むことなんてことはないわ！ グレモリーの名に懸けて、魔王の顔に泥を塗るようなことは絶対にしない。」

ゼノヴィア「ふっ。それが聞けただけで十分だ。今のは本部の意向でね、魔王の妹がそこまでバカだとは思ってないさ。」

リアス「なら、私たちが教会側には協力しないということはわかっているわね。」
ゼノヴィア「無論。この街で起こることに一切の不介入を約束してくれればいい。」

リアス「了解したわ。」

ふう。一時はやばそうだったけど何事もなく話し合いは終わったな。

ゼノヴィア「兵藤一誠の家を訪ねた時に、もしかしたら、と思ったがアーシア・アルジェントか。」

アーシア「はい。」

ゼノヴィア「まさかこんなところで魔女と会うとはな。」

イリナ「へえー。あなたが魔女になった、元聖女さん。堕天使や悪魔を癒す力があるから追放されたと聞いていたけど、まさか悪魔になっていたとわねえ。」

明らかにアーシアの様子がおかしくなってきたな。

たく、あいつら、また敵対しかねないことを。

ゼノヴィア「だが、聖女と呼ばれていたものが悪魔になったとはな。堕ちれば堕ちるものだ。」

こいつら、話し合いに来たのか敵対しに来たのかわかんねえレベルだな。ふざけてんのか・・・。

ゼノヴィア「まだ、我々の神を信じているのか？」

イリナ「ゼノヴィア。彼女は悪魔になったのよ。」

ゼノヴィア「いや、罪の意識を感じながら信仰心を忘きれずにいるものがある。その子にはそういう匂いを感じられる。」

アーシア「捨てきれないだけです・・・。ずっと・・・信じてきたものですから。」
ゼノヴィア「ならば私たちに斬られるといい。私たちの神が救いの手を差し伸べてくれるはずだ。」

俺がロックシードを開こうとすると

一誠「アーシアを魔女と言ったな！」

ゼノヴィア「少なくとも今は魔女と呼ばれるそ」一誠「ふざけんな！」

一誠「勝手にアーシアを聖女に祭り上げといてな！・・・アーシアはな・・・

ずっと一人ぼっちだったんだぞ！」

ゼノヴィア「聖女は神からの愛のみで生きていける存在。愛情や友情を求めるなど、元から聖女の資格など無かったのだ。」

蓮「お前ら、そろそろいい加減にしろや。もし、お前らがアーシアや一誠たちに何かするってんなら、俺はお前ら全員ぶっ倒す！」

ゼノヴィア「ほーう。一介の悪魔が大口を叩くね。それは我ら教会すべてに対する挑戦か。」

蓮「ああ。そう捉えてもいいぜ。なんなら、今すぐにでも戦うか。」

ゼノヴィア「そこまで言うなら、お前から断罪してやる。」

木場「いや、僕もやらせてもらおう。」

ゼノヴィア「君は？」

木場「君たちの先輩だよ。失敗作だけだね。」



そして俺はゼノヴィアと一誠と木場はイリナと模擬戦をすることになった。ゼノヴィア「殺さない程度に楽しもう。」

蓮「ふん。そう言われてられるのも今のうちだ。変身。」

オレンジ

ロックオン

オレンジアームズ！花道オンステージ！

蓮「いくぞ！」

そういい大橙丸と無双セイバーで切りかかったが躲され破壊の聖剣で切りかかってきたため無双セイバーで止めようとするが攻撃が重たくそのまま切られてしまう。

リアス「どうやら、鎧武になってる間は聖剣も効果も受けないみたいね。」

それで本当によかった。消滅するなんざまっぴらごめんだからな。

だが、やはり向こうは剣士、剣の技術で負けていたため、少しずつ押されていった。

ゼノヴィア「どうした、大口を叩いておきながらその程度か？」

蓮「こうなったら、やってみるか。」

俺は無双セイバーのトリガーをひき弾丸を放ちそれをゼノヴィアが躲したところ

で、一度距離をとった。

ザクロ

ロックオン

ブラッドザクロアームズ！狂い咲きサクリファイス！

蓮「さてこっちは新しい戦略を試したくてね。たっぷり味わってくれよ。」

俺はシドロックシードをセイヴァーアローに装着した後、クラックが閉じた後で植物を燃やす前に回収したスイカのロックシードを二つ投げた。

ロックオン

コネクティング

ヨロイモード

撃たれたスイカロックシードは無人スイカアームズになった。

ゼノヴィア「ふん、こんなのこけおどしだ！」

そう言い破壊エクスカリバー・デストラクションの聖剣で無人スイカアームズに切りかかったがすこしふらつく程度だった。

そして無人スイカアームズがスイカ双刃刀で反撃した。ゼノヴィアはギリギリで

はあるが躲せているらしい。

そして俺もチューリップホッパーを起動、乗り込み攻撃した。

一誠「おいおい、もう無茶苦茶じゃねえーか！」

蓮「そら、結構本気で怒ってるからな。今回はマジでやってる。」

ゼノヴィア「だったら、本体を狙うまで！」

そしてゼノヴィアは無人スйкаアームズの攻撃をかわした後こっちにまっすぐ向かってきたがチューリップホッパーで攻撃を躲しながら衝撃波を何度も撃った。

ゼノヴィア「ちょこまかと！」

蓮「変形」

大玉モード

今度は大玉モードで突撃させた。それも躲すが想定済みだ。

俺は躲した場所に衝撃波を撃ち横転したところを無人スйкаアームズをジャイロモードにし無人スйкаアームズとチューリップホッパーで囲んだ。

蓮「降参しろ。」

ゼノヴィア「ぐっ！」

ゼノヴィアは悔しそうにしながら剣を収め立ち上がった。

一誠たちはどうなってるんだろ・・・



一誠サイド

俺がパワーを溜めその間に木場は前線で戦っていた。

そして色々な魔剣を使った。

だが、どんな魔剣でもエクスカリバーに叩き折られていた。

くそ。もう少しでパワーが溜まるのに・・・。

『boost』

木場「なら僕の魔剣とそのエクスカリバーどっちが強いかな勝負だ！」

木場はでかい魔剣を創り上げそれで切りに行った。

イリナ「アーメン☆」

木場の一撃は簡単に避けられその後、峰内をされ吐血した後倒れた。

イリナ「さて、次はイツセー君の番だよ。」

『boost』

よしパワーが溜まった。へへへっ。成長したイリナの裸体十分拝ませてもらうぜ。

イリナ「何？そのやらしい顔。」

小猫「気を付けてください、イリナさん。一誠先輩は触れた女性の服をすべて消し飛ばす技があります。」

イリナ「服を!？」

一誠「小猫ちゃん！なぜに敵にネタバレしますか!」

小猫「女性の敵です。」

蓮「一誠・・・お前な・・・」

一誠「仮面の下で見えないけど、絶対憐んだ目で見てるだろ!」

蓮「なんなら、この際反省させるためにも無人スイカアームズをイリナさんに貸したほうがいいのか?」

一誠「おい！そんなことしたら、俺、確実に死ぬじゃねえーか!」

イリナ「なんて卑猥な技なの一誠君！悪魔になっただけでなく心まで邪悪に・・・。主よ！どうかこの変態をお許しにならないでください!」

まあ良い、何だろうとやってやる！

『Explosion』

一誠「洋服^{ドレス}・・・崩壊^{ブレイク}♡」

そして俺はイリナに突撃したが何度も躲されてしまう。

一誠「まだまだ！」

朱乃「イッセー君の動きがしなやかかつ機敏に！」

小猫「ただのスケベ根性です。」

蓮とリアス「「はぁ・・・」」

イリナはことごとく逃げていた。

イリナ「何なのもう！ヒィ！」

一誠「俺のエロを甘く見るな！」

そして俺はイリナにダイブした

が、躲され、部長たちにいる方向だった。

このままだと当たると思っていると・・・

大玉モード

突如声が響き俺の目の前に無人スイカアームズが降ってきて俺はそのスイカに当たった。

一誠「のわぁ！」

蓮「ふう。何とか間に合った。」

小猫「ありがとうございます。蓮先輩。」

蓮「よかった。よかった。」

一誠「良く・・ねえ・・よ」

そして、目の前が真っ暗になった。



蓮サイド

そしてゼノヴィアとイリナの話によるとやったのは神の子^グを見張る者^リの幹部のコカビエルが主犯らしく、

アーシアを助けるときに真っ先に会ったあのふざけたはぐれ神父のフリード・セルゼンも一枚かんでいるようだ。

問題はその後で・・・

リアス「待ちなさい！裕斗！」

絶賛木場が一人でも聖剣を破壊しに行くと言ってもめているのだ。

リアス「私の元を去ろうだなんて、許さないわ！あなたはグレモリー眷属の騎士なのよ！」

木場「・・・部長、すみません。」

リアス「裕斗！」

素晴らしい木場は出て行ってしまった。

ちなみに蓮とゼノヴィアが戦ったのは蓮がゼノヴィアに対してかなり怒っていたからです。蓮君が仲間思いになってきた。

{4} 聖剣使いと修行

そろそろ黒歌のライダーのアンケートを終了します。

期限は4月17日23…59の時を採用させていただきます。

一誠サイド

俺は木場を何とかしたいため匙をカフェに呼び、事情を説明し聖剣の破壊に協力してもらるように頼んだが、

匙「ふざけんな！ 聖剣なんてやばいものに関わったら会長にどんなお仕置きされるか・・・。

お前のところの主人は厳しくも優しいがうちのところは厳しくって厳しいんだぞ！

俺は帰る！」

案の定聖剣には関わりたくないみたいだし、やっぱダメか・・・。

あれ何で匙動いてないんだ？

そう思い立ち上がると小猫ちゃんが匙の服を掴み動けなくしていた。

小猫「やはりそんなことを考えていたんですね。」

一度三人とも席に着き

匙「やっぱ帰る。」

泣きながら言ったものの小猫ちゃんに服を掴まれ逃げなかった。

小猫「教会側に協力？」

一誠「ああ。あいつら堕天使に奪われるぐらいなら消滅させたほうがましって

言ってただろ。」

小猫「破壊してでも回収したいみたいですな。」

一誠「木場はエクスカリバーを破壊したい、あいつらはエクスカリバーを破壊してでも回収したい。」

目的が違っても結果は同じ。だからこちらから協力を願い出るんだ。」

小猫「素直に受け入れるとは思えませんが・・・。」

一誠「当たって砕けろだ！木場がまたこっちに戻ってこれるように、やれるこ

とは何でもやっておくべきだ！」

小猫「まずはあの二人を探してみましょう。心苦しいですが部長たちには内緒で動きましょう。」

とは言ったものの広い駒王町内で白いローブを着た二人組を見つけられるかどうか

ゼノヴィア「迷える子羊たちにお恵みを」

イリナ「天の父に代わって哀れな私たちにお慈悲を」

・ ・ ・ なんて普通にいるんだよ。まあ今回は良かったが。



場所は代わってファミレス

ゼノヴィア「うまい。うまいぞイリナ、ここの食事は。」

イリナ「これよ、これ。ファミレスこそが私たちのソウルフード！」

すげえ食いつぶりだな。

ゼノヴィア「信仰のためとはいえ悪魔に助けられるとは・ ・ ・。」

イリナ「私たちは悪魔に魂を売ってしまったのよ。」

一誠「奢っというてもらってそれかよ！」

小猫「一誠先輩。」

一誠「怒らせたら元も子もないからな。」

ゼノヴィア「それで、私たちに接触したきた理由は？」

一誠「エクスカリバーを破壊するのに協力したい。」

ゼノヴィア「何？」

ゼノヴィアとイリナに事情を説明し終わると後ろから声が

蓮「そんなこと企んでいたのか。」

一誠「蓮！なんでお前が！」

蓮「普通に食事してたらまたまお前らが来ただけだ。」

まずいぞ・・・蓮から部長に伝えられたら・・・

一誠「なあ。蓮、頼むこのことは部長たちには言わないでくれ。」

蓮「はあ。しゃあねーな。今回だけだぞ。」

一誠「すまねえ。恩に着る。」

蓮「まあ、お前らだけだと心配だし、ほれ」

そして蓮はイチゴとマンゴーのロックシードを三つずつ渡した。

蓮「別の用事で協力はできないが俺からの餞別だ。俺も木場には戻ってきてほしいからな。」

一誠「おお！あんがとな蓮！」

蓮「いいよ。それとここは俺が払つといてやるよ。さすがに普通の高校生だしついでらろ。」

ただゼノヴィアさんとイリナさんには頼みがある。」

ゼノヴィアとイリナ「？」

蓮「こいつらを守ってやってくれ。大切な仲間だから、頼む。」

そして蓮は頭を下げてお願いした。

ゼノヴィア「まあ。食事の礼ぐらいは返すつもりだ。」

イリナ「今は協力するんだし。任せといて。」

蓮「それを聞けて安心した。ならよろしく頼んだぞ。」

そういう蓮は俺たちの会計の分のお金を置いて出て行った。

なら、次は木場だな。



蓮サイド

俺はファミレスを離れその後クラックからヘルヘイムの森に入った。

そして果実の少ないところに行った。

蓮「ここなら誰の邪魔も入らないか。」

神様ー

神様『どうしたんですか？』

蓮『今の俺ってさすがにエナジーロックシードを使えないですよね。』

神様『まあ。もう少し強くなってもらわないと渡せないですね。それがどうかし

たんですか？』

蓮『神様に頼みがありまして、少し俺に修行をつけてほしい。』

神様『なるほど。まあ、かまいませんよ。私も暇なので、とりあえずやります

か。』

そういうと俺の前に黒影トルーパーが三体現れた。

神様『まずは、この三体を倒してみてください。わかっているとありますがスイカ

はなしですよ。修行になりませんから。』

蓮「よーしやるか。変身。」

こうして俺の修行が始まった。



一誠サイド

俺たちは蓮と別れた後木場と合流し事情を話した。

木場「なるほど。でも、正直エクスカリバー使いに破壊を承認されるのは遺憾だね。」

ゼノヴィア「ずいぶん物言いだな。君はグレモリー眷属を離れたそうじゃないか。ここではぐれとみなしてここで切り捨ててもいいんだぞ！」

木場「そういう考えもあるよ。」

そういいゼノヴィアと木場は戦いそうになる。

一誠「待てよ！ 共同作戦前に喧嘩はやめろって！」

ゼノヴィア「君が聖剣計画を憎む気持ちは理解できるつもりだ。あの事件は私たちの間でも最大級に嫌悪されている。だから、計画の首謀者は異端の烙印を押され

追放された。」

イリナ「バルパー・ガレイ。皆殺しの大司教と呼ばれた男よ。」

木場「バルパー……。その男が僕の同志を……。」

ゼノヴィア「手先にはぐれ神父を使ったと言っていたな。」

一誠「フリードのことか。」

ゼノヴィア「教会から追放されたもの同士が結託するのは珍しくない。今回の件にバルパーが関わっている可能性は高いだろうな。」

木場「それを聞いて僕が協力しない理由はなくなったよ。」

イリナ「じゃ、話はついたわね。」

ゼノヴィア「それでは失礼させてもらうぞ。」

これで最初の難関は突破したな。

一誠「よかったな。おい♪」

匙「良かったじゃねえーよ！ 神側との争いになってもおかしくなかったんだぞ

！」

木場「一誠君」

一誠「お前には何度も助けられたからな。」

木場「君たちは手を引いてくれ。今回の件は僕の個人的な復讐だ。君たちを巻き込むわけにはいかない。」

一誠「俺たち眷属だろ！仲間だろ！」

木場「違わないよ。でも・・・」

一誠「大事な仲間をはぐれにさせられっか！部長だって悲しむぞ！いいのかそれで！」

木場「リアス部長・・・そうあの人と初めて出会ったのは聖剣計画がきっかけだった。」

木場は悲しそうな顔を浮かべながら俺たちに話してくれた。

木場「来る日も来る日も、実験の毎日だった。自由もなにもなかった。それでも皆神に選ばれたものだと思いつく特別な存在になれるはずだと必死に耐えていた。」

でも一人として聖剣には適応できなかった。実験は失敗だったんだ。すぐに僕たちは処分された。計画を隠蔽するために。

僕たちは血反吐を吐きながらも神に救いを祈った。そしてみんなのおかげで僕だけ逃げる事ができた。

だが、体は確実に弱っていた。そして逃げた先で死にかけた時に部長に出会ったんだ。

眷属として僕を迎え入れてくれた部長には心から感謝しているよ。

でも、僕は同志たちのおかげであそこから逃げ出せた。だから僕は同志たちの恨みを魔剣に込めて、エクスカリバーを破壊しなくちゃならない。

それが唯一生き残った僕の贖罪であり義務なんだ。」

木場お前にそんなことがあったか……

匙「うおーっ！ 木場！ お前にそんなつらい過去があるなんてなこうなったら会長のお仕置きが何だってんだ！ 兵藤！ 俺も全面的に協力させてもらうぜ。」

一誠「そ、そうか、サンキュー。」

小猫「……私も裕斗先輩が居なくなるのは寂しいですし協力します。」

木場「困ったな。小猫ちゃんにそんなこと言われちゃったら僕一人で無茶なんてできないじゃないか。」

一誠「それじゃあ！」

木場「本当の敵も分かったことだし。皆の好意にあまえさせてもらうよ。」

{5} 神父

大幅に遅くなりすみません。

黒歌のライダーはマリカに決定しました。

それでは本編へどうぞ。

一誠サイド

あれからアーシアには召喚で呼ばれたと言った後その召喚してくれたひとには申し訳ないがお休みさせてもらって、エクスカリバーを破壊するやつらみんなで前にアーシアが捕まっていた教会に集まっていた。

一誠「悪魔が神父の服装ねえ・・・。」

イリナ「抵抗はあるかもしれないけど。」

木場「目的のためならなんだってするさ。」

ゼノヴィア「全員で動くのは非効率だ。二手に分かれようか。」

一誠「なら、俺たちは東のほうに行く。」

ゼノヴィア「なら、われらは西のほうへ行こう。なにかあったら連絡してくれ。」

一誠「わかった。それと皆にこれを。」

俺は蓮からもらった。ロックシードを一人一個ずつ渡した。

一誠「やばそうだったら錠前を開いてくれ。」

ゼノヴィア「ああ。わかった。それと兵藤一誠。君に言い忘れてたことがある。

白い龍はすでに目覚めているぞ。」

一誠「!!」



蓮サイド

蓮「はあはあはあ。」

神様「まあまあよかったですよ。」

俺は修行していたわけだが・・・途中からおかしいだろ！

なんで黒影トルーパー倒したら「次はこれです☆」なんて言ってイノシシインベス出すんだよ！

しかも「スイカはなしです☆」とか鬼か！

そこからさらに終わったら「まだまだいきますよ」と無人スイカアームズが大量に出てくるんだよ。

ゼノヴィアの気持ちがいさしわかった気がする。あれは勝てん。それら諸々を繰り返していた。

神様「まあ。頑張っていましたし、これ。」

と言われ無理に体を起こし見てみるとそこにはレモン、チェリー、ピーチ、メロン、ドラゴンフルーツのエナジールロックシードを渡してくれた。

蓮「おお！ありがとうございます！」

つい、紘汰さんが阪東さんのバイトの採用の時みたいに泣きながら言ってしまった。

なんか恥ずかしいな。

神様「まあ。今日は疲れたでしょうし家まで送りますね。ではさよなら。」

蓮「へ？」

俺は横になっていたが突然下にクラックが開かれた。

蓮「あの鬼畜神いいいいいい！！！！」

そしてちょうど家のカーペットのところに落とされ、ボロボロの状態で真上からクラックで帰ってきたため黒歌に心配された後泣きながらこっぴどく怒られた。あと小猫ちゃんがいなのは多分あの件だな。



一誠サイド

ドライグ『気を付けるんだ相棒。いつ目の前に白いやつが現れるかわからんな。』

俺はゼノヴィアから聞いた白い龍についてずっと考えていた。

だが、もう目覚めてるのか。聖剣だけで手一杯ってのに・・・

小猫「どうかしましたか？」

一誠「いや、次はどこに行こうかなと思ってな。」

木場「やはり人気のない場所か。」

一誠「心当たりあんのか？」

木場「ないことはない。」

一誠「なら案内してくれ。」

木場「わかった。」



そして木場の案内についていくと・・・

一誠「ここってバイザーはぐれ悪魔が居たところじゃねえか。」

匙「はぐれ悪魔？」

一誠「ああ。前に蓮が退治した人だか悪魔だかわかんなくなっちゃった、ただの怪物だ。」

!!!!

話していると急に悪寒がしてきた。

小猫「裕斗先輩。」

木場「うん。」

一誠「なんだこの悪寒。」

小猫「上！」

フリード「ヒャッホー！」

小猫ちゃんが言ったと同時に上からフリードが襲い掛かってきた。

だが木場の生み出した魔剣によりはじき返されまたフリードは上に戻った。

フリード「こないだはどうも。」

木場「お前は・・・」

匙「例のはぐれ神父。」

一誠「フリードデメェ！」

フリード「おやおや、前のくそ悪魔どもじゃないですか。

今夜も楽しく神父狩り☆って思ってたのに、くそ悪魔どものコスプレだよ。」

小猫「気を付けてください。あの剣は・・・」

一誠「ああ。イリナと同じエクスカリバーだ！」

『boost』

そして各々が戦闘態勢に入る

フリード「おやおや。四人がかり？人気者は辛いっすね」

木場「勘違いするな。僕一人が相手だ。」

一誠「木場!!」

フリード「まあ、くそ悪魔どもが何人来ようとこのエクスカリバーちゃんには敵いませんがね。」

木場「!!」

木場がフリードに切りかかろうとしたがすごいスピードで上に行った。

そして上から勢いをつけエクスカリバーを振り下ろした。

フリード「これが^{エクスカリバー・ラビットリイ}天閃の聖剣の力！」

木場は何とかはじき返すがフリードは木場と同じ速度で動いていた

一誠「同じスピードで動いているから騎士のすびろを封じられたも同然か。」

小猫「かなりまずそうです」

一誠「なら使ってみるか。」

俺はイチゴのロックシードを開くと突如クラックが一時的に開きインベスが出てきた

一誠「力が溜まるまで木場を援護してくれ」

そういうとインベスはうなずきフリードに攻撃しに行った。

フリード「なんか変な奴だしてもエクスカリバーの敵ではないつつうの！」

エクスカリバーでインベスを切ったが火花が散るだけでそこまでダメージは入ってなかった

フリード「嘘！」

木場「はああ！」

フリード「ちっ！うぜえ！」

『boost』

そして俺はロックシードを閉じインベスを返した。

一誠「よし、パワーは溜まった。後はあいつの足さえ止められれば木場に力を譲渡してやれんのによ。」

匙「兵藤、足を止めればいいんだな。ラインよ」

そういうと匙の手には神セイクリッド・ギア器があった。

匙「行け！ライン！」

そういうと匙の神器からラインが飛び出てフリードの足に巻き付き動きが止まった。

匙「俺の神器、黒い龍脈だ。」

フリード「くそ！この神器もドラゴン系かよ！」

一誠「それもドラゴンなのか！え？」

小猫「いきますよ」

そういうと小猫ちゃんは俺を木場の方に投げた。

一誠「木場ー！ー！！！」

『transfer』

俺は木場に力を譲渡した

一誠「ドラゴンの力確かに送ったからな。」

木場「もらったものは仕方ない。ありがたく使わせてもらおうよ！」

フリード「このベロベロが！」

木場「行くぞ！魔剣創造！」

そういい木場が魔法陣を作り魔剣を作り上げ追いつめていた。

？？？「ふん。魔剣創造か」

木場「誰だ！」

木場がそういうと中から神父姿のおじいさんが出てきた。

??? 「使い手の技量次第では無敵の力を発揮する神器。

フリード、まだ聖剣の扱い方が十分ではないようだな。」

フリード 「おお！ バルパーのじいさん。」

木場 「なに！」

一誠 「それじゃあ、こいつがゼノヴィアが言っていた。」

小猫 「聖剣計画の首謀者。」

木場 「バルパーガリレイイイ！」

バルパー 「いかにも。」

フリード 「そう言われてもねえ。この糞トカゲのベロベロが邪魔なんだ。」

バルパー 「流れる因子を刀身に込めろ。切れ味がよくなるはずだ。」

フリード 「流れる因子を刀身にね。」

その途端エクスカリバーの雰囲気が変わった。

一誠 「！ 気をつけろ。やばいぞ！」

フリード 「おおお！ おっほー！」

エクスカリバーオーラがフリードにもいった。

そしてさっきまで全然切れなかったのに匙の神器からでた舌が切られた。

それによりバランスが崩れた匙は倒れた。

フリード「なるほど。流れる因子を有効活用すればさらにパワーアップってか。それじゃあさっそく死ねえ！」

そういいフリードは木場に切りかかったが横から別の剣が現れ止められた。

その剣はゼノヴィアのもだった。

フリード「あれえ？」

一誠「ゼノヴィア！」

イリナ「やつほー。連絡もらったから駆け付けたわよ。」

匙「なんで？」

小猫「・・・そういう手筈でしたので。」

ゼノヴィア「反逆の徒、フリード・セルゼン、バルパー・ガリレイ。神の名のものと断罪してくれる！」

フリード「俺の前で生意気な名前を出すなこの糞ビッチが！」

木場「今だ！」

ゼノヴィアとフリードの剣が拮抗している時に木場は上から切りかかろうとするが避けられてしまった。

バルパー「フリード。お前の任務は潜入してきた教会の人間を消すことだ。今回は聖剣使いが二人に悪魔まで居ては分が悪い。ここは引くぞ。」

フリード「合点承知の助。バイチャラバ。」

そういうと閃光弾で俺たちが怯んでる間に逃げてしまった。

ゼノヴィア「追うぞ！イリナ。」

まずゼノヴィア、イリナ、木場、は後を追いかけて行った。

一誠「待ってくれ！木場！たくななんだよ！どいつもこいつも！」

リアス「困ったものね。」

一誠・匙・小猫「「え？」」

そういわれ三人が振り返ると部長、朱乃さん、に生徒会長と副会長がいた。

一誠・小猫「部長!？」

匙「会長!？」

リアス「これはどういうことなのかしら。イッセー。」

蒼那「匙。説明してもらいますよ。」



前にバイザーがいた屋敷の中

黒歌さんと蓮もとりあえず呼び話すことにした。

リアス「いくら不干涉とは言え、状況の把握だけしときたかったから、朱乃に教会の二人を見張らせていたの。」

蒼那「匙！あなたはこんなにも勝手なことをしていたのですね。全く困った子です。」

匙「ひい！すみません。会長。」

リアス「それじゃあ裕斗はそのバルパーを追ったのね。」

一誠「はい。ゼノヴィアとイリナと一緒に・・・なんかあったら連絡くれると思うんですけど。」

蓮「いや。復讐したい気持ち先走って多分連絡しては来ないだろ。」

蓮が言ったことも正論だった。

リアス「小猫。あなたまでなんでこんなことを？」

小猫「……私は裕斗先輩が居なくなるのは寂しいです。」

リアス「はあ。過ぎたことをあれこれ言わないけど。あなたたちがやったことは悪魔の世界に影響を与えるかもしれないのよ。それはわかるわね？」

小猫・一誠「はい。すみません。」

バチーン

その音の方を見ると匙が生徒会長に魔力を使って尻叩きされていた。

匙「ヒィー！会長、許して！」

蒼那「ダメです。お尻叩き千回です。」

一誠「尻叩きにまで魔力を!?……まさか部長も!?!」

部長の方を見ると部長はこっちに歩いてきた。

リアス「一誠。小猫。」

一誠「は、はい。」

リアス「馬鹿な子たちね。心配ばかりかけて。」

そう言って部長は俺と小猫ちゃんを抱きしめてくれた。

一誠（俺、部長の下僕でよかった。）

匙「なんかあっちはいい感じで終わってますけど!？」

蒼那「よそはよそ。うちはうちです。」バチーン

リアス「さて、イッセー、お尻を出しなさい。」

一誠「え？許してくれるんじゃない?！」

リアス「そうはいかないわ。下僕の躰は主の務め。あなたもお尻叩き千回ね。」

一誠「せ、千回!？」

リアス「イッセー！お尻を出して！」

バチーン

そこからはもう記憶がなかった。

〈おまけ〉

一誠が何百回かお尻叩きを受けていると、一誠のポケットからロックシードが出てきた。

リアス「あら。蓮、これは何かしら。」

蓮「あ。」

蓮（やべえー。や。）

蓮「いやそれは前に渡したもので。」

リアス「あらそうかしら。小猫。あなたも持ってるでしょ。」

小猫「・・・はい。」

蓮「ちょ！小猫ちゃん!？」

小猫「一緒に罰を受けましょう。」

蓮（やばいやばいやばいやばい）

リアス「さて、蓮、あなたも報告せず隠していて共犯みたいですしお仕置きね。」

蓮「いや、待ってください。話せばわかります。」

リアス「朱乃。よろしく。」

朱乃「はい。部長。さて蓮君、楽しませてもらいますよ。」

そういうと魔法陣から戦闘の時程ではないが雷を出した。

びりびりびりびり

蓮「お、お助け！アババババババババッ!!」

蓮（やべえ。あの人笑顔で雷打ってきたよ。）

朱乃「まだまだ行きますわよ。」

蓮「もうやめてー！！」

蓮はこの時、朱乃さんだけは絶対に敵に回さないでおうと心に誓った。

〔6〕墮天使現れる

蓮サイド

あの後から木場からの連絡もなく今は使い魔を町に放って搜索中だが、どうやら部長の使い魔が何かを発見したようで、皆で魔法陣でそこに行ってみると服もボロボロで傷だらけになったイリナさんが居た。

一誠「イリナ!! アーシア頼む!!」

アーシア「はい。でも誰がこんな・・・」

イリナ「う、くう・・・」

一誠「イリナ何があった？ 木場とゼノヴィアは？」

イリナ「木場君と・・・ゼノヴィアは逃げたわ。」

一誠「逃げた？」

イリナ「私だけ・・・逃げ・・・遅れて・・・」

アーシア「しゃべってはダメです。」

イリナ「あいつの・・・力・・・半端じゃ・・・ない。」

一誠「あいつ？あいつって？」

イリナ「気を・・・つけ・・・て・・・」

そしてイリナさんは気を失った。

一誠「イリナ!!」

皆がイリナさんを心配していると魔法陣が現れ生徒会長達が現れた。

リアス「ソーナ！来てくれたのね。」

ソーナ「連絡をもらって来ないわけにはいかないでしょう。・・・ダメージが大きそうですね。」

アーシア「はい。トワイライト・ヒーリング聖母の微笑みは傷は治せますが、失った体力は回復できません

から。」

ソーナ「私の家なら治療設備があります。椿。頼みましたよ。」

椿「はい。わかりました。」

そういい椿さんはイリナを魔法陣で連れて行った。

一誠「とりあえず、木場とゼノヴィアの方は無事みたいだな。」

匙「お前のお尻は大丈夫か？」

一誠「俺はすぐアーシアに治してもらったからな。それより悪かったな匙。巻き込んで。」

匙「それよりこれはどういことだよ？」

一誠「それが俺たちも来たばかりでさっぱりでさっぱり……！」

蓮「この悪寒ってまさか！」

すると近くの木の陰から人が出てきた。

フリード「やあやあやあ。餌をかぎつけてやってきましたね。糞惡魔ども。」

一誠「フリード。」

蓮「あの教会にいたやつか。」

フリード「んんん？その声、お前あの時の糞鎧武者か。それに惡魔に寝返ったアーシアちゃん。糞惡魔ライフ満喫しちゃってる。」

一誠「お前、もしアーシアに手え出そうってんなら俺が」

そうこう言っているとソーナさんも前にでて部長とソーナさんは魔法陣をだし攻撃しようとした。

フリード「おいおい！ちょい待ち！ちょい待ち！その赤毛のお嬢さんに話が

あるんだって。」

リアス「話？」

フリード「ああ。うちのボスがさあ！」

その途端周りは結界が張られていた。そして一人の墮天使が現れた。

小猫「！墮天使。」

朱乃「それも翼が十枚、幹部クラスですわ。」

墮天使「初めましてかな？グレモリー家の娘。我が名がコカビエル。」

リアス「どうも。墮ちた天使の幹部さん。私はリアス・グレモリー。以後お見知りおきを。」

コカビエル「紅髪が麗しいものだな。紅髪の魔王、サーゼクスと似ていて反吐が出そうだよ。」

リアス「それで、私に接触してきたのは何が目的かしら。幹部じきじきにいらして。」

コカビエル「お前のン根城である駒王学園を中心に暴れさせてもらおうかなと思ってるな。」

リアス「私たちの学園を!？」

コカビエル「そうすれば嫌でもサーゼクスは出てくこざるを得ない。だろ。」

リアス「そんなことをすれば、神と墮天使と悪魔の戦争が再び勃発するわよ。」

コカビエル「ははは。エクスカリバーを奪えばミカエルが仕掛けてくるかとも思ったが、来たのは雑魚のエクソシストとエクスカリバー使いがたったの二匹だけでつまらなかった。」

ソーナ「なら最初から!」

リアス「戦争を起こすことが目的。」

コカビエル「ああ。アザゼルもシエムハザも次の戦争には消極的でな、だが悪魔と天使、墮天使はギリギリのところで均衡を保ってるだけにすぎんならばこの手で戦争を引き起こしてやるだけだ。」

リアス「完全な戦争狂ね。」

コカビエル「次は悪魔に仕掛けさせてもらう。ルシファアの妹、リアス・グレモリー。レヴィアタンの妹ソーナ・シトリー。その二人が通う学び舎ならさぞ魔力の波動も立ち込めて戦争にはもってこいってわけだ。」

匙「無茶苦茶だ。」

一誠「頭が完全にいかれてやがる。」

フリード「ははは。うちのボス、このいかれ具合が最高でしょ。俺も張り切っちゃうわけさ。こーんなご褒美もいただいちゃうしさ。」

そしてフリードが出したのは手に持っているもの合わせて3本の聖剣だった

小猫「エクスカリバー。」

蓮「ならあれ全部エクスカリバーか!!」

フリード「無論もちろん全部使えるハイパー状態なんざます。それにこの擬態エクスカリバー・ミミックの聖剣やこの錠前もあのツインテールのお姉さんから頂きやしたんで。」

蓮「ロックシードまで・・・」

コカビエル「戦争をしよう。魔王の妹、リアス・グレモリーよ！」

そういうとコカビエルは魔法陣から大量の光の槍を出した。

リアス「皆逃げて！」

そういうと部長と朱乃さんにソーナさんは魔法陣でガードし各々は躲しているといつの間にか結界も無くなりあいっつらはいなくなっていた。

匙「あいつらどこに？」

黒歌「あっちに行ったにゃ・・・」

黒歌が指をさしているのは駒王学園だった。

一誠「あいつらマジで学園を！」

ソーナ「いえ、駒王学園を中心につて言っていましたので被害はもっとでかくなるでしょう。」

蓮「それってまさか!!」

ソーナ「ええ。あのクラスの墮天使ならこんな地方都市程度滅ぼすのはたやすいでしょう。」

一誠「この街を・・・ふざけんなよ。ふざけんなよ！あの糞墮天使！」

リアス「学園に向かうわよ！」

そして俺たちは駒王学園に向かった。

〔7〕 聖剣と魔剣

蓮サイド

俺たちはコカビエルを追って駒王学園に行った。

ソーナさんが学園を結界で覆ってくれたのでとりあえずの被害はないようだ。それにイリナさんも命に別状は無く、朱乃さんが魔王様に連絡を入れたところ一時間後に来てくれるようだ。

リアス「一誠。あなたには赤龍帝の籠手で力を溜めて、皆に譲渡してほしいの頼める？」

一誠「了解です。部長。」

リアス「一誠が力を譲渡できるような時間を稼ぐわよ。」

蓮・朱乃・小猫・黒歌「[[了解です（わかりました）（了解にゃ）。」

リアス「一誠・・・あてにしてるわ。」

一誠「はい！」

リアス「今回はライザーの時とは違って命を懸けた戦い、でも私たちに死ぬこと

は許されないわ。皆で生きて帰りましょう!!」

リアス以外「「「はい。」」」

プロモーション

そして一誠が昇格で女王になった後グラウンドに出ると光輝いている魔法陣があった。

リアス「あれは・・・」

コカビエル「四本のエクスカリバーを一つにするそうだ。あの男の願いらしくてな。」

上を見るとコカビエルがいた。

リアス「コカビエル!!」

コカビエル「サーゼクスはどうした？それともセラフォールが来るのか？」

リアス「あいにく魔王様ではなく私たちが相手よ。」

部長がそういうとコカビエルは少し大きめの光の槍を作った。

とっさにみんなが戦闘態勢に入ったがコカビエルはその槍を体育館に落とすといきなり大爆発を起こし体育館は跡形もなく消えた。

一誠「体育館が！」

蓮「なんちゅう威力だよ・・・。」

コカビエル「つまらん。まあ余興ぐらいにはなるか。とりあえず来てもらったんだ。俺のペットと遊んでもらおうか！」

そういうと魔法陣が現れそこからでかい火柱から出てきたのは三体のケルベロスだった。

リアス「ケルベロス!？」

朱乃「冥界のもんに生息する地獄の番犬ですわ。」

リアス「いくわよ！」

蓮・朱乃・小猫・黒歌「」「了解（はい）（了解にゃ）」「」

リアス「一誠は赤龍帝の籠手でパワーの強化を。」

一誠「了解しました。赤龍帝の籠手!!」

『boost』

蓮「いきなり飛ばさざるを得ないか、変身。」

スイカ

ロックオン

ソイヤ！

スイカアームズ！大玉ビッグバン!! ヨロイモード

俺はスイカ双刃刀で切りかかったが躲され三つの首から炎が出されたがスイカ双刃刀でガードしつつ戦った。

部長たちの方も攻撃は当たっても倒されてはいないようだ。

そうしていると部長たちの方のケルベロスの首の一つが落ち、その方向にはゼノヴィアがいた。

ゼノヴィア「加勢に来たぞ。」

『boost』

一誠「パワーは溜まったが蓮と部長たちどっちに譲渡したら・・・。」

確かにケルベロスに分断され一回の譲渡では片方にしかできないか。

蓮「一誠。迷わず部長たちに譲渡しろ。」

一誠「でもお前1人でいけ・・・蓮「いけるから早くしろ!!」わかった！」
ならこっちも決めねえとな。

スイカスカッシュ

いつもより大きめのスイカのエネルギーを溜めそれにケルベロスを閉じ込めそのエネルギーごとケルベロスを切り、ケルベロスは爆散した。

それと同時に木場が現れ巨大な魔剣でケルベロスを串刺しにして動けなくしたところを一誠に力を譲渡してもらった部長と朱乃さんが最後の一体を倒したところだった。

コカビエル「なかなか良い見世物だったぞ。」

リアス「っ！喰らいなさい！」

部長はいつもより特別でかい滅びの魔力を撃った。

だがコカビエルはそれを片手で弾いた。その魔力は地面に当たるとでかいクレイターができる程にも関わらずだった。

コカビエル「ほーう。赤龍帝の力があればここまで力を上げれるのか・・・面白い。面白いぞ！」

バルパー「完成だ！・・・！」

木場「しまった！」

バルパー「これで、剣が統合された！」

そして剣が統合した時に出た光の柱は地面に流れていき魔法陣が出来上がった。コカビエル「剣が統合されるときに出てくる膨大なエネルギーは俺が頂く。そういう取引でね。」

リアス「その力を使って大地崩壊の術をかけたわ。」

一誠「まじで俺たちの町が滅びんのかよ。」

バルパー「いますぐ逃げるとよい。後、二十分もしないうちにこの町は崩壊する。」

なら魔王様の到着は期待できねえな。

コカビエル「止めたいなら。俺を倒すしかないぞ。さてどうする、リアス・グレモリー!!」

リアス「知れたことを!!」

そして部長と朱乃さんの攻撃したが、コカビエルはいとも簡単に止め、それを統合して返した。

それは朱乃さんの防御用の魔法陣も破壊し貫通した。

そして朱乃さんが落下するところに一誠がキャッチした。

朱乃「一誠君!？」

一誠「大丈夫っすか? 朱乃さん。」

木場「バルパー・ガレイ、僕は聖剣計画の生き残りだ。そして悪魔になることで生きながらえた。僕は死ぬわけにはいかなかった。死んでいった同氏の仇を打つためにもね!」

そう言っているとコカビエルが木場に光の槍を投げようとしていた。

リアス「危ない! ! ! !」

ちっ! 木場の状態上避けそうにない。なら!

大玉モード

俺は大玉モードで転がり木場に光の槍が当たらないよう跳んで槍を受け止めた。

蓮「ぐあああああ!」

だがその一撃は強力でスイカのアームズの鎧の一部を貫通し爆発で中までダメー
ジが入り吹き飛ばされ変身が解除し所々から出血していた。

一誠「蓮!!」

コカビエル「ふん。鎧のおかげで死にはしなかったか。」

黒歌「無茶すぎにゃ!!」

蓮「ご・・めん」

今は黒歌の仙術で回復してもらっている。

コカビエル「フリード。最後の余興に4本の力を統合したエクスカリバーでこいつらをまとめて始末しろ。」

フリード「へへい!!超スペシャル仕様になったエクスなカリバーちゃん、確かにはいただきやした。さて、誰から始末しちやいましょうかね。」

バルパーは木場に近いていき話した。

バルパー「被験者が一人脱走したままと聞いておったが悪魔に落ちておったとはな。君たちのおかげで計画は完成した。

確かに君たち被験者は聖剣を扱える程の因子の数値を示さなかった。そこで一つの仮説にたどり着いた。被験者から因子だけを抜け出せばよいとわかった。

これはあの時のものだ。最後の一つになってしまったがね。」

木場「!!!!」

素晴らしいバルパーは青い宝石上のものを出した。

フリード「ははは。俺以外の奴は途中で体が因子に追いつかず死んじゃったんだぜ!! そう考えると俺ってばスペシャル仕様だな!」

そういうながらフリードはエクスカリバーで一誠と小猫ちゃんに襲い掛かっていった。

ゼノヴィア「あれは・・・我ら聖剣使いが祝福を受けるときあのようなものを体に入れるが因子の不足分を補っていたというわけか。」

バルパー「偽善者めが! 私を異端にしておいても私の研究成果だけは利用しおつて。まあミカエルのことだ因子をとつても殺してはいないだろうがね。」

木場「なら僕たちも殺さなくてもよかったはずだ。なのにどうして。」

バルパー「お前たちは極秘計画の実験材料に過ぎん。失敗すれば君たち、実験材料は廃棄するしかなかるう。」

木場「僕たちは主のためと信じてきたのにそれを実験材料、廃棄・・・」

そういうとバルパーは因子を木場の方に投げ渡した。

バルパー「欲しければくれてやる。もはやさらに完成度を高めたものを量産できるからな。」

木場「・・・みんな・・・」

一誠「許せねえ、じじいテメェ!!」

木場「バルパー・ガレイ。あなたはそうやってどれほどの命を弄んできた。」
そういうと木場の持つ因子が光を放ちそこから半透明ではあるが人が何人も出てきた。

アーシア「あれは」

小猫「人？」

一誠「そんな風に見えるな。」

朱乃「おそらくこの線上に漂う様々な力と裕斗君の心の震えが結晶から魂を解き放ったのでしょう。」

木場「僕はずっと思ってたんだ。僕が、僕だけが生きていて本当にいいのかって。僕より夢を持った子がいた。僕より生きたかった子がいた。」

僕だけが平和な暮らしを過ごしていいのかって！」

木場がそういうと木場の同志たちが聖歌を歌い始めた。

本来聖歌は悪魔にダメージを与えるはずだが全員が涙を流していた。

木場の方も悲しみから出ていた涙から感動の涙へと変わり、温かくその場を包み込んでいた。

そして木場の同志は木場に話始める。

『大丈夫。』

『皆集まれば。』

『たとえ神様が居なくても。』

『たとえ神様が僕たちを見てなくても。』

『僕たちの心はいつだって。』

木場「一つ。」

そしてその光は木場を包み込む。まるで一つになろうとするかのように。

小猫「温かい。」

一誠「なんだ。涙が止まんねえ。」

木場「バルパー・ガリレイ。同志たちは僕に復讐なんて願っていなかった。でも、

僕は目の前の邪悪を打ち倒さなければならぬ。第二、第三の生み出さないために

！」

そして木場は一本の剣を創った。

バルパー「フリード!!」

フリード「はいな!」

バルパー「ふん。素直に廃棄されておけばよかったものを。」

一誠「木場!!!! フリードの野郎とエクスカリバーをぶっ倒せ!! アイツらの想いを! 願いを! 無駄にするんじゃないわ!!」

リアス「やりなさい裕斗。あなたはリアス・グレモリーの騎士よ。私の騎士はエクスカリバーごときに負けはしないわ。」

朱乃「裕斗君、信じてますわよ!」

小猫「ファイトです。」

蓮「絶対に勝てよ!! 裕斗!!」

アーシア「木場さん!」

裕斗「皆。」

フリード「はああ。なーに感動シーン作っちゃってんすか。あーもう聞くだけで肌がさついちゃってもう限界! あーとっととお前ら切り刻んで気分爽快になり

ましようかね！」

裕斗「僕は剣になる。同志たちよ今こそ超えようあの時果たせなかった思いを。

魔剣創造！」

そういうと裕斗の持っていた剣は変わった。

裕斗「ソード・オブ・ビクトレイヤ双覇の聖魔剣。聖と魔を有する剣の力、受け止めるといい。」

バルパー「聖魔剣だとい!? 馬鹿な反発する二つの力が融合するなど有り得るはずがないのだ。」

ゼノヴィア「リアス・グレモリーの騎士よ、まだ共同戦線は生きているか？」

裕斗「そうだと思いたいね」

ゼノヴィア「ならば共に破壊しよう。あのエクスカリバーを・・・」

裕斗「良いのかい？」

ゼノヴィア「あれはもはや聖剣であって聖剣ではない。異形の剣だ。」

裕斗「わかった。」

ゼノヴィア「ペトロ、バシレイオス、ディオニュシウス、そして聖母マリアよ。

我が声に耳を傾けてくれ。」

ゼノヴィアがそういうと別の剣が黄金の紋章から現れる。

ゼノヴィア「この刃に宿りしセイントの御名において、我は解放する！ 聖剣、デュランダル!!」

そういうとデュランダルの鎖は外れた。

裕斗「聖剣！」

一誠「デュランダル！」

朱乃「この世のすべてを切り刻むといわれている。エクスカリバーに並ぶ聖剣ですわ。」

バルパー「馬鹿な。私の研究ではデュランダルを扱える領域まで達してないぞ。」
ゼノヴィア「私はそいつやイリナと違って数少ない天然ものだ。」

バルパー「完全な適正者。真の聖剣使いだともいうのか！」

ゼノヴィア「こいつは私のいうこともろくに聞かない暴君だね。それ故、異空間に閉じ込めておかないと危険極まりないんだ。」

フリード「そんな展開ありですか!？」

そしてフリードが剣を変形してゼノヴィアを切りかかろうとするがデュランダル

に壊され元に戻されてしまう。

フリード「ここにきての超展開!!」

ゼノヴィア「所詮は折れた聖剣。このデュランダル敵ではない。」

そしてゼノヴィアがフリードを切ろうとするがすごい速さで躲される。

フリード「くそが。ならこれはどうだ！」

フリードはロックシードを開きライオンインベス呼び出すが、

ゼノヴィア「無駄だ!!」

ゼノヴィアが上からライオンインベスに切りかかるとインベスはガードしようとするがそのままガードを押し切りインベスを何度も切りかかりインベスは爆散した。

フリード「くそつたれが!! そんな設定いらねえんだよ!!」

裕斗「そんな剣で僕たちの想いには勝てない!!」

フリード「折れたー!? まじですかこの俺が糞悪魔ごときにゴハア。」

そして空中で切りあうが裕斗の剣がエクスカリバーを叩き折り、フリードの肩を切りフリードは完全に気絶した。

裕斗「見ていてくれたかい？ 僕たちの力はエクスカリバーを超えたよ。」

そして裕斗はバルパーの方を向く。

裕斗「さあ。覚悟を決めてもらおうか。バルパー・ガリレイ！」

バルパー「そうか！ 聖と魔、片方だけでなく双方のバランスが大きく崩れてるのであれば説明はつく！ つまり、魔王だけでなく対となる神も」

ズドン

バルパーが最後までいう前に光の槍が刺さり死んだ。

コカビエル「バルパー、お前は優秀だったよ。そこに思考が至ったのも優れているが故だろうな。」

リアス「コカビエル。これは何のつもり？」

コカビエル「そろそろ余興にも飽きた。おい小僧。」

一誠「何だよ。」

コカビエル「限界まで赤龍帝の力を上げて、誰かに譲渡しろ。」

リアス「私たちにチャンスを与えるというの。ふざけないで！」

コカビエル「ふざけているのはお前らの方だ。この俺に勝てると思ってるのか。」

部長は一誠と手を繋ぐ。

一誠「部長？」

リアス「時間がないわ。私がやるわ。」

『boost』

そして二人は手を繋いだ状態でコカビエルの方に歩いて行った。

〔8〕絶望とジンバー

蓮サイド

黒歌「とりあえず、回復したけど、万全ではないから。」

蓮「ああ。ありがとな。」

回復はしてもらったがやはり体の傷はすべて治っていなかった。

『Boost』

一誠「部長、いきますよ。ブーステッド・ギア・ギフト赤龍帝の贈り物。」

『Transfer』

リアス「来たわ!!」

すげえ。力の波動を離れてても感じれるほどでかい。

一誠「部長!!」

アーシア「すごい・・・」

裕斗「ここからでも魔の波動をピリピリ感じる。」

コカビエル「ははは。いいぞ！最上級悪魔並みだぞ。リアス・グレモリーよ。お

前も兄に劣らずの才に恵まれているようだな。」

リアス「消し飛びなさい!!」

そして部長は今までとは比較にならない威力の滅びの魔力を撃った。だが、コカビエル「面白い！面白いぞ！魔王の妹！サーゼクスの妹よ！」

コカビエルはまるで楽しんでるかのような余裕の表情で止めている。

つそして部長がさらに威力を上げるが意味もなく部長は力を使い果たし滅びの魔力は消えてしまう。

一誠「部長!!」

リアス「ぐう。」

朱乃「雷よ。」

朱乃さんは雷をコカビエルに撃つが翼を盾にし、全くの無傷だった。

コカビエル「俺の邪魔をするか、バラキエルの力を宿すものよ。」

朱乃「私をあんな奴と一緒にするな!!」

朱乃さんは激昂し雷の威力を上げるが結果は同じで翼にかき消されてしまった。そして朱乃さんも力を使いつくしてしまった。

一誠「バラキエル？」

ゼノヴィア「墮天使の幹部で雷光の二つ名を持つ、雷の使い手だと聞くが。」

一誠「雷の使い手……。」

コカビエル「ははは。まさか悪魔に堕ちるとはな。全く、愉快的眷属を持っているリアス・グレモリー。赤龍帝、聖剣計画のなれの果て、そしてバラキエルの娘。」

ゼノヴィア「何!？」

一誠「朱乃さんが墮天使の娘!？」

コカビエル「リアス・グレモリー。お前も兄同様ゲテモノ好きのようだな。」

リアス「我が兄への侮辱、何より私の下僕の侮辱は万死に値するわ!」

コカビエル「ならば滅ぼしてみよ! お前らが退治しているのはお前ら悪魔の宿敵だ! これを好機とみなさなければ、お前の程度が知れるというものだ、リアス・グレモリーよ!」

一誠「やい、この糞墮天使、次に部長や朱乃さんにふざけたことぬかしたら俺がテメエをぶちのめしてやるからな。」

コカビエル「貴様、バカなのか。」

素晴らしいコカビエルは光の剣を創りだす。

一誠「ああ。馬鹿で結構！てめえそこ動くな。赤龍帝の籠手！」

『Boost』

リアス「一誠！ダメー！」

ゼノヴィア「兵藤一誠。我々が時間を稼ぐ。」

裕斗「一誠君はパワーを。」

素晴らしいゼノヴィア、裕斗、小猫ちゃん、黒歌がコカビエルの方に行った。

裕斗ゼノヴィアで同時に切りかかるがコカビエルはもう一本光の剣を創り日本ともガードした。

コカビエル「ほーう。聖剣と聖魔剣の同時攻撃か。面白い！」

小猫「そこ。」

黒歌「ここにゃ！」

小猫ちゃんと黒歌は前と後ろからさらに同時に攻撃しようとしたが、コカビエルは羽を全方位に広げ四人に攻撃をしたその中でも小猫ちゃんは結構なダメージだった。

そこにコカビエルは裕斗に光の剣で斬撃を飛ばした。なんとか防いだが衝撃波だけで他の皆にもダメージが入るほどだった。

ゼノヴィア「まだだ。」

コカビエル「まだ来るか。いいぞ来い！」

裕斗「魔剣創造！！！」

裕斗はコカビエルを中心に全方位から聖魔剣で攻撃したが、コカビエルは羽ですべてガードしてしまふ。

そして全ての聖魔剣を羽で破壊した。

コカビエル「この程度か。」

裕斗は両手に聖魔剣を創り切りかかろうとするがどちらも手で受け止められた。だがその油断した隙を見逃さず聖魔剣をもう一本口で器用に扱い（キバのガルルバイトのような形）でコカビエルに傷をつけることができた。

コカビエル「おのれ！」

そしてコカビエルは倒れている裕斗に光の力の魔力を撃つがゼノヴィアがデュランドルを盾にして当たらずにすんだ。

コカビエル「しかし、仕える主をなくしてまで、よく戦うよ。」

ゼノヴィア「何？主をなくしたとはどういうことだ！コカビエル！」

コカビエル「おっと口が滑ったか。」

ゼノヴィア「答えろ!!コカビエル!!」

仕える主をなくした？そういえばバルパーが何か言おうとしてたな。たしか『魔王だけでなく対となる神も』だったか。待てよ。確か先代の魔王は死んだだよな。てことはまさか!!

コカビエル「ふふふふ。ははははは。そうだそうだったなこれから戦争をしようってのに隠す必要もなかったな。」

蓮「!!それ以上言うな!!」

俺は傷が痛むがコカビエルの方に走った。

コカビエル「ははは。その男は気づいたか。そうだよ。先の三つ巴の戦争で四大魔王と一緒に神も死んだのさ。」

ゼノヴィア「嘘だ。」

リアス「神が死んでいた。馬鹿なことをそんなこと聞いたこともないわ！」

全員が驚いていた。

くそ！間に合わなかった！これでゼノヴィアはおそらく戦えない。戦力は大幅にダウンした。

蓮「いえ。三つ巴の戦争は多くの被害を残したのなら神が死んでいてもおかしくありません。それに裕斗の聖魔剣。それ自体本来有り得ないものとバルパーが言っていました。『聖と魔、片方だけでなく双方のバランスが大きく崩れてる』ってのも魔王と神両方死んでいたという意味なら辻妻が合います。」

コカビエル「ほう。なかなか鋭いな。あの大戦では神だけでなく悪魔は魔王全員と上級悪魔の多くを失い、天使や墮天使も幹部以外の殆どを失った。もはや純粹な天使は増える事すらできず、悪魔とて純血種は希少なはずだ。どの勢力も人間に頼らなければ生きてはいけない程に落ちぶれた。天使も墮天使も悪魔も。三大勢力のトップ共は神を信じる人間を存続させるためにこの事実を隠蔽したのさ。」

ゼノヴィア「嘘だ。嘘だ・・・」

コカビエル「そんなことはどうでもいい！俺が耐えがたいのは、神と魔王が死んだ以上戦争続行は無意味だと判断したことだ。一度上げた拳を引っ込めろだ!!」

耐え難い…耐え難いんだよ！あのまま戦っていれば俺たちが勝ってたはずだ！アザゼルの野郎も二度目の戦争はないって言い切る始末だ。ふざけるな!!」

アーシア「もう主はいらっしゃらない。なら私たちに与えられる愛は！」

コカビエル「ミカエルはよくやっているよ。神の代わりに天使と人間をまとめ上げているのだからな。」

ゼノヴィア「大天使ミカエル様が神の代行だと・・・」

コカビエル「システムさえ機能していれば神への祈りや祝福、悪魔祓いもある程度は機能するだろうしな。」

コカビエルの話を聞きアーシアは倒れてしてしまった。

一誠「アーシア・・・」

コカビエル「とは言え、神を信じる者は格段に減ったがね。さっきその男が言ったように聖と魔のバランスが崩れているからその聖魔剣のような特異な現象も起きるわけだ。」

本来聖と魔は交じり合うことなどないからな。お前たちの首を土産に俺だけでもあの時の続きをしてやる。まずはデュランダル使いお前からだ！」

コカビエルが光の槍を放つ

一誠「逃げる！ゼノヴィア！」

ゼノヴィア「もういいんだ・・・主のいない世界など・・・生きていたって・・・」
そしてゼノヴィアに槍が当たる直前、クラックが開き槍はヘルヘイムの森へと
いった。

蓮「俺は後悔なんてしたくない。先へ進む。だからお前ももう少し頑張って生き
ろ。」

ゼノヴィア「！！！！」

俺はベルトにゲネシスコアを取り付ける。

蓮「コカビエル、お前がこの町を無茶苦茶にする気なら、俺はお前を許さねえ！

変身。」

オレンジ

レモンエナジー

ロックオンロックオン

ソイヤ！ミックス

オレンジアームズ！花道オンステージ！ジンバーレモンハハーツ！
蓮「ここからは俺のステージだ!!」

〔9〕 レモンとピーチ

蓮サイド

俺はコカビエルに向かっていきソニックアローで切りかかる。

コカビエルは余裕そうな表情で光の剣を創りガードしようとした。だが

コカビエル「何!?!ぐっ。」

ソニックアローは光の剣を粉々にしコカビエルの胸のあたりに致命傷のレベルではなくとも傷をつけた。

そしてコカビエルは一度距離をとった。

コカビエル「ほーう。さっきの奴らより強いな。これならもつと楽しめそうだ！

┌

そしてコカビエルは光の槍を投擲してきたと同時に俺もソニックアローで矢を撃ったが一発目はお互いに躲した。

そして次もほぼ同タイミングで矢と槍が放たれそして今度は両方ともに当たった。

コカビエル「ごふう。」

蓮「どわあ。」

コカビエル「くくく。そうだ戦いはこうでなくてはな。」

そしてコカビエルは一際でかい槍を創った。

コカビエル「さあ！これはどうにか出来るかな！」

仕方がねえ。

俺はベルトのレモンエナジーロックシードを外してソニックアローに付け、カッティングブレードを下した。

ロックオン

ソイヤ！オレンジスカッシュ

俺はソニックアローにエネルギーを溜める。

そしてコカビエルが槍を投げると俺も矢を放った。

レモンエナジー

矢と槍は拮抗しお互いの中間で爆発した。

裕斗「すごい・・・」

一誠「コカビエルと互角ってどんだけ強いんだよ。」

コカビエル「正直、お前のことを舐めていたよ。まさかあの一撃まで止めるとはな。」

蓮「あんたを何としてでも止めないといけないからな。！痛っ。」

コカビエル「ははは。やはりなああの騎士を守ったときの傷は治ってなかったか。くそ。こんな時に傷口が開いたのか。」

コカビエル「他の者も消耗してこっちにはこれまい。なかなか、久しぶりに楽しませてもらったぞ。」

そしてコカビエルは俺に光の剣を振り下ろした。



黒歌サイド

コカビエルは蓮に光の剣を振り下ろしたがソニックアローでなんとか止めていたが、切られるのも時間の問題だった。

一誠「な！このままだと蓮が！」

リアス「助けに行くわよ！」

コカビエル「邪魔はさせん!!」

皆蓮に加勢しようとしたが、コカビエルは空いている手で無数の槍を創りこっちに放ってきた。その槍は地面に着弾すると爆発しさらに体力を削った。

黒歌「なんで立ち上がれないにゃ・・・。」

わかっていた自分の体はもう限界まで来ていた。

黒歌「蓮は私や白音を救ってくれたのに・・・。」

私は彼に救われてばかりだった。

黒歌「このままで良いわけ無いのに・・・。」

それとは裏腹にどんどん視界が霞んでゆく。

黒歌「なん・・・で・・・にゃ。」

そして私は意識を失った。



ここはどこにゃ？

真っ白い空間があった。

???「どうも。」

私は後ろを振り返るとそこには一人の女性（蓮を転生させた神様）が居た。

黒歌「だ、誰にゃ！」

神様「私ですか？まあ、蓮さんの協力者ってことにしときましよう。」

黒歌「そうにゃ！蓮はどうしたにゃ！」

神様「彼はまだ戦ってますよ。」

黒歌「なら、はやく私を蓮の元に戻すにゃ!!」

神様「まあまあ、落ち着いてください。ここなら一時間居てもあっちでは一秒なんですから。それより、あなたは蓮さんを助けるつもりですか？今のあなたではどうやっても無理ですよ？」

黒歌「わかってるにゃ。傷だらけの私では役に立たないことぐらい・・・。」

私は悔しくて涙が出そうになる。

神様「そうですね。あなたでは無理ですよ。それにたとえ傷を治しても気は戻りませんし仙術は使えない以上勝つ見込みはないでしょう。」

黒歌「それでも・・・それでも私は蓮に救ってもらったにゃ!!彼はいつだってみんなを助けようって命を削ってでも必死で食らいついていたにゃ!!だから、私

も彼のためなら命だって懸けられるにゃー!!」

神様「ふっ。あなたの覚悟、見せてもらいました。なら、あなたにはこれをあげます。本来蓮さんに渡そうって思ってましたが、あなたの方が使えるでしょう。使いは戻るときに脳に刻ませてもらうのでそのつもりで、では。」

黒歌「まゝ」

私は赤を基調としたものと蓮がさっき使っていたレモンとは違ったエナジーロックスシードを渡されるとまた意識を失った。



白音「姉・・・ま・・・黒・・・姉様・・・黒歌姉様!!」

黒歌「!! 白音? どうしたにゃ?」

白音「黒歌姉様がボーっとしていたので大丈夫かなと。」

あたりを見るとコカビエルが蓮に剣を振り下ろす少し前だった。

どういうことにゃ? 私は夢でも見てたにゃ?

白音「黒歌姉様、その手にあるものって何ですか?」

黒歌「え?」

私はとっさに自分の手にはさつき渡されたものがあることに気づくと頭が少しズキズキしその道具の使い方が脳内で映像として流れてきた。

そうにゃ！私は蓮を助けに行かないと！

咄嗟に蓮の方を見るとコカビエルが剣を振り下ろそうとしていたのですぐに走った。

コカビエル「久しぶりに楽しま・・・黒歌「待つにゃ！」ん？まだ動けたのか。」

蓮「今だ！」

コカビエル「ちっ！」

蓮はソニックアローで矢を撃ち何とか距離をとった。

蓮「黒歌。俺がやるから、離れといて。」

黒歌「蓮。私はあなたに救われた。あなたの頑張りを見てきた。だから今度は私も一緒にやるにゃ。あなたを一人にしないにゃ！」

そして私はゲネシスドライバーを付けた。

蓮「！なんで、黒歌がそれを・・・。」

黒歌「変身!!」

ピーチエナジー

ロックオン

ソーダ！

ピーチエナジーアームズ！



蓮サイド

なんで黒歌がアーマードライダーマリカに・・・。

黒歌「蓮。一緒にやるわよ。」

蓮「お、おう！」

そして俺たちはコカビエルに走っていき斬撃を放った。幸い黒歌が合わせてくれているので連携はとれていた。

そして黒歌がコカビエルの羽を切ることに成功する。

コカビエル「ぐあああ。おのれ！！！」

黒歌「これで空には逃げれないにゃ！」

蓮「俺もきついし、そろそろきめるぞ。」

黒歌「わかったにゃ。」

オレンジスカッシュ **ジンパーレモンスカッシュ**

ピーチエナジースカッシュ

二人はコカビエルの投げてきた槍をジャンプで躲すと矢を放ちコカビエルをピーチのエネルギーに閉じ込め、鎧武の放った矢の軌道にオレンジとレモンを輪切りにしたエネルギーが交互に現れそこを通過してエネルギーをためながら無頼キックをコカビエルにぶつけるとコカビエルは完全に気絶した。それにより大地崩壊の術式も解けた。

パリーン

安心しきっていると突如結界が破壊され全員が空を見るとまるで白い龍の鎧をきた奴がいた。

黒歌「白龍皇・・・。」

白龍皇「来てみたが、来てみたらすべて終わっているではないか。暇つぶしぐらいにはなると思ったんだがな。」

リアス「白龍皇・・・何が目的？まさか一誠を倒しに来たんじゃないでしょう

ね。」

白龍皇「リアス・グレモリーか、残念ながら今回はコカビエルの回収をアザゼルに頼まれてね。ついでにそこのはぐれ神父も回収していくだけだ。

君たちも今の状態で僕と戦いたくはないだろ。」

そういうとコカビエルとフリードを抱えた。

ドライグ『無視か。白いの。』

アルビオン『生きていたか。赤いの。』

ドライグ『折角出会ってもこの状況ではな。』

アルビオン『いいさ。いずれ戦う運命だ。こういうこともある。』

リアス「赤龍帝と白龍皇の会話。」

アルビオン『また会おう、ドライグ。』

ドライグ『ああ。またな、アルビオン。』

そして白龍皇は飛び去って行った。

黒歌「さすがに・・・疲れ・・・た。」

小猫「黒歌姉様!？」

蓮「黒歌!？」

黒歌はどうやら意識を失ったようだ。

蓮「大丈夫だよ。小猫ちゃん、どうやら傷だらけの状態で変身したうえいきなり緊張の糸が切れて気絶しただけみたいだから。」

小猫「よかったです。」

そしてシトリー眷属と合流し学校の修復をして、心配をかけさせたと部長から裕斗にお尻叩き千回の罰を言い渡されたがなんとか一件落着いた。

〔幕間〕 蓮と黒歌

蓮サイド

コカビエルとの戦いを終えて翌日

まずゼノヴィアは神の不在について聞きに行った。

俺は神様になんで黒歌にゲネシスドライバーを渡したのかを聞いてゲフンゲフン……聞いた。

俺が死にそうだったから黒歌を神様のいるところに飛ばしゲネシスドライバーを渡し、少し前の時点に飛ばして助けさせたらしい。

そして学校が終わり自宅

晩飯と風呂も終わりみんなが寝ようと自分の部屋に行こうとしたところで俺は黒歌を呼び止めた。

蓮「なあ、黒歌、ちょっといいか。」

黒歌「ん？どうしたにゃ？」

蓮「ちょっと話が合ってたな。」

俺は黒歌をとりあえず俺の部屋に入れて話始めることにした。

蓮「黒歌にドライバーを渡した人から何があったか聞いた、ありがとうな、助けてくれて。≡」

黒歌「別にいいにゃ。それより恥ずかしそうに顔を赤めちゃって♪」

自分でも恥ずかしくって顔が赤いのはわかってた。

だって無茶苦茶顔が熱いんだよ！改めて言うともっちゃ恥ずかしい。

でも、それ以外にも言わないといけないことがあるし、いったん心を落ち着かせる。

蓮「でもな、黒歌わざわざ俺のためにお前まで無茶しないでくれ。俺は黒歌や小猫ちゃん、一誠に部長や皆を仲間だと思ってる。だから、皆にはできるだけ傷ついてほしくないんだ、だから俺なんかのために自ら傷つくようなことはしないでくれ。」

黒歌「・・・はあ。」

黒歌はため息をつくとき真剣な顔になった。

黒歌「蓮。あなたが言うように私や白音達、みんなあなたのことを大切な仲間だ

と思ってるの。あなたが皆に傷ついてほしくないっていうように私たちもあなたにも傷ついてほしくないの、でも戦いをする以上傷つくのは仕方がない、だからあなたは自分が傷ついて皆を守る、そう思ってるんでしょ。」

蓮「ああ。前にも言ったが俺は傷ついてもどんなに苦しくても皆を守るつもりだ。だから皆には・・・黒歌「そういうところよ。」どういうことだ？」

俺は正直言いたいことがあまり理解できずにいた。

黒歌「私はね、仲間ってのはね、互いに傷ついてでも支えあって一緒に傷ついて磨かれていくものだと思ってるの、ただ一人だけが傷ついてそれで終わりだとそれは仲間じゃない、それはただの生贄でしかない。

それとも私たちがそんなに信用できない？」

蓮「そんなことは・・・ないけど。」

黒歌「ならもっと私たちのことを頼るにや。皆確実に同じように思ってるはずにや。それにその・・・蓮を助けたのだって仲間だからってだけじゃないにやよ。」

蓮「ん？それってどういう？」

黒歌「あああ!!もう何でもここまで言っておかしいにや!!あなたは私や白音のために動いてくれたでしょ。」

蓮「うん?それで?」

黒歌「これもう、わざとにや?私だって女にや、いっぱい私たちのために諦めずに戦ってくれた人に何も思わないと思うにや?」

蓮「え?それってもしかして。」

黒歌「やつと気づいたのかにや。で私はここまで言ったにや。それとも最後まで私に言わせる気かにや?」

そう言った黒歌の顔が赤くなっている。俺もだめだな、ここまで言われて気づくなんて、僕もずっと黒歌と暮らしていて、彼女のいろんなところに俺も惹かれていたわけだし、

なら言うことは一つだな。

蓮「黒歌さん僕はあなたのことを真剣に愛しています。だから僕と付き合ってください!」

黒歌「私なんかでいいならよろしくお願いします。」

僕もここまで大切にされてたんだな。なら一層無茶できねえな。

黒歌「あと、私と付き合うんだから、白音の方はどうするにゃ？」

蓮「え？ どういうこと？」

黒歌「まあ、白音は顔に出さないようにしてるけど、白音もあなたのことが好きだと思ふにゃよ？ だって部屋で居るときだってあなたの膝の上で座って笑顔でいるぐらいだし、蓮と話してるときとか私と話してる時より笑顔でちょっとシヨックだったぐらいにゃよ？」

蓮「いやいやいや、そんなまさか、俺そんなにモテルわけ無いじゃん。さすがに勘違いだろ。」

黒歌「まあ、蓮が決めることだからいいけど増えるなら後、一人か二人ぐらいにしてよ、悪魔だから一夫多妻制が認められているとはいえ、赤龍帝みたいにハーレム、ハーレムって言われるのはなんか嫌だから。」

蓮「増えるとは思えないけどな。」

こうして俺と黒歌は付き合うこととなった。

そしてそのあと黒歌が「一緒に寝るにゃ！」と言って俺のベットに入り抱き枕

にしてきたため、あまり寝れず、次の日はすごく眠かった。



??? サイド

??? 「中辻蓮。彼にはそろそろ、邪魔にならないようにさせてもらおう。これ以上ヘルヘイムのことに踏み込まれて黄金の果実を先に取られるのは困るからな。」
そして魔法で眠っている中辻蓮にヘルヘイムの森の、鎧武に関して他の者には話していない記憶に封印をかけた。

??? 「これでとりあえずは安心か。さて私も黄金の果実を探さなくてはな。」
そういいそいつはヘルヘイムの森へと消えていった。

どうもアルフォーです。

作者個人が黒歌が一番好きなので真っ先に蓮と付き合うことになりました。

これでエクスカリバー編は終わりです。

まだまだ物語は続くのでこれからもよろしくお願いします。

果物鎧武 停止教室のヴァンパイア

『1』プールです

どうも、アルフォーです。

少し投稿が滞ってしまっって申し訳ありません。

これからもしっかり投稿はするので気長にお待ちください。

では本編をどうぞ。

俺が黒歌に告白してから俺の登校するとき一緒に行くことになりさらに弁当まで屋上で一緒に食べ、できるだけ多くの時間を一緒に過ごすことになった。

登校時も帰宅時もべっとりくっつくので明らかに誰の目からも付き合ってるのは明白だった。

でも、他の先生も何も言わないってうれしいが、やっぱり変わってるな、この高校。

そして黒歌に告白してから数日後の放課後

俺と一誠が部屋に行くとそこにはなぜかゼノヴィアがいた。

ゼノヴィア「やあ。中辻蓮、それに赤龍帝。」

「一誠と蓮「って何でおまえ（ゼノヴィア）がここに！」

あの後教会に戻ったんじゃ……。〇

蓮「部長、これってどういう？」

リアス「新しくグレモリー眷属の騎士になったゼノヴィアよ。」

朱乃「仲良くしてあげてくださいね。ふふふ。」

一誠「騎士ってまさか、お前。」

そういいゼノヴィアの方を見るとゼノヴィアは悪魔の羽を出した。

蓮・一誠・アーシア 「「ええええええええええ！！！」」

アーシア「悪魔に転生を？」

ゼノヴィア「神の死を知ってしまったのでな、破れかぶれで頼み込んだんだ。」

「部長」。

リアス「ふふふ。デュランダル使いが加わったのは頼もしいわ、これで騎士が二

人目ね。」

蓮「ははは・・・。」

ゼノヴィア「今日からこの学校の二年に編入させてもらった。よろしくね！蓮君、一誠君。」

蓮「真顔で言われても・・・。」

ゼノヴィア「イリナの真似をしたのだからうまくいかないな。」

いや、まあそれですぐに同じようにできたらそれはそれでおかしいけどな。キャラが全然違うわけだし。

一誠「でも、それでいいのか？お前。」

ゼノヴィア「神がいないと知った以上私の人生は破綻したようなものだからな。だが敵だった悪魔に下るのはどうなのか？お教えください主よ！あうう〜。」

蓮「大丈夫か？悪魔になったんだから祈ったらそら頭痛が起きるぞ。」

そういやアーシアも転生直後はあったって一誠が言ってたな。

一誠「そういや、イリナは？」

ゼノヴィア「本部に帰ったよ。イリナは私より信仰が深い。神の不在を知ったら

心の均衡は崩れてしまうだろう。私は異端の徒になってしまった。

それとアーシア・アルジェント、君に謝ろう。主がいらないのなら救いもなかったのだからな。気が済むのなら私を殴ってくれてかまわない。」

「アジア……」

ゼノヴィア「聖剣使いから異端の徒、彼らの見る目が変わった、君も同じことを経験したのだろう。すまなかった。」

アーシア「ゼノヴィアさん。私は今の生活に満足しています。大切な人に、大切な方々に出会えたのですから。本当に幸せなんです。」

ゼノヴィア「ふふ。そうか、なら君にお願いがあるんだがこの学校を案内してくれないだろうか。」

「はい。もちろんです。」

こうしてオカルト研究部に新たな仲間が加わるようになった。

ゼノヴィア「そうだった。蓮、できれば私もアーシアと同じように君の家でホームステイさせてもらえないだろうか？」

ゼノヴィア以外「『ええええええ！』」

この驚き具合からして部長も知らなかったってことは独断で決めたんだな。って
そうじゃなくて！

蓮「いや、なんでまたいきなり!？」

ゼノヴィア「君は前に君に頑張って生きろと言っただろしっかり言ったことの責
任は取ってもらわないとな。」

黒歌さんに小猫ちゃん、お願いだから無言で睨まないで……。

蓮「まあ、部屋数は余ってるし俺は大丈夫だぞ。黒歌と小猫ちゃんは？」

黒歌「……好きにすれば。」

小猫「……まあ別にいいですけど。」

ゼノヴィア「大丈夫そうだな。」

こうしてゼノヴィアは俺の家に住むこととなった。



あの後悪魔の活動の時だが、墮天使の総督であるアザゼルがこの町にいて一誠を
度々召喚していたことがわかり、部長は怒ったりしていた。

そしてさらに、この町で三大勢力のトップの首脳会談があるそうだ。

その週の日曜日

オカルト研究部はコカビエルの一件のお礼として生徒会の仕事であるプール掃除をすることになった。

まあそのあとはオカルト研究部だけで先にプール開きをさせてくれるみたいだな。

そして一時間後プールの掃除も終わった。

皆が水着に着替えていた。

リアス「それじゃあ朱乃お願いね。」

朱乃「はい。はあああ！」

朱乃さんは魔法でプールを水であつという間に水を張った。

一誠「す、すげえ。」

リアス「一誠、私の水着どうかしら？」

一誠「最高です！この上なく！」

部長は白いビキニで一誠にアピールしていた。

朱乃「あらあら、部長ったら張り切ってますわね。」

リアス「そういうあなたはどうかなの。」

朱乃「・・・さあ。」

一誠「おお、朱乃さんもまた。」

朱乃さんも部長に負けじとしているみたいだな。

アーシア「一誠さん。私も着替えてきました。」

一誠「おお。可愛いぞアーシア。お兄さんご機嫌だ。」

アーシア「そう言われると嬉しいです。」

アーシアはスクール水着で真ん中にひらがなで大きく『あーしあ』と書かれていた。

小猫「蓮先輩、どう・・・でしょうか？」

蓮「うん、似合ってるよ。」

小猫ちゃんは水色のビキニ型の水着だった。

黒歌「蓮、私の方はどうにゃ？」

蓮「ん？着替え終わっ！」

黒歌が着ていたのは少しでもずれば大事なところが見えそうなものでもはや紐

だろ・・・と言えそうなレベルのものだった。

蓮「どらっ！」

一誠「うう！」

リアス・朱乃・アーシア「二一誠（さん）（君）!!」

蓮「うらっ！」

黒歌「痛っ！」

とりあえず泳いでいる木場はいいとして一誠には見られるとやばそうなので後ろから手刀で気絶させ黒歌には一発拳骨を入れといた。

蓮「おい、黒歌、なんでそんなきわどいものにしてんだよ・・・。記憶が正しければ去年の海ではもっとしっかりしたものだっと思ったと思うが？」

黒歌「この話が来た時点で買っというにや。こっちの方が蓮もうれしいでしょ。」
「素晴らしい抱き着いてくる。」

む、胸が。

蓮「い、いや、それは別としてだな。ここ学校なんだぞ。それはダメだろ。それ・・・。」

黒歌「にゃ？何にゃ？」

蓮「そ、そのあんまり他の男に黒歌の水着姿でも見せたくないのに、そこに露出が多かったら絶対に見せたくないんだよ」

そういった途端黒歌の顔も赤くなる。

黒歌「ふ、ふん。蓮がそこまで言うなら今回は普通の水着に着替えなおしてくるにゃ。う、うれしいけど、恥ずかしいにゃ。」

そう言うのと黒歌は更衣室へ戻っていった。

それと同時に一誠も起きる。

一誠「んんん。あ！蓮お前何すんだよ！」

蓮「いや、あははは。」

小猫「・・・蓮先輩は黒歌姉様の水着を他の人に見られたくないって言ってましたよ。」

蓮「小猫ちゃん!？」

黒歌にだけ聞こえるぐらいにしてたのに！そういやあの時、小猫ちゃん近くにいたんだって・・・。

小猫ちゃんは頬を膨らませ不機嫌そうにしながら言った。

しかも、最悪なことに、部長たちは一誠の近くにいたため聞こえてしまっていた。

一誠「へへへへ。」

蓮「ニヤニヤするな!!」

リアス「ふふふ。蓮も意外と可愛いところがあるのね。」

朱乃「あらあら、意外な一面ですこと。」

蓮「恥ずかしいから言わないでください。」

アーシア「蓮さんはどうしてそんなことを？」

小猫「それはですね。」

蓮「言わなくていいから小猫ちゃん！」

ううう、純粋なアーシアしか今、救いが居ない。

黒歌「おまたせ。どうにゃ？蓮？」

蓮「うん。すごく似合っていて可愛いよ。」

黒歌は黒いビキニですごく似合っていた。



その後

皆はそれぞれ自由にしていた、ちなみに俺は小猫ちゃんの泳ぎの練習を手伝っていた。

蓮「はーし、もう少しで端だから頑張れ。」

俺は小猫ちゃんの手を引っ張りながらそう言う。

小猫ちゃんもそれを聞きながらバタ足をしていた。

そして端に着くと小猫ちゃんは勢い余ってぶつかって、はたから見ると抱き着いている状態だった。

小猫「ありがとうございます。手伝ってもらって。」

蓮「全然大丈夫だよ。それに頑張ってるのは小猫ちゃんだよ。」ナデナデ

小猫「ふにゃ〜。」

小猫ちゃんの頭を撫でてあげると顔が緩んでいた。

黒歌「にゃ〜!! 白音だけずるいにゃ! 私まだ撫でられたこと無いのに!!」

小猫「付き合ってるのに頭撫でられたこともないんですか。」

小猫ちゃんは口角をあげて言う。

黒歌「ぐぬぬぬ。お姉ちゃんそんな風に育てた覚えはないにゃ！てか、蓮早く撫でて！」

蓮「はい!!」

ドーン

俺が黒歌の頭を撫でようとすると爆発した音がして三人ともその方を見ると部長と朱乃さんがドンパチやっていた。てか、なんであの人ら胸出してんの!?

リアス「大体、あなたは男が嫌いだったはずでしょ!!」

朱乃「そういう貴方も男なんて興味ない。全部一緒に見えるって言ってましたわ。」

ドガーン

蓮「やばそうだし離れとくか。」

なんやら小猫ちゃんと黒歌も言い争ってるみたいだしな。



とりあえず一端離れて少し時間が経ってから戻ることにした。あんま巻き込まれるのは嫌だからな。

ゼノヴィア「何をしてるんだ？」

蓮「ん？ゼノヴィアか。まあちょっとなそういうお前は どうしたんだ？ずいぶん遅かったが。」

ゼノヴィア「まあ普通のビキニと比べると少し露出が多いぐらのビキニだった。ゼノヴィア「初めの水着だから切るのに少し手間取ってしまったんだ。似合うかな。」

蓮「ああ。似合ってると思うぞ。」

ゼノヴィア「なら、よかった。それより、中辻蓮、君に折り入って話があるんだが。」

蓮「蓮で大丈夫だぞ。で話って？」

ゼノヴィア「なら、改めて蓮。私と子供を作らないか？」

蓮「・・・え？」

『2』用具室と魔王

俺はゼノヴィアにそのまま近くの用具室に押し込まれた。

ゼノヴィア「聞こえなかったのか？もう一度言うぞ。私と子作りをしよう。」

蓮「……いやいやいやいや！え？俺には黒歌というれっきとした彼女がいるんだぞ。」

てかなんでそんなことになった!？」

ゼノヴィア「以前は神に仕え奉仕するという夢があった。だが今はそういうものがない。そこで部長に尋ねてみたら『悪魔は欲を持ち、欲を叶え、欲を与え、欲を望むもの。好きに生きてみなさい。』と言われ、

そこで私は女らしい夢を持つことにしたんだ。子供を産むというね。」

全くその発想になった意味が分からね。

ゼノヴィア「それに子供には元気な子の方がいいと思っている。そこでコカビエルと同等レベルの力を持つ君に頼もうと思ったんだ。それに君は家事が基本、何でもできている。」

蓮「ほめてくれているのはうれしんだがな・・・」

なんだろう素直に喜べん。

ゼノヴィア「まあ、とりあえず一度試してみようじゃないか。それと私は愛人の立場でかまわない。」

そういうとゼノヴィアは水着を脱ぎ始める。

蓮「良くねえよ!! っておいこら! 脱ぐな!」

ゼノヴィア「順序さえ守ってくれたら好きにしてくれてかまわない。」

やばいやばい、とりあえずゼノヴィアすまん。

俺は念のために持ってきて隠していたヒマワリのロックシードを開こうとした。

ゼノヴィア「これは確か日本では野暮というものではないか?」

蓮「!!」

俺がロックシードを開こうとした瞬間、

ゼノヴィアに腕を掴まれロックシード奪われ後、後ろに投げられてしまった。

やばい本当にやばい!!

そしてゼノヴィアが顔を近づけキスしようとしてきた。

黒歌「これはどういうことにゃ？」

小猫「説明してもらいますよ？ 蓮先輩。」

用具室の扉が開いておりその前では明らかに笑顔ながらも怒っている二人の猫姉妹^鬼が居た。（結構本気で後ろに般若の顔が）

ゼノヴィア「いや、ただ私が蓮に子作りをしようって言ったただけだ。」

黒歌と小猫「ここ、子作り〜〜!？」

蓮「ゼノヴィア、頼むから黙っててくれ……。てか二人ともこれは違うんだ。」

黒歌「正座。」

蓮「はい！」

俺はドスの効いた声を聞きすぐに正座した。

黒歌「白音、よろしく。」

小猫「はい。」

そういうところからか縄を出し俺の腕を抵抗することもできないスピードで縛った。

蓮「あの、お二人さん、なぜ縛る意味が？」

黒歌「事情聴取するためにも逃げられないようにしただけよ。

さて話を聞かせてもらおうわよ。」

蓮「はい。実は・・・」

俺は抗議してもほどこいてくれないと思い、プールから離れた後、ゼノヴィアに会ったことや子作りを迫られたことやその経緯をすべてありのまま話した。

黒歌「ふうん。まあ今回は信用してあげるにゃ。」

蓮「ありがとう。ならとりあえず縄ほどこいてくれ。」

黒歌「いやにゃ。」

へ？

聞き間違いか？

蓮「あの、縄をほどいてほしいのですが。」

黒歌「いやにゃ♪」

蓮「えーと、なぜですか？」

黒歌「確かに、聞いたことは信用してるにゃ。でも、私も蓮との子供は欲しい

にゃ。でも蓮はまだ高校生だから抵抗することはわかってるにゃ。

でも、今は抵抗絶対できない状態のチャンスにゃ。それをわざわざ逃さないにゃ。」

ゼノヴィア「確かにこれならいけそうだ。」

おいおい、ここでまたさらにやばくなったじゃねえか。

あと小猫ちゃん、顔を赤くしながらも二人にうなずかないで。

蓮「一旦落ち着け。話し合えばわかるはずだ。」

黒歌「話したところで抵抗できない体を私たちの前に差し出してるのは変わらないにゃ。」

そして俺は足を使って後ろに下がるが腕を縛られバランスが取れず立たないためすぐ目の前まで三人は来た。

黒歌「安心して蓮。天井のシミを数えている間に終わるにゃ。」

ゼノヴィア「それでは蓮、頼むよ。」

小猫「蓮先輩、優しくしますから。」

ああ、俺はもうこの三人にやられのか。三人が俺の水着を脱がせようとしたとき、一誠「蓮！ここか、まだ部長と朱乃さんが戦ってて止めてほし……。」

一誠が息を切らせながら用具室に入ってきた。おそろくいろんなところを探していたのだろう。顔をあげると縛られてる俺の姿とやる気満々で水着を脱がせようとしている三人が見えた。

蓮「ちようどいいところに！一誠、俺を助けムグッ！」

黒歌「一誠、今すぐに出ていきなさい。」

俺が助けを求めようとすると黒歌は俺の口を手で塞ぎ、退室するように促す。そしてここで一誠の心では迷いがあった。

一誠（くっ、どうしたら、蓮は助けてと言っている、だがあの三人から蓮を救えるとは思えない、だが、部長と朱乃さんの戦いも止めてもらわないといけない。なら、話して止めてもらえるように言うか？でも話してもあの三人が素直に応じてくれるのか？

くそー！！俺はどうしたら・・・）

この間0。2秒の出来事である。

そしてその結論は・・・

一誠「ごゆっくりとお楽しみください。」

蓮「んんんんんん！んんん！……（裏切りやがったな！一誠……！）」
裏切りやがった!!笑顔で用具室の扉から出て行った。

黒歌「ナイス一誠！さて邪魔者はいなくなっただにゃ。蓮。改めてやらせてもらうにゃ。」

今度こそおしまいだと思うと。

一誠「うわっ！」

リアス「ちよつと一誠！男ならはつきりと・・・」

一誠が部長に用具室に入れられアーシアや朱乃さんも来た。

リアス「ちよつと、あなたたち何してるの！」

黒歌「ちっ！ただ生徒とのスキシップにゃ。」

リアス「そのようには見えないけど。」

ゼノヴィア「？いや、ただ私たちは蓮と子作りをしようと。」

リアス・アーシア・朱乃「「こ、子作り!?」」

黒歌「ちょ！なんで言うにゃ！」

小猫「そうですよ。なんで言っちゃうんですか！」

朱乃「あ、あらあら。」

アシア「あううう。」

蓮「とりあえず、ほどこれてくれません？」

そしてとりあえず、俺はほどこいてもらい遊ぶ気分でもなくなったので全員部屋に戻ることとなった。



部屋

リアス「それにしても学校で何をしようとしているのよ。」

蓮「なぜ俺が!？」

なぜか怒られるはずの三人はそのまま俺だけ正座させられている。

ゼノヴィア「いや、違うんだ。蓮はただ私と子供を・・蓮「いいから、黙ってく

れ・・・。」

「???」「ずいぶんと賑やかだね。」

そうしていると突然後ろに魔法陣が現れそこから声がして全員が振り返るとサーゼクスさんとグレイフィアさんが居た。

サーゼクス「何かのイベントかい？」

リアス「お、お兄様!？」

一誠「魔王様!？」

全員がサーゼクスさんに跪く。

サーゼクス「アーシア・アルジェントだね？」

アーシア「はい。」

サーゼクス「妹が世話になっている。優秀な僧侶だと聞いているよ。」

アーシア「そ、そんなことは。」

サーゼクス「くつろいでくれたまえ。今日はプライベートで来ているのだから。」

ゼノヴィア「あなたが魔王様か。私はゼノヴィアというものだ。」

サーゼクス「ごきげんよう、ゼノヴィア。デュランダル使いが妹の眷属になった

と聞いたときは耳を疑ったよ。」

ゼノヴィア「私自身、悪魔になったことは大胆なことをしたと今でもたまに、後悔している。でも、本当になぜ悪魔になったのだろう？ やけくそ？ だが、あれ？ えーと……。」

サーゼクス「妹の眷属は楽しいものが多くていい。ゼノヴィア、そうかりアスの眷属としてグレモリーを支えてほしい。」

ゼノヴィア「伝説の魔王、ルシファーにそこまで言われれば後には引けないな。やれるところまではやらせてもらおう。」

サーゼクス「ありがとう。」

リアス「それより、お兄様どうしてここに？」

サーゼクス「何を言ってるんだ。公開授業が近いのだろう。」

リアス「ま、まさか。」

サーゼクス「妹が必死に勉強に励む姿をこの目で見たいものだ。」

リアス「グレイフィアね。お兄様に伝えたのは。」

サーゼクス「安心しなさい。父上も一緒に来る。」

リアス「お兄様は魔王なのですよ。仕事を放り出してくるなんて・・・。」
サーゼクス「いやいや、これは仕事でもあるのだよ。」

リアス「え？」

サーゼクス「三大勢力のトップ会談をこの学園で執り行おうと思ってね。」

リアス「この駒王学園で!？」

全員が驚いたのは言うまでもなかった。

その後、今日はサーゼクスさんたちは一誠の家泊まることとなった。



ヘルヘイムの森

毎週二度ほど俺はヘルヘイムの探索をしているので、ヘルヘイムの森に来ていた。

蓮「うーん。やっぱりなんもないな。」

もう調べつくしたのか？そう思うがやっぱり何かを忘れている気がする。

一体何を忘れたんだ？

蓮「とりあえず今日は帰るか。」

俺はクラックを開き家の前に出て鍵を開け、家の中に入った後リビングに行く、

黒歌・小猫・ゼノヴィア 「「おかえりなさい。」」

蓮 「ブフー!？」

なぜか三人とも裸エプロンで料理しており、驚きのあまり水筒から飲もうとしていたお茶を思いつきり吹いてしまった。

蓮 「ゴホッゴホッ。お前らなんで裸エプロンで居るんだよ!？」

ゼノヴィア 「前に兵藤一誠の家でアジアや部長がやっていたと聞いてな、私たちもやってみることにしたんだ。」

黒歌 「蓮ったら、顔を赤くしちゃって♪」

小猫 「恥ずかしそうにしているとところも可愛いです。」

蓮 「あ、あのなー、風邪ひくから早く服着ろ。」

黒歌 「興奮してるくせに。」

この後食事が終わるまでその状態で目のやり場にすごい困った。

『3』 父親とご対面

投稿遅れてすみません。

デュエルリンクスが楽しすぎる。

まあ、これからがんばりますのでよろしくお願いします。

それでは本編どうぞ。

蓮サイド

翌日

あの後、また何かあるのではないか？と思っていたが、特に何もなかった。今はみんなは先に行っていて俺は後から学校に行っていた。

ん？おいおい、なんで木場とゼノヴィアはあの白髪の人の首に剣を当ててるんだよ。

蓮「お前ら何やってんだ。」

一誠「！蓮か。気をつけろ、あいつ白龍皇らしい。」

蓮「なるほど。それでか。」

ヴァーリ「君がああ、の鎧武者か。俺はヴァーリだ。」

蓮「まあ、よろしく。てか木場とゼノヴィア、剣を収めろ。ここだと目立ちすぎる。」

現に通学路なためいつ誰が通ってもおかしくはなかった。まあ、さすがにここでドンパチすることはないだろ。

それを聞き、二人は剣を消し、一誠を守る位置に来た。

ヴァーリ「兵藤一誠。君はこの世界で何番目に強いと思う？」

一誠「何？」

ヴァーリ「君の禁手。バランス・ブレイカー。まあ、未完成だが上から数えて四桁、千から千五百の

間くらい、いや宿主のスペック的にはもう少し下か。

そして中辻蓮、二人係とは言え傷を負った状態でコカビエルを倒したんだ。君は千より少し前後するぐらいか。」

一誠「何が言いたい。」

ヴァーリ「兵藤一誠は貴重な存在だ。十分に育てた方がいい。リアス・グレモリー。」

後ろを見ると部長たちみんなが居た。

リアス「白龍皇。何のつもりかしら？あなたが墮天使とつながっている以上必要以上の接触は・・・ヴァーリ「ふん。」」

ヴァーリ「二天龍と称された、ウエルシュドラゴンとバニシングドラゴン。赤い龍と白い龍に関わったものは過去、ろくな生き方をしていない。あなたはどのようなだろうな。」

リアス「・・・」

ヴァーリ「今日は戦いに来たわけじゃない。俺もやる人が多いんでね。」
そういうとヴァーリはそのまま行ってしまった。



教室

松田と元浜「「おらあ！」」

一誠「ドワァ！」

またやってるよ。松田と元浜に殴られている一誠が見えた。

蓮「毎回大丈夫か。イッセー？」

一誠「ああ。てか毎回、なんで殴るんだよ。」

松田「黙れ！新入生のゼノヴィアちゃんまでオカルト研究部入ったそうじゃないか。いつもいつもいつも!!」

一誠「それでなんで俺が殴られなきゃいかねえんだよ。」

元浜「いや、友人の周りに美少女が集まるもんだからつい。」

松田「てか、蓮。お前いつの間に一誠をイッセー呼びにするようにしたんだ？」

蓮「まあ、いろいろあってな。」

あいつが根は良い奴ってのはわかったからな。

ゼノヴィア「蓮。」

すると突然、ゼノヴィアが話しかけてきた。

蓮「うん？どうした？」

ゼノヴィア「先日は突然あんなことを頼んでしまっすまなかった。」

蓮「い、いや大丈夫だよ。わかってくれたならそれでいいから。学校でその話はや

めてくれ。」

俺は謝罪を受け入れ小声でその話題は学校ではやめてくれと頼んだ。

ゼノヴィア「だからこそ、まずはこれを用いて練習しよう。」

そしてポケットから出したのは紛れもなく避妊用のアレである。

蓮「お、おい！そんなもの学校で出すな！それと俺は黒歌と付き合ってるから、無理だって何べん言ったらわかるんだ!!」

一誠「お、おい蓮。噂されてるとはいえ、地味に黒歌先生と付き合ってること言っちゃまってるぞ。」

蓮「あ。」

「「「キヤーーーーーー」」」

しまった。噂で留まっていたのに言っちゃった。

元浜、松田「蓮、貴様ああああ。」

悪い、今、お前らに付き合ってる暇はないんだ。

俺は二人のこぶしを掴むと腹パンで黙らせた。

ゼノヴィア「だから私は愛人の立場でいいと言ってる。」

「「「「「キャーキャーキャー」」」」」

さつきよりでかい叫び声が聞こえてくる。

蓮「お前、何、口走ってんだ!!」

そしてタイミングが良いのか悪いのか黒歌が教室に入ってくる。

そして周りの女子が黒歌になにか言うとか黒歌が来た。

黒歌「ちよつと蓮。何しようとしてるのかな。」

やべえ、すごい笑顔が怖い。

蓮「違う! 俺は何もしてない! ゼノヴィアが前みたいに暴走してるだけだ!」

ゼノヴィア「暴走とは失礼な、私はただ子作りの練習をと思って。」

黒歌「へえ。子作りを。」

蓮「違うんです。黒歌さん、こっちはそんなつもりは全くないんです。」

黒歌「とりあえず、来なさい!!」

蓮「俺は無実だ あああああ!!」

俺は黒歌に首根っこを掴まれ生徒指導室で叱られまくり、

その後、黒歌の尻に敷かれることとなってしまったのだった。



その日の夜

ピンポーン

皆がゆっくりとしていると突然、インターホンが鳴った。

こんな時間に誰だ？

黒歌「蓮、出てきてにゃ。」

蓮「はい。」

いまだに機嫌が少し悪い黒歌に言われドアを開けた。

蓮「はい。」

???「ただいま。」

そこにはなぜか呉島貴虎（久保田悠来）が居た。

蓮（え。なぜ呉島貴虎がここにいるの!?!）

神様（あの、一応この世界のあなたのお父さんですよ。まあ、名前は中辻貴虎に

なってますが。）

蓮（は?）

俺は突然、神様から言われた衝撃の言葉に固まってしまった。

（補足・・・記憶から消えたのは黄金の果実や鎧武の重要な点のみなのでキャラクタ―そのものは覚えています。）

貴虎「どうした？ボーっとして。」

蓮「い、いやなんでもないよ。おかえり。」

この時、そういうことは早く言っとけよ。神様に対して思ってしまった。

とりあえず、家に上げ貴虎さんは自分の部屋で着替えている。

そしてリビングに戻って思った。

黒歌達について何も言っていなかった!!

そう、お父さんってどんな人だろうと思いつつも全く帰ってこなかった上連絡もなかったため、全くと言ってもいいほど何も話してなかった。

とりあえず、まずは黒歌達に説明しないと。

俺はリビングに戻り黒歌達に俺のお父さんが帰ってきたことを伝えた。

黒歌「なんで帰ってくる事前になかったにゃ！」

蓮「俺だっていきありでびっくりしてるわ！」

小猫「とりあえず、どうします?」

蓮「そりゃあ、正直に言った方がいいんじゃない?」

小猫「でも、連絡なしに勝手に女性三人と一緒に暮らしてゐてまずくないですか?」

確かにしかも、相手は高校生ってかなりまずい気が・・・

貴虎さんって結構そういうところ厳しそう。

そうこうしていると階段を下りる音がしてきた。

蓮「と、とりあえず隠れといて。」

俺は三人を廊下に出れる後ろの扉の近くに隠れといてもらった。

ガチャ

隠れてもらったらすぐ、前の扉が開き貴虎さんが入ってきた。

てか、私服でもスーツなのね。

蓮「そういや、父さんは今回どうしていきなり、帰ってきたの?」

貴虎「ああ。仕事が一段落ついてな、休暇をもらって家に帰ってきたんだ。まあ二日後にはまた、アメリカに戻るがな。」

蓮「そうなんだ。」

蓮「そういや、ご飯っている？ 食べてないなら何か作るけど。」

貴虎「いや、食べてきたから、大丈夫だ。」

ふうー。なんとか普通に会話出来てるな。このままいけばいいが。

貴虎「そういや、明日は授業参観なのだろう。明日は私も見に行かせてもらおうぞ。」

蓮「ファ!？」

ゴン

驚いて変な声が出た。てか、やばい驚きで隠れてる三人の誰かが物音を出してるし。

貴虎「ん？ 誰かいるのか？」

やばいやばいやばい。

にゃー

黒歌が猫の状態で出てきた。

貴虎「なんだ、猫を飼い始めたのか？」

蓮「あ、あああ。そうだよ。多分さっきの音もその猫じゃないかな。」

貴虎「そうか。」

セーフ。黒歌さんナイスです。猫（黒歌）はまた戻っていった。

貴虎「そういや、最近の調子はどうなんだ？」

蓮「うん。いい感じだよ。」

貴虎「それなら、よかった。それと藤果は今回仕事が残って来れなかったが、近いうちに一度帰ってきたいと言ってたぞ。」

蓮「そうなんだ。」

蓮（もしかして朱月藤果のことか!?!もしかしくともそうだよな、この流れ!?!）
この日、いつも以上に疲れたのだった。

個人的には葛葉紘汰と悩みましたが年的に紘汰ではなく貴虎さんにしてみました。

『4』魔法少女と新たな予感

蓮「おい、作者！」

アルフォー「？」

蓮「なに、俺なんかした？ って顔してんだよ！」
日付をしてみる。

アルフォー「Σ(□。；)」

蓮「こんのバカタレ!! さっさと次を書け！」

アルフォー「・・・はい。」

蓮「まあこのアホ作者の事だから、また遅くなるかもしれんが気長に待ってやってくれ。」

アルフォー・蓮「それでは本編どうぞ。」

蓮「お前は口を動かさず手を動かせ!!」

アルフォー「はい！」

蓮サイド

ついにこの日が来てしまった。

親は来ないと高をくくってたのに、なぜ今頃現れるんだ。

そして刻一刻と時間は経ち授業の時間前の昼休みになってしまった。

蓮「そういや、イツセーの所は誰が来るんだ？」

イツセー「俺の所は母さんと藤さんが見に来るんだとさ。そっちは？」

蓮「俺の所は父さんだけだ。」

そして貴虎さんが入ってきて先に来ていた他の親と同様に教室の後ろに立った。

やべえ、すげえ緊張する。

主に後ろからの圧が・・・

そして授業が始まった。

科目は数学だった。

先生「この漸化式のパターンは・・・」

俺は地獄のように長い時間を過ごした。



やっと授業参観が終わった。

蓮「じゃあ、僕は部活あるから。」

貴虎「ああ。なら先に帰って・・・何の騒ぎだ？」

確かに大勢が体育館に押し寄せて行ってる。

蓮「まあ、気にしなくてもいいんじゃない？」

貴虎「そうだな。俺は先に帰っているぞ。」

そういい貴虎さんは帰っていった。

うん？ イッセーたちも体育館に入っていたが、本当に何があるんだ。

そう思い俺も体育館に入ると、なんか魔女っ子コスプレの撮影会やってるし。

イッセー「おお。蓮、お前も来たのか。」

蓮「まあ、かなり騒がしかったしな。」

匙がいつの間にか解散させてた。

蓮「よお。匙、大変そうだな。」

匙「ん？蓮か。まあ、ちょっとな。」

そして騒ぎを聞きつけたのだろう蒼那さんも来た。

蒼那「匙。これは一体何の騒ぎですか。」

匙「いえ、会長、この方が・・コスプレイヤー？」「ああ！ソーナちゃん見つけた!!」

蒼那「あ、あ。」

一誠「もしかして。」

匙「会長、お知合いですか？」

魔女っ子「ソーナちゃん！どうしちゃったの。お顔が真っ赤ですよ。せっかくのお姉さまとの再会なのだから、もっと喜んでくれても良いと思うの！お姉さま！ソーたん！って抱き合いながらゆりゆりの展開でも良いと思うのだけれども。お姉ちゃんは。」

蒼那さん無表情だがすげえ恥ずかしそうだな。

イツセー「お姉さま？」

リアス「セラフォル・レヴィアタン様よ。」

匙「現四大魔王の一人で会長のお姉さまにあたる人だ。まあ、俺も会うのは初めてなんだが。」

イッセー・アーシア・蓮「「えええええー!?」」

セラフォルー「本当はお姉さまと会えてとっても嬉しいんですよ。ソーナちゃん。」

リアス「セラフォルー様、お久しぶりです。」

セラフォルー「あら、リアスちゃん、おひさ☆元気してましたか？」

リアス「はい。おかげさまで。今日はソーナの公開授業へ？」

セラフォルー「うん。ソーナちゃんったらひどいのよ。今日の事黙っていたんだから。お姉ちゃんショックで展開に攻め込もうとしちゃったんだから。」

こんな人（悪魔）が魔王で大丈夫なのか・・・。

今後の悪魔社会が不安になってきた。

セラフォルー「あっちはリアスちゃんの新しい眷属の子達？」

リアス「はい。イッセー、蓮、アーシア、ご挨拶なさい。」

イッセー「はい。兵藤一誠です。リアス・グレモリー様の兵士をやってます。」

蓮「中辻蓮です、イッセーと同じく兵士です。よろしくお願いします。」

アーシア「アーシア・アルジェントです。リアス部長の僧侶をやっています。」

セラフォルー「初めまして、魔王のセラフォルー・レヴィアタンです。レヴィアタンって呼んでね☆」

イッセー「は・・はい。」

俺この人（悪魔） 苦手だわ。

蒼那「お姉さま。私はこの学校の生徒会長を任せられています。いくら身内だからといってもそのような行動や格好はあまりに容認できません！」

セラフォルー「そんなソーナちゃん！ソーナちゃんからそんなこと言われるだなんてお姉ちゃん悲しい！お姉ちゃんが魔法少女にあこがれてるって知ってるでしょ。」

そんな理由でかよ。郷に入っては郷に従えって言葉もあるぐらいのにな。

セラフォルー「きらめくスティックで天使も堕天使もまとめて抹殺なんだから☆」
笑顔で恐ろしいこと言ってるやがるし。

蒼那「お姉さま。ご自重ください。お姉さまにきらめかれたら小国が数分で滅び

ます。」

イッセー「なあ、匙。コカビエルの時、ソーナ会長がお姉さんを呼ばなかったけど、仲が悪いからってわけじゃないんだよな。」

朱乃「その逆ですわ。仲がよすぎて収集が付かなくなるんですわ。」

蓮「まあ今もかまって、かまって。って感じで話しかけてるからな。」

蒼那「もう耐えられません！！！」

あ。蒼那会長、走って行った。まあその後ろをお姉さんが追いかけてるが。

匙「じゃあ、俺、会長のフォローに行ってくるわ。」

イッセー「お、おう。頑張れよ。」

リアス「はあ。あまり言いたくないのだけれど。現四大魔王はプライベートが軽すぎるのよ。」

よくあんな調子で魔王になれたな・・・。



翌日

一つ、部長が重要な発表があるとのことだった。

リアス「昨日、魔王様からのご命令でもう一人の僧侶の封印を解くわ。」



そして同時刻、墮天使領で一つ事件が起きた。

それは、牢屋に入れられていたはずの、フリード・セルゼンの脱走事件だった。

ちなみに一誠たちの担任が黒歌に変わったことで今回の授業参観の授業も変わった
ta と思うておいてください

それから本当に遅くなってしまう申し訳ありません。

これからも頑張って書きますので皆様、気長にお待ちいただけるとうれしいです。
それでは次回をお楽しみに!!

『5』吸血鬼の後輩

またも投稿が遅くなってしまい申し訳ございません。

え？また、前書きに蓮君は出てこないのか？だって？

あははは。そう何回もボコボコにされるのは・・蓮「いるぞ。」・・え？

蓮「また一か月もかかりやがったな。」

アルフォー「いやこれには深いわけが・・蓮「問答無用!!」

極オーレ!!

アルフォー「いや！それはまだ本編にも出てて無いのに!!」

チーン

蓮「ったく。次はもっと早く投稿してほしいもんだな。あ、それでは本編どうぞ。」

蓮サイド

部長にどういふことか聞くとどうやら力が制御できず暴走の危険があるため封印

されていたようだ。

そして旧校舎の鍵のかけられた部屋の前に来ていた。

イツセー「ここに？」

アーシア「私と同じ僧侶が？」

リアス「深夜は封印の術も解けるから旧校舎内限定で外に出ても良いことになっているのだけれど、中にいる子自身がそれを拒否してるの。」

蓮「引きこもりってことか。」

朱乃「でもこの子が一番の稼ぎ頭なんですよ。」

イツセー「マジですか!？」

裕斗「パソコンを介して特殊な契約をしているんだ。」

いや、パソコンを介してって絶対無理なものもでてくるだろうに。

ゼノヴィア「しかし、封印されるほどの力とは一体どういったものなのだろうか。」

話しているとリアス部長の前に魔法陣が現れ鎖や鍵が消えた。

リアス「入るわよ。」

朱乃「女装の趣味があるのですわ。」

リアス「この子はギヤスパー・ウラデイ、私のもう一人の僧侶。一樣、駒王学園の一年生で、転生前は人間と吸血鬼のハーフよ。」

吸血鬼までいんのかよ!? 悪魔や天使に墮天使に吸血鬼やドラゴンってしかも表沙汰になってないのもすげえ話だな。

イツセー「こんな、こんな残酷な話があって良いって言うのか!……!」

蓮「ははは・・・。いつも通りだな。」

リアス「ギヤスパーお願いだから外に出ましょ。」

ギヤスパー「嫌ですうう!!」

蓮「そう言わず、とりあえず外に行くぞ。」

ギヤスパー「ひい!」

その途端、ギヤスパーの目が光った。

蓮「なんだ今の?」

ギヤスパー「どうして動けるんですかあああ!?!」

蓮「え?それってどういう・・・」

俺が振り返ると皆止まってるな。うん、見事に。てかなら何で俺は動いて・・・？なんだ？

ポケットが光っているのが見え、ポケットを探ると何故かエナジーロックシードが光っていた。

これのおかげか？

まあ、ロックシードに俺の知らない力があっても不思議ではないが、こんな能力まであのかよ。

少し経つと時間が動いたのだろう、皆動き出した。

イツセー「あれ？蓮にギヤスパーお前らいつの間に移動したんだ!？」

アーシア「おかしいです。さっきまでそこに・・・。」

朱乃「フォービドゥン・バロール・ビュー、停止世界の邪眼といわれるその子の神器ですわ。」

小猫「興奮すると視界に入れたものを一時的に停止させることができるんです。」
リアス「でも何故、蓮には効かなかったのかしら。」

蓮「エナジーロックシードが光っていたのでその影響かと。まあ5個も持って

ますし。」

イッセー「お前も、お前でいよいよおかしいな。」

蓮「まあ。一旦部室に戻ろうぜ。」



移動して部室

朱乃「ギヤスパー君はこの力を制御できず、魔王様の命でここに封じられていたのですわ。」

リアス「その上無意識の内に力が禁^{バランスブレイカー}手に至る可能性もあったからなのよ。」

イッセー「バ、禁手・・・。」

そういうイッセーはライザー戦でなっていたな。

ガタガタ

ギヤスパー「ううう。僕の話なんてしてほしくないのに・・・。目立ちたくないです!!!」

いつの間に段ボール持ってきて隠れたんだよ。

イッセー「また、こんなところに隠れやがってよ！」

ドン

イッセーが段ボールを軽く蹴ると、

ギヤスパー「うええええ」。僕はこの箱の中で十分です!! 箱入り息子ってことで許してください。」

イッセー「なんだそりゃ。」

朱乃「部長、そろそろ。」

リアス「ええ。そうね。私はこれからトップ会談の打ち合わせがあるから、裕斗。」

裕斗「はい。何でしょうか？」

リアス「お兄様があなたの禁手について詳しく知りたいらしいから、一緒に来て頂戴。」

裕斗「わかりました。」

リアス「その間だけでもあなたたちにギヤスパーの教育係をお願いするから、よろしくね。」

蓮「教育係!？」



そしてギヤスパーの引きこもりを治そうとなったんだが・・・。

ゼノヴィア「おらおら!もたもたしてると、このデュランダルのお餌食になるぞ。」

ギヤスパー「いやああああ!!！」

ギヤスパーとゼノヴィアが追いかけてるが逆効果だろ、これ・・・。

ギヤスパー「どうしてこんなことするんですか!？」

ゼノヴィア「健全な精神は健全な肉体に宿る。だからまずは体力から鍛えるべきだ!」

イツセー「ゼノヴィア、楽しそうだな。」

蓮「明らかに間違ってると思うけどな。」

ギヤスパー「もうだめです。一步も動けません!!」

小猫「これを食べればすぐに元気に・・・」

何でニンニクなん・・・あ。

ギヤスパー「いやああああ!!！ ニンニク嫌いーーーー!!！」

今度は小猫ちゃんと追いかけてっこしてるし。

蓮「小猫ちゃんって絶対にSだな。」

イッセー「なんでまたいきなりそう思ったんだ？」

蓮「ああ、ちょっと前にな、紅茶に砂糖入れようとしたら塩とすり替えられてたりお風呂を掃除してたら、いきなりこちょこちょされて水が思いっきりかかったところを笑われたり、スマホのパスワードを知らない間に変えられたりとか、色々あったんだよ。」

小猫「あの時の蓮先輩はからかうのはすごく楽しかったですよ。これからもっと頻度を増やしましょう。」

蓮「やめてください、お願いします。」

そんな笑顔で言われても・・・。

匙「おお。やってるな！オカ研。」

イッセー「お、匙。」

匙「解禁された引きこもり眷属がいると聞いてちょっと見に来たぜ。おお！金髪美少女かよ」

イツセー「女装野郎だけどね。..

匙「マジか・・・。こんな残酷なことがあっていいのか・・・。」

匙は崩れ落ちてた。気持ちはわからんでもないが、そこまでいくか？

???「へえ」。魔王眷属の悪魔さんたちはここでお遊戯してるってわけか。」

イツセー「!!!」

イツセーがいきなり警戒してるが何者だ？

アーシア「お知合いですか？」

???「やあ、悪魔くん、いや赤龍帝、元気そうだな。」

イツセー「アザゼル!!」

何!?

俺はベルトを着けいつでも変身できるようにしておく。

そして皆もそれぞれ警戒していた。

匙「ひよ、兵藤、アザゼルって・・・。」

兵藤「ああ、まじだよ。こいつとは何度も接触してる。」

アザゼル「いくら、お前らが束になったところで勝負にすらならんぞ。それぐら

いはわかるだろ。」

イッサー「何しに来た！」

アザゼル「散歩がてらちよつと見学だ。鎧武者はいるみたいだが聖魔剣使いはいるか。」

イッサー「木場ならいない！それにお前が木場や蓮を狙ってるなら！」

『Boost』

アザゼル「つたく。下級なのに威勢だけは良いようだな。そうかい聖魔剣使いは居ねえのか。まあ、その鎧武者の力も気になるが今度にしとくか。おいそのハーフヴァンパイア。

フォービドゥン・バロール・ビュ
停止世界の邪眼だな。その手の神器は持ち主のキャパシティーが足らなきや危険極まりない。

アフツブーシヨン・ライン
そしてそっちは黒い龍脈だな。訓練ならその神器をハーフヴァンパイアにつなげて余分な力を吸い取れば暴走の心配もない。」

匙「力を吸い取る・・・。」

アザゼル「なんだ知らなかったのか？それは五大龍王ヴリドラを宿していてな、

物体に接続してその力を散らせる能力がある。短時間なら他の者にも接続が可能だ。」

匙「これにそんな力が・・・。」

まさか匙の神器にそんな力があつたとはな。

アザゼル「そうだもつと手っ取り早い方法があるぞ。赤龍帝の血を飲むことだ。」

ギヤスパー「ひい！」

イッセー「俺の血を飲むってことか。」

アザゼル「ヴァンパイアには血を飲ませるのが一番だしな。まあ、あとは自分たちでやってみろ。じゃあな。」

イッセー「待てよ！なんで正体を隠して俺に接触してきた。」

アザゼル「それはな・・・」

ゴクリ

アザゼル「俺の趣味だ。」

なんだそりゃ！もつとましな言い分はないのか！！

ゼノヴィア「あれが堕天使の総督か。何ともつかめない男だ。」

こうして嵐のように墮天使の総督は去って行き、俺たちは匙の協力の元ギャスパーの訓練をすることになったのだった。

『6』力

蓮サイド

あの後、匙の協力の元ギヤスパアの訓練として匙にギヤスパアの力を吸い取ってもらいながらボールを投げ、

それだけを止めれるように訓練を行ったのだが・・・

リアス「ギヤスパア出て着て頂戴。無理に出した私も悪かったから。」

ギヤスパア「うえええええん」

完全に逆効果でまた、引きこもってしまった。

イツセー「すみません、大事な打ち合わせの最中に呼び出しちゃって。」

リアス「かまわないわ。あなたたちはこの子のために頑張ってくれたんだし。」

蓮「本当にすみません。逆効果みたいだったようで。」

リアス「ギヤスパアがこんなことになったのには事情があるのよ。」

イツセー「事情？」

リアス「ギヤスパアの父親は名門のヴァンパイアなのだけれど母親は人間なの。」

ヴァンパイアは悪魔以上に血統を重んじる種族だから、親兄弟からも差別的な扱いを受けていたのよ。

しかも、人間界に來たら來たで化け物扱いされて、しかも時間停止の力まで持つて

制御出来ていなかったから忌み嫌われていたのよ。

何をされても気づかないのよ。そんなものの近くにいたいとは思わないものね……。」

あいつにそんな過去が……。

イツセー「そうか、あいつもアーシアと同じだったんだ。」

リアス「もちろん、私たちはそんなことしない子っていうのは分っているのだけれど……。」

ギヤスパー「僕、こんな力なんていらぬ。皆止まっちゃうんだ。だから皆嫌がる。僕だって嫌だ。」

もう、皆の止まった顔を見るのはもう嫌だ!!」

部屋の外にまでギヤスパーの悲痛な声が響いてきた。

リアス「これでは、キング失格ね・・・。」

イッセー「部長！あとは任せてください！」

リアス「イッセー。」

イッセー「せっかくできた男子の後輩なんです。俺たちで何とかします。な、蓮

！」

蓮「ああ。さっきの話を聞いて余計にあいつをほっとけないからな！」

リアス「なら、後は任せるわ。」

部長は笑顔で、でも最後にギヤスパーの部屋を心配そうに見て、魔法陣で轉移した。

」

イッセー「ギヤスパー、お前が出てくるまで俺はここを一步も動かねえからな！
まあ向こうから出てきてくれるのをひたすら待つしかないか。



イッセーサイド

三時間後

あたりはもう暗くなっていた。

すると蓮が話始めた。

蓮「なあ、ギヤスパーお前はその力が怖いかな？」

だがギヤスパーからはその返事は帰ってこなくとも続けた。

蓮「俺もいつかこの世界を滅ぼす植物のある世界とを繋げる力、人でも何でも化け物に変えてしまう果物の力を使ってるんだ。

しかも、その世界を繋げて浸食させているのは紛れもなく俺だと思う。」

イツセー「蓮、だからそれはお前のせいと決まったわけじゃ・蓮「それでもその可能性は高い。」・・・」

その時の蓮の顔は悲しそうで手も震えていた。

蓮「俺はな今でもこの力が怖いよ。俺が化け物になっちまうんじゃないかって、俺の力で世界が滅んでしまうんじゃないかって、

そんなことばかり考えてしまうよ。でもな俺はこの力で誰かを守れるなら守りたいって思ってる。」

イツセー「俺も最強のドラゴンの力を宿してる。この力を使うたび体の一部が別

のナニかに変わってる気がするんだ。

それでも俺は恐れず前に進もうって思ってる。」

ギヤスパー「もしかしたらその力で大切な何かを失ってしまうかもしれないんですよ。どうしてそんなにまっすぐ生きられるんですか？」

イツセー「俺はバカだから難しいことは分んねえけど、部長のなつみだは二度と見たくねえ。仲間が次々と倒れていって最後に俺だけが残って、それでもボコボコやられて、あんま良く覚えてねえけど、あの時の部長の涙だけは心に焼き付いてる。あれはきつついんだ。」

蓮「俺はそこまで強くない、多分俺のせいで何かを失う結果になってしまったら俺は多分その重圧に耐えられない。」

でもだからこそ、失わないためにこの力を使う。たとえば俺が死んでも。」
すると少しだけ扉の部屋が開いた

ギヤスパー「僕はイツセー先輩が言ってた戦いを知ってます。でも僕はただこの部屋にただで・・・」

イツセー「別に攻めてるってわけじゃないさ。だってこれからは違うだろ。」

ギヤスパ―「でも僕がいても皆に迷惑をかけるだけで・・・」

蓮「誰もお前のことを迷惑だなんて思わねえよ、皆、仲間だって思ってるからこそ前と訓練したり、話したり、ほっとかないんだよ。」

今度は扉を開け、出てきてくれた。

ギヤスパ―「先輩・・・」

イツセー「なあ、ギヤスパ―力を貸してくれ、一緒に部長を支えようぜ。お前が怖いものは俺たちと一緒に乗り越えようぜ。」

ギヤスパ―「でも・・・イツセー」「なら俺の血飲んでみっか?」!

イツセー「そうすりゃさもつと、お目の力もうまく・・・ギヤスパ―」「怖いんです!!」

ギヤスパ―「生きたものから血を吸うだなんて、今でも輸血用の血を吸うのが精いっぱい、今でも自分の力が怖いのに、これ以上何かが昂ったら僕は・・・」

イツセー「そんなにか?俺なんてお前の能力が羨ましいけどな。」

ギヤスパ―「羨ましい。」

蓮「まったくだらない使い方だろ。ギヤスパ―聞かなくてもいいからな。」

イッセー「なにがくだらないだ!! 匍匐前進して女の子のスカートの中をだな。

いやいや、そんなせこいことより、部長を止めておっぱいを好き放題、いや朱乃さんや黒歌先生のおっぱいも・・・」

蓮「おい、黒歌に手を出すってんなら、お前でも容赦しねえぞ。ゴラァ。」

イッセー「じよ、冗談だって。さすがに人の彼女には手を出さねえよ。それでも妄想が止まらん!」

ギヤスパー「先輩って優しいんですね。僕、羨ましいだなんて言われたことなくてしかも具体的な例まで。」

蓮「いや、その具体例は絶対にダメだからね!!」

ギヤスパー「それでも、僕この能力は嫌われるものばかりだと思っていました。」
イッセー「馬鹿野郎!! 俺らは神器を与えられた。それが逃れられない運命だとしたら、前向きに考えなくてどうする! 呪ったり、恨んだりして一生過ごすつもりか!!」

よく聞け! ギヤスパー、俺はこの赤龍帝の力を何としても部長のおっぱいに譲渡した・・・って蓮!! ギヤスパーの耳を塞ぐな!!」

蓮「教育に悪すぎる。てか伝説の力をそんなことに使おうとしてたのか・・・。」

イッセー「ガチで引くな!!俺は何としてもこの目標を成し遂げるんだ!!」

蓮（こいつの将来がいよいよ不安になってきた・・・。）

ギヤスパー「すごいです。伝説の力をそんな卑猥なことに使おうとするなんて!!
僕の思考回路では到底思いつきません!!

イッセー先輩の煩惱って勇氣にあふれてるんですね!!」

イッセー「よせよ。照れるだろ。」

蓮「そんなんでいいのかギヤスパー・・・。」

蓮（部長すみません、ギヤスパーがおかしな方向に進みだしました。僕にはもう止めれそうにありません。）

俺たちはそのままギヤスパーの部屋の中で雑談することとなった。



蓮サイド

あの後三十分ぐらい雑談してたが、あの譲渡の話ってサーゼクス様発案なの!?あの人も結構ぶっ飛んでんな・・・。

裕斗「お！さすがだね。もう、打ち解けあってるね。」

蓮「お、裕斗か。」

イッセー「お疲れ。いいところに来た！今、俺たちグレモリー眷属の連携について考えてたんだ。」

裕斗「へえ。気になるね。」

蓮「どうせ、いつものろくでもないことだろ。」

イッセー「ろくでもないとはなんだ!!まず、俺が溜めた力をギヤスパーに譲渡そしてギヤスパーがそれで時間を止める。そして、その間二人は俺を敵から守ってその間に俺は止まってる女の子たちを・・・!!」

蓮「ほくら。ろくでもないことだ。まず、そんなことしようものなら、俺がその前にお前をボコボコにするわ」

裕斗「イッセー君、そろそろ真剣に自分の力について考えた方が良くと思うよ。」
イッセー「そんな目で見るな!!そうだ!ちょうど男子だけ集まったんだ!!この際、女の子の好きな所について語ろうぜ!もちろん、俺はおっぱい!!」

なぜこんな話になった?てか、そんなこと考えたこともなかったな・・・。

イッセー「おい！蓮！最後はお前の番だぞ。」

な！しまった！考えていたらいつの間にか俺の番に……。てかギヤスパーと裕斗も答えたのね……。

イッセー「さあ！白状しろ!! 本当は結構ムツリなんだろう!!」

蓮「わかったわかった。答えるよ。俺は・・ゼノヴィア「なんだ仲良く話してるじゃないか。」おわああ!!」

突然、ゼノヴィア、小猫、アーシアが入ってきた。

イッセー「答えるって言ったんだから答えろ!! 蓮!!」

蓮「できるかああああ!!!!」

女性の前で話す内容じゃないだろうが!!

小猫「たしかにさっき『答える』って言ってましたね。」

蓮「聞こえてたの!?!」

小猫「猫は聴覚も人より優れているんですよ。」

イッセー「さてさて、聞かせてもらおうか！蓮!!」

しかたがあるまいか。

蓮「わかった。答えよう。おい！あれはなんだ!!」

皆が俺が指をさした方を見る。

蓮以外「[[[何もない??]]]」

蓮「さらば!!」

俺は全速力で走った。

馬鹿めこんな古典的なトラップにかかりおってこのまま逃げさせてもらお・・・???

「そうはいかないにゃ!!」この声は!!

黒歌「今、白音から、蓮の女性の好きな所について答えると聞いて来たにゃ!!逃がさないにゃ!!」

ガシッ

まずい！思わぬ伏兵が!!そのまま俺は連れていかれ囲まれた。

ゼノヴィア「さあ、吐いてもらおうか。その情報を!!」

首元にデュランダルを突き付けられる。そこまでする!?

蓮「はあゝ。答えるよ。サラッと髪とうなじだ。」

蓮以外「[[[え?]]]」

意外そうにするな!!

この後、終始恥ずかしかった。

主にみんなからの視線で!!

『7』インベス？と小猫様

なんとか一ヶ月もかからなかった。

蓮「それでもさっさと書け。」

アルフォー「そんな殺生な。こっちはF G Oとかいろいろ●蓮「やっぱ、遊びじゃねえか!!」あ。」

蓮「早く書け、いいな？」

アルフォー「はい●●●。」

蓮「それではどうぞ。」

蓮サイド

あの後、何事もなく時間は過ぎていった。

貴虎さんは今日の朝に飛行機でまたアメリカに向かっていった。

結局、大してほとんどしゃべれなかったな。

そして今日の夕方、イツセーが朱乃さんに呼び出されたようなので俺はヘルヘイムの調査をしていた。

蓮「うーん、やっぱり俺の思い過ごしだったのかな?」

今は遺跡を探索しているのだがやはりあるのは昔、誰かが生活していた形跡のみで何もなかった。

とりあえず、もう少しだけ探索するか、やっぱりここがどうしても何かがある気がする。

10分後

やっぱり、なんもないかそろそろ帰るか。

そう思い俺は後ろを向き、来た道を戻ろうとすると、一瞬鎧を纏い剣のようなものをもった赤いナニかが通り過ぎていくのが見えた。

蓮「なんだ今の!？」

俺は警戒しながらも赤いナニかが行った方向に行くと今度ははっきり姿が見えた。

なんだこのインベス!?武装までしていやがる。

インベス? 「~~~~~。~~~~~。」

しゃべった!? なんだこの異質なインベス。てか悪魔でもやはり地球外の言語は分んねえのか。

そう考えているとそのインベスは立ち去ろうとしていく。

とりあえず、俺はとっさにスマホのカメラでそいつを撮影することに成功した。その後、追いかけてみたもののいなくなっていた。

なんだったんだ今の・・・。

その後帰宅すると、黒歌、小猫、ゼノヴィアはすでに帰っていた。

本人ら曰く「家もいいけどホテルもなかなか寛げて良かった」だそうだ。

その後、俺はあの時撮った写真を見ていた。

ぼやけているがしっかりと姿は写っていた。

蓮「やっぱ、あの森まだなんかあるのかもしれないが、一体何があるってんだ。」

まあ考えても仕方ねえか。そう思い、俺は寝ることにした。

▼▼▼

次の日

俺はたまにはと思い、屋上で昼食をとっていた。

そして明日は会談がある。だけど、俺はどうしても昨日のインベスが気になっていた。

やはり、会話の意思があったと見るとやはり知能を持ったインベスがいることになる。

戦うとなると厄介だぞ。こいつは。

でも、逆に会話が出来たら、あの森のことが分かるかもしれない。

小猫「・・・どうしたんですか。何か悩んでいるようですが？」

蓮「ん? ああ、いや、別に何でもないんだ。」

てか、小猫ちゃんいつの間にかいたんだ。小さくてわかんなか・・・危ねえ!!

俺の目の前を小猫ちゃんの拳が横切った。

小猫「何か失礼なことを考えていませんでしたか。」

蓮「い、いやいや、そんなわけがないじゃないですか。あはははは。」

黒歌「本当の所は？」

蓮「小さくて気づかなかったと、あ。」

黒歌もいつの間に!? ってやばい。つい乗せられて。

小猫「へえ。小さくて気づかなかった、ですか・・・。」

蓮「く、黒歌、嵌めやがったな。っていねえ!?」

さっきまでいたはずの黒歌はいなくなっていた。

小猫「最後に遺言ぐらいは聞いてあげますよ。何か言い残すことは？」

やべえ、俺、殺される。

蓮「に」

小猫「に?」

蓮「逃げろー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

俺は全速力で逃げた。後ろを向くとほぼ同じぐらいのスピードで鬼の形相のまま

追いかけてきた。

まずいな。後昼休みの終了まで・・・20分はあるぞ。

俺は校舎内を逃げ回っていた。

生徒A「おい！蓮が学園のマスコットである小猫ちゃんに多分怒られて追い回されてるぞ。」

生徒B 「なんだと!! マスコットである小猫様を怒らせ追い回されてるだ!!
奴を捕まえろ!! そして小猫様に献上するぞ!!」

他の生徒達 「「「「おおおおおおお!!」」」」

おいぃー!! 後ろからやべえことが聞こえたぞ!!

まずい、もし捕まって小猫ちゃんに差し出されたら俺は木端微塵☆にされるぞ。
俺はとりあえず、昼休みの間逃げきれば後はどうとでもなるはずだ。

そして逃げていると、前の曲がり角から人が

生徒達 「「「蓮、逃げ場はないぞ!!」」」 観念しやがれ!!」

おいおい、挟まれてるじゃねえか。こうなったら!!

俺は横を向き壁キックの要領で前の生徒たちをジャンプで避けて走り出した。

生徒達 「「「そんなバカな!!」」」

悪魔の身体能力最高だな!!

だがここでまずいことが起きた。

俺は壁キックの要領でまっすぐ進んだはいいいもののこのままいつでも行き止まり
なのだ。

まずいと思い俺はとっさに目の前の部屋に入った。

男子更衣室。普段なら部活の生徒が使っているが、今は昼休みなので、誰もいなかった。

そして俺は奥から3番目のロッカーに入った。

そうすると部屋のドアが開いた音が聞こえた。

小猫「逃げてても無駄ですよ。今すぐ出てくるなら半殺しで勘弁してあげます。」
俺はそれを聞いて余計に見つかるわけにはいかなかった。

小猫「・・・出てきませんか。なら探すだけです。」

そう言う足音が聞こえ始める。

バコーン

へ？何が起こって・・・バコーン

ま、間違いない小猫ちゃんロッカーを一つずつ殴ってへこませていつてる!!

このままじゃさっき冗談で言った、木端微塵☆が実現してしまう。

そしてどんどん音が近づいてくる。

そして俺はここで賭けに出た。

『8』 トップ会談

アルフォーです。今回も大幅に遅くなって申し訳ございません。

それじゃあまたボコられる前に・・蓮「逃がすと思ってたのか？」へ？」
アルフォー「いつの間に!？」

蓮「黒歌よろしく。」

黒歌「オッケー。」

アルフォー「に、逃げろー!!」

黒歌「逃がすか。」

蓮「はあ、あのバカ作者がすまん。では本編へどうぞ。」

アルフォー「ぎゃあああー!」

ドカン

蓮サイド

あれから後日、三大勢力のトップ会談が行われていた。

リアス「以上が、リアス・グレモリーとその眷属の関わった事件の詳細です。」

ソーナ「私、ソーナ・シトリーもその証言に嘘、偽りが無いことを証明いたします。」

サーゼクス「ごくろう。下がってくれ。」

セラフォル「ありがとう。リアスちゃん、ソーナちゃん。」

ソーナさんは恥ずかしそうにしながらも、リアスとともに指定の位置に戻った。

サーゼクス「リアスたちの報告を受けて墮天使総督の意見を聞きたい。」

アザゼル「意見もなにもコカビエルが独断でやったことだ。」

ミカエル「あずかり知らぬところだと？」

アザゼル「あいつの目的を探るために泳がせていたのさ。」

あいつも俺、自らが潜伏していたとは思わねえだろうしな。」

サーゼクス「話を逸らさないでいただきたい。」

アザゼル「だから、こっちも事態の收拾ために白龍皇を送っただろう。」

それに奴は地獄の底で永久冷凍の刑にしたからな。もう出てこれねえよ。」

ミカエル「そういうことではなく、問題はコカビエルがあなたがたに不満を抱き、事を起こしたことです。」

アザゼル「戦争が中途半端に終わったのが、よほど気に入らなかったんだろうな。まあ、俺はもう戦争なんかに興味はねえがな。」

セラフォル「不満分子ね・・・。」

アザゼル「ふっ、お前らの所だって色々あるらしいじゃねえか。」

さすが堕天使のトップだけあって悪魔の事情にも詳しそうだ。

サーゼクス「その件は今回の件とは何の関係もない。今回の会談の目的は・・・アザゼル「もう、めんどくせえ話はいい。とっとと和平を結ぼうぜ。」！」

アザゼル「元々お前らもそういうつもりだったんだろ。」

その言葉にみんなが驚いていた。

アザゼル「それに、この三すくみの関係はこの世界の害になるだけだ。異論はねえだろ？」

ミカエル「まあ、戦争の原因である、神と魔王は消滅しましたからね。」

アザゼル「そこで、三すくみの外側にいながら世界を動かせる力を持つ赤龍帝と

白龍皇さらに未知のテクノロジーを使っている、そのこの悪魔の三人の考えが聞きたい。」

俺もかよ・まあ、考えてはいたが。

ヴァーリ「俺は唯、強い奴と戦えればそれでいいさ。」

アザゼル「戦争なんかせずとも、強い奴なんてごまんといる。それで赤龍帝の方は？」

イッセー「ええ!? えーと、いきなりそんな小難しいこと聞かれても。」

アザゼル「まあ、わかりやすく言うとな、戦争中ならリアス・グレモリーは抱けないぞ。」

イッセー「和平でお願いします!! 平和が一番です。部長を抱きたいです!!!!!!」

よくもまあ、こんな大事な会談でそんなことが言えたもんだ。

裕斗「イッセー君、サーゼクス様おられるんだよ。」

イッセー「あ。」

サーゼクス様ずっと笑ってるし。

リアス「あなたたって人は・・・。」

イッセー「ゴッ、コホンともかく俺の力は部長や仲間のためにしか使いません。これは絶対です。」

アザゼル「くくく。それで最後はそこのお前さんは？」

蓮「俺も和平に賛成です。俺はこのままみんなと楽しく過ごしていきたいと思ってるので。」

アザゼル「そうかい。なら、問題はなさそうだな。」

ミカエル「そういえば、赤龍帝殿、私に話があるのでしたね。」

イッセー「覚えてくれていたのですね。」

ミカエル「ええ。もちろん。」

イッセー「どうしてアーシアを追放したんですか。」

アーシア「!!」

イッセー「なぜあれほど神を信じていたアーシアを追放したんですか。」

ミカエル「・・・神が死んだ後、システムだけが残りました。ですが、それは私を中心にcaろうじて動かしているに過ぎません。故にシステムに悪影響を及ぼす可能性のあるものを遠ざける必要がありました。」

イツセー「アーシアの悪魔や堕天使も治療できる力があつたからですか。」

ミカエル「信者の信仰は天界に住まう者の力の源、信仰に悪影響を及ぼす要素はできるだけ排除しなくては

システムの維持ができません。」

蓮「だから、神の不在を知るゼノヴィアも追放したのか・・・。」

俺は事情は理解しても爪が食い込む程拳に力を入れてしまう。

ミカエル「ええ。そのためお二人を異端とするしかありませんでした。申し訳ありません。」

イリナ「！裏切ったんじゃないの・・・。」

ゼノヴィア「頭をお上げください、ミカエル様。長年教会で育てられていたため多少の公開もありましたが、

今はこの悪魔としての生活に満足しています。他の信徒には申し訳ありませんが・・・。」

アーシア「私も今、幸せだと思っています。大切な人がたくさんできましたからね。」

俺はそれを聞きこぶしの力を抜いた。

まあ、本人が良いなら俺がとやかく言うものではないだろう。それにこっちの生活に満足しているみたいだし。

ミカエル「お二人の寛大な御心に感謝いたします。」

アザゼル「それで、その悪魔くんが言っていたヘルヘイムの森についても聞かせてもらおうか。」

まあ・聞かれるよな。

蓮「はい、わかりまし」

その瞬間、周りの時間が停止した。

『9』 襲来!古き魔王、新たなライダー

新年あけましておめでとうございます。

今年度もどうぞこの小説をよろしくお願い致します。

それと投稿が遅れ、申し訳ありませんでした。

それではどうぞ。

蓮サイド

蓮「この感覚って・・・。」

一誠「時間が停止したのか?」

アザゼル「らしいな。俺たち上位の力を持った者たちはともかく。」

ヴァーリ「俺たちはドラゴンの力、そっちの連中は聖剣が防いだようだな。」

蓮「俺はエナジールロックシードの力か。」

やはり、エナジールロックシードが光っていた。

でも、やはり一つだけしか持っていないせいか黒歌は停止していた。

そのため二つほど渡すと黒歌も動き出した。

アザゼル「ほお、そんな力もあるのか、この襲撃をなんとかした後にはぜひとも研究してみたいものだ。」

リアス「私が大丈夫なのは一誠のおかげよ。」

確かに一誠に触れているからな。

ドーン

一誠「なんだ!？」

全員が窓から外を見ると空に魔法陣があり、そこからフード被った人たちが出てきていて、さらに増えていった。

蓮「なんだあいつら？」

セラフォル「あれは魔術師ね。」

一誠「魔術師？」

セラフォル「全く魔女っ子の私を差し置いて失礼なのよ。」

魔術師はこちらに攻撃を仕掛けているが、魔法陣を開いてもらったためなんとか

攻撃は直撃はしていなかった。

ミカエル「でもこの力は・・・。」

アザゼル「ああ。多分、あのハーフヴァンパイアの小僧を禁手状態にしてるんだろうな。」

一誠「ギヤスパーを!？」

サーゼクス「停止能力を持っているものは少ない。おそらく敵の手に堕ちたと見るべきだろう。」

リアス「私の眷属がテロリストに利用されるなんてこれほどの屈辱はないわ。」

ミカエル「警護の者たちが!」

窓を見ると警護用に出ていた人たちが次々とやられていた。

ミカエル「それにあの転移魔術、この結界内にゲートをつなげている者がいるようです。」

グレイフィア「逆にこちらの転移魔法陣は完全に封じられているようです。」

アザゼル「やられたな。」

ミカエル「このタイミングといいリアス・グレモリーの眷属を逆利用する戦術と

いい」

イリナ「裏切者がいる・・・」

サーゼクス「だがこのままじっとしているわけにもいくまい。これ以上ギヤスパーの力が増大すれば我らも危ない。」

アザゼル「ならまずはあのハーフヴァンパイアの小僧をどうにかしないと危なかしくって反撃できねえ。」

リアス「お兄様、旧校舎に未使用の戦車の駒があります。」

サーゼクス「なるほど、キャスリングか。」

グレイフィア「サーゼクス様の魔力をお借りできればもうお一方ぐらいなら転移が可能かと。」

イツセー「なら、俺が！」

サーゼクス「わかった。リアスを頼んだよ。」

ヴァーリ「テロリストごとハーフヴァンパイアを吹っ飛ばした方が簡単じゃないか。なんなら俺がやってもいいんだぞ。」

イツセー「テメェ！」

アザゼル「和平を結ぼうってときだぜ。」

ヴァーリ「じっとしているのは性に合わないんでね。」

アザゼル「なら外の敵の攪乱でもしてくれ。」

ヴァーリ「了解。」

ヴァーリはそう言うとき空に飛び立ち、

ヴァーリ「禁手!!」

『V a n i s h i n g d r a g o n b a l a n c e b r e a k e r』

イツセー「あんな簡単に!？」

蓮「すげえー」

ヴァーリは外で魔術師達を倒していく。

蓮（あんなに強くてイツセーは二天龍の戦いであいつに勝てんのか？）

その間にも準備は進んでおり、

サーゼクス「リアスを頼んだぞイツセー君。」

イツセー「はい！」

そういうとイツセーと部長は転移した。

サーゼクス「リアス達がギヤスパ―君を救い出したら反撃に出よう。」

するとサーゼクスさんの少し後ろから魔法陣が現れ

そこから見知らぬ人が現れた。

サーゼクス「この魔法陣は!? 旧レヴィアタンの!?!」

旧レヴィアタン「ご機嫌よう、魔王殿にミカエル殿、アザゼル殿。」

セラフォル「どうしてあなたがここに!?!」

サーゼクス「旧レヴィアタンの血を引く者、カテレア・レヴィアタン!」

カテレア「世界に破壊と混沌を。」

その瞬間、魔法で部屋が爆発した。



少し時間が経ち●●●

イツセーサイド

俺たちはギヤスパ―を救い出し旧校舎から出て皆の援護に向かっていた。

だか前から別の人影が現れ警戒していると、

???「おんーや、またまた顔馴染みの皆さんが集まってるではありませんか♪」

!この声って!まさか!?

イッセー「なんでテメエがここにいるんだ、フリード!!」

フリード「あひやひやひや、そんなんあのクソ白トカゲに捕まった後、逃げ出したからに決まってるじゃん。」

リアス「それで今度は本当に消し飛ばされたいのかしら!」

フリード「へへへ。それはこれを見ても言えるかな?」

するとフリードは服からある物を出した。

イッセー「!なんで・・・なんでオメエが蓮の使ってるベルトを持ってやがんだ!!」

そう、フリードが出したのは戦国ドライバーだった。

フリード「へへへん、そんなこと教えるわけないだろうが!

でもまずは、俺にこことあの教会で傷をつけたあのクソ騎士と鎧野郎を葬らせてもらうのでお前らはこいつらと遊んでろ!!」

そういうとフリードはロックシードをいくつか開きインベスを出した後、ロックシードを投げ捨て外に出た。」

イツセー「な、ま、待て！ぐっ。」

俺はあいつを追いかけようとしたがインベスに邪魔された。

リアス「まずはこのインベス達をどうにかするわよ!!」

イツセー・ギヤスパー・小猫「はい!!」

皆、無事でいてくれ!!



蓮サイド

あの後アザゼルがカテレアの相手をする事になり、カテレアはオフィスから貰ったという蛇を飲みアザゼルは人工神器で禁手を行い戦っている。

そのため動ける人で魔術師の討伐をしていた。

蓮「だぁー!!もう!!何人いるんだよ!!」(変身済み)

(オレンジアームズ)

裕斗「やはり、あの魔法陣を出している人を倒さないと終わりそうにないね」

黒歌「全く、面倒なことをしてくれたものにゃ!!」(変身済み)

ゼノヴィア「！だがギヤスパーの時間停止が漸く解けたみたいだぞ」

蓮「ならもうひと踏ん張り、いきますか!」

???「いやっはー!!」

突然右側から剣を振られたのが見えたので躲し、その顔を見て衝撃だった。

蓮「!!なんで・・・お前がここにいるんだ、フリード!」

裕斗・ゼノヴィア・黒歌「!!?」

フリード「ひやははは、これまた久しぶりでござんすな。」

蓮「お前、今度は何が目的だ。」

フリード「もちろん、お前達クソ悪魔ども、特にお前とそこの騎士には傷をつけられた恨みを晴らせてもらうよーん。」

そういうとあいつは戦国ドライバーを取り出して装着した。

裕斗「何故、彼がああベルトを!?!」

フリード「へーんしん☆」

アキ

ロックオン

ハイ

アキーマームズ！毒・死・ハッハッハッ！

見たことのないロックシードを使い奴はこう言った。

フリード「名付けて、仮面ライダーダークレフティスだ、いいひやひやひやひやひやひや

！」

『10』 赤対白、武将対泥棒

大変長らくお持たせしました。

受験が長引くとともに一度どんな感じだった見直していたらかなり時間がかかりました。

これからまた投稿を再開しますのでよろしく願います。

あ、それでも亀更新になると思うけど許してください。

蓮サイド

フリード「いくぜー！！」

フリードは持っているアキーワンドで攻撃してくるが、フリードの予想外の登場

にとっさに反応できなかった。

蓮「なっ、ぐっ。」

フリード「ほらほら、がんばれがんばれ。」

蓮「舐めるな!!」

蓮は負けじと大橙丸と無双セイバーで防ぎ反撃もしていく。

フリード「な、意外にやるじゃないですか。」

黒歌「私のことも忘れるにゃ!」

黒歌もソニックアローで攻撃しながらフリードに切りかかろうと近づいていくが打たれた矢をしっかりとかわしていく。

フリード「邪魔なんだよ。」

フリードはイチゴのロックシードを開き出てきたセイリュウインベスに向かってロックシードを投げる。

するとセイリュウインベスはイチゴのロックシードを食べ、強化体となり黒歌に襲い掛かった。

蓮「な、てめえ!」

フリード「はいはい、あんたの相手は僕ですよん。」

黒歌と戦っているインベスを攻撃しようとしたがそれを止められた。



イッセーサイド

あの後、インベスを倒し、外に出るとアザゼルが片手を犠牲にカテレアを倒したところだった。

イッセー「部長、俺たちも蓮に加勢しましょう。」

リアス「ええ、もちろんよ！」

だが目の前にアザゼルが地面に撃墜させられた。

アザゼル「いてて、俺も焼きが回ったもんだな。ここで反旗かヴァーリ。」

ヴァーリ「悪いなアザゼル、こっちの方が面白そうだからね。」

それにアースガルズと戦ってみたことはないか？とも言われたからね。」

アザゼル「へえー。俺はてっきりカテレアと仲良くするんだのかと思ったがね。」

同じ魔王の座を奪われたもの同士。」

皆がヴァーリの方を見る。

ヴァーリ「俺の名はヴァーリ・ルシファー。俺は死んだ先代魔王ルシファーの孫である父と人間の母の間に生まれたハーフなんだ。」

全員が驚く。

アザゼル「魔王の血縁でありながら、人間の血も混じっている為に偶然にも白龍皇を宿す事が出来たか・・・。

全くもって冗談みたいな存在だよ、お前は、こいつは過去、現在そして未来を含めても最強の白龍皇に為るだろうさ。」

ヴァーリ「奇跡という言葉は俺のためにあるんだろうな。

兵藤一誠、運命とは残酷なものだとは思わないかい。」

イツセー「なに!？」

ヴァーリ「俺は魔王の血筋でありながら、ドラゴンの力も宿した最強の存在。対してキミはただの人間、キミの先祖も調べたが人外や魔法使いなどの血は全く入っていない・・・。

つまり、赤龍帝の籠手以外何も無い。悪魔に転生するまでのキミは余りにも普通の高校生だった。加えて、悪魔に転生してなお歴代でも最弱と言われる素質の持ち

主だと聞いた時は思わず笑いが出たよ。

神器はライバル同士だというのに、宿主たる俺たちには天と地以上の差があります。」

この野郎……。

イッセー「それがどうしたってんだ!!」

ヴァーリ「だから、こう言う設定はどうだろうか？俺がキミの両親を殺して、キミは復讐者となるんだ。そうすればキミも多少は重厚な運命に身を委ねられるだろう？」

今から俺が君の両親を殺す。君の両親の人生もただ老いて死ぬよりも俺のような貴重な存在に殺される方が刺激的だ。どうだ？これで少しはマシになるだろう？」
イッセー「ぶっ殺すぞ！何で俺の両親がテメエの訳分かんねえ理由で殺されなくちやならねえんだよおお!!」

【Welsh Dragon over booster!!】

ヴァーリ「ははは。見ろ、兵藤一誠の力が一気に上がったぞ。」

アルビオン『神器は所有者の強い想いに応える。純粹な怒りがお前に向けられて

いるからだろう。』

ヴァーリ「なるほど。その点では彼の方が神器と相性がいいわけだ。」

俺はヴァーリに殴り掛かった。



蓮サイド

俺とフリードの戦いは続いていた。

だが先頭の経験値の差からか少し押されていた。

蓮「ちっ。思った以上にやるな。」

フリード「あたりまえっしょ。てめえらに負けるわけないじゃん。」

蓮「だったら、」

俺はドライバーにゲネシスコアを取り付けた。

レモンエナジー

ロックオン

ロックオン

ソイヤミックス

オレンジアームズ！花道オンステージ！**ジンバーレモンハーツ！**

蓮「ここからは俺のステージだ」

俺はソニックアローで切りかかった。

ガードされるが至近距離で矢を打った。

蓮「はあ!!」

フリード「ちょちょ、なにその急なパワーアップ！聞いてないんですけど!?!」
蓮「知ったことか!」

俺はレモンエナジーをソニックアローに装填した。

ロックオン

弓を弾きエネルギーを貯め矢を放った。

レモンエナジー

フリード「ぎいやあああああ。」

フリードの変身も解けたようだ。

フリード「ちっ！まじか。」

蓮「これで終わ!」

俺は急に体が重くなる感じがした。

フリード「やっと毒が効いてきやしたか。でもさすがにやばそうだし。ここらで
さいなら〜。」

蓮「ま、待て・・・。」

フリードはローズアタッカーを展開し逃げてしまった。

ちょうど黒歌も終わったようだ。

黒歌「ちよっと、大丈夫!？」

蓮「ああ、大丈夫だ。それとフリードだが、すまん逃がした。」

黒歌「そんなことより安静にこれぐらいの毒ならすぐ治せるにゃ。」

俺の体はすぐに楽になったが、フリードに逃げられたことで悔しさが心に残るの
だった。

ハイスクール D × D × 果物鎧武

著者 アルフォー

発行日 2023 年 4 月 12 日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/251216/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。
